らばず。有智無智をも論ぜず。平等の大悲ををこしてほとけになり給ひたれば。たゞふかく本願を信じて念佛申さば。一念須臾のあひだに。阿彌陀ほとけの來迎にあづかるべき也。むまれてよりこのかた女人を目にみず。酒肉五辛ながく斷じて。五戒十戒等かたくたもちて。やむ事なき聖人も。念佛に不足のおもひをなして。餘行をまじえ申さんにをきては。佛の來迎にあづからん事。千人が中に一人。万人が中に五三人などや候はんずらん。それも善導和尚は。千中無一とをほせられて候へば。いかゞあるべく候らんとをぼえ候。をよそ阿彌陀佛の本願と申す事はやうもなく。わが心をすませとにもあらず。不淨の身をきよめよとにもあらず。たゞねてもさめても。ひとすぢに御名をとなふる人をば。臨終にはかならずきたりてむかへ給ふなるものをといふ心に住して申せば。一期のをはりには。佛の來迎にあづからん事うたがひあるべからず。わが身は女人なれば。又在家のものなればといふ事なく。往生は一定とおぼしめすべき也。　問ていはく。心のすむ時の念佛と。妄心の中の念佛と。その勝劣いかむ。答ていはく。その功德ひとしくし。て。あへて差別なし。疑ていはく。この條なを不審なり。そのゆへは。心のすむ時の念佛は。餘念もなく一向極樂世界の事のみお

もはれ。彌陀の本願のみ案ぜらるゝがゆへに。まじふるものなければ。清淨の念佛なり。心の散亂する時は。三業不調にして。口には名號をとなへ。手には念珠をまはすばかりにてはこれ不淨の念佛也。いかでかひとしかるべき。答ていはく。このうたがひをなすは。いまだ本願のゆへをしらざるなり。阿彌陀佛は惡業の衆生をすくはんために。生死の大海に弘誓のふねをうかべ給へる也。たとへばおもき石。かろきあさがらをひとつふねにいれて。むかひのきしにとづくがごとし。本願の殊勝なることはいかなる衆生も。たゞ名號をとなふるほかは。別の事なき也。　問ていはく。一聲の念佛と。十聲の念佛と。功德の勝劣いかむ。答ていはく。たゞおなじ事也。　疑ていはく。この事又不審なり。そのゆへは。一聲十聲すでにかずの多少あり。いかでかひとしかるべきや。答。一聲十聲と申す事は最後の時の事なり。死する時一聲申すものも往生す。十聲申すものも往生すといふ事也。往生だにもひとしくば。功德なんぞ劣ならん。本願の文に。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者不取正覺。この文の意は。法藏比丘。われほとけになりたらん時。十方の衆生。極樂にむまれんとおもひて。南無阿彌陀佛と。もしは十聲。もしは一聲申さん衆生をむかへずば。ほとけになな

らじとちかひ給ふ。かるがゆへにかずの多少を論ぜず。往生の得分はおなじき也。本願の文顯然なり。なんぞうたがはんや。　問ていはく。最後の念佛と。平生の念佛と。いづれかすぐれたるや。答ていはく。たゞおなじ事也。そのゆへは。平生の念佛。臨終の念佛とて。なんのかはりめかあらん。平生の念佛の死ぬれば臨終の念佛となり。臨終の念佛ののぶれば。平生の念佛となる也。　難じていはく。最後の一念は。百年の業にすぐれたりとみえたり。いかむ。答ていはく。このうたがひは。この文をしらざる難なり。いきのとゞまる時の一念は。惡業こはくして善業にすぐれたり。善業こはくして惡業にすぐれたりといふ事也。たゞしこの申す人は念佛者にてはなし。もとより惡人の沙汰をいふ事也。平生より念佛申て往生をねがふ人の事をば。ともかくもさらに沙汰にをよばぬ事也。　問ていはく。攝取の益をかうふる事は。平生か臨終か。いかむ。答ていはく。平生の時なり。そのゆへは。往生の心まことにて。わが身をうたがふ事なくて。來迎をまつ人は。これ三心具足の念佛申す人なり。この三心具足しぬれば。かならず極樂にうまるといふ事は觀經の說なり。かゝる心ざしある人を。阿彌陀佛は八万四千の光明をはなちてらし給ふ也。平生の時てらしはじめて。最後まで

捨給はぬなり。かるがゆへに不捨の誓約と申す也。問ていはく。智者の念佛と。愚者の念佛と。いづれも差別なしや。答ていはく。ほとけの本願にとづかば。すこしの差別もなし。そのゆへは。阿彌陀佛ほとけになり給はざりしむかし。十方の衆生わが名をとなへば。乃至十聲までもむかへんとちかひをたて給ひけるは。智者をえらび。愚者をすてんとにはあらず。されば五會法事讚にいはく。不簡多聞持淨戒。不簡破戒罪根深。但使迴心多念佛。能令瓦礫變成金。この文の意は。智者も愚者も。持戒も破戒も。たゞ念佛申さば。みな往生すといふ事也。此心に住して。わが身の善惡をかへりみずほとけの本願をたのみて念佛申すべき也。此たび輪迴のきづなをはなるゝ事。念佛にすぎたる事はあるべからず。このかきをきたるものをみて。そしり謗ぜんともがらも。かならず九品のうてなに緣をむすび。たがひに順逆の緣むなしからずして。一佛淨土のともたらむ。抑機をいへば。五逆重罪をえらばず。女人闡提をもすてず。行をいへば。一念十念をもてす。これによて五障三從をうらむべからず。この願をたのみ。この行をはげむべき也。念佛のちからにあらずば。善人なをむまれがたし。いはんや惡人をや。五念には五障を消し。三念に三從を滅して。一念に臨終の來迎をかうぶらんと。行住

坐臥に名號をとなふべし。時處諸緣に此願をたのむべし。あなかしこ〳〵。

南無阿彌陀佛。　南無阿彌陀佛。

和語燈錄に出づ。

二〇　十二箇條問答

問ていはく。念佛すれば往生すべしといふ事。耳なれたるやうにありながら。いかなるゆへともしらず。かやうの五障の身までもすてられぬ事ならば。こまかにをしへさせ給へ。答ていはく。をよそ生死をいづる行一つにあらずといへども。まづ極樂に往生せんとねがへ。彌陀を念ぜよといふ事。釋迦一代の敎にあまねくすゝめ給へり。そのゆへは。阿彌陀佛本願ををこして。わが名號を念ぜんもの。わが淨土にむまれずば。正覺をとらじとちかひて。すでに正覺をなり給ふゆへに。この名號をとなふるものはかならず往生する也。臨終の時もろ〳〵の聖衆とともにきたりて。かならず迎接し給ふゆへに。惡業としてさふるものなく。魔緣としてさまたぐる事なし。男女貴賤をもえらばず。善人惡人をもわかたず。至心に彌陀を念ずるにむまれずといふ事な

しゝたとへばおもき石をふねにのせつれば。しづむ事なく。万里のうみをわたるがごとし。罪業のおもき事は石のごとくなれども。本願のふねにのりぬれば生死のうみにしづむ事なく。かならず往生する也。ゆめ〳〵わが身の罪業によりて。本願の不思議をうたがはせ給ふべからず。これを他力の往生とは申也。自力にて生死をいてんとするには。煩惱惡業を斷じつくして。淨土にもまいり菩提にもいたるとならふ。これは歩よりけはしきみちをゆくがごとし。　問ていはく。罪業をもけれども。智惠の燈をもて煩惱のやみをはらふ事にて候なれば。かやうの愚癡の身には。つみをつくる事はかさなれども。つくのふ事はなし。なにをもてこのつみをけすべしともおぼえず候はいかん。答ていはく。たゞ佛の御詞を信じてうたがひなければ。佛の御ちからにて往生する也。さきのたとへのごとく。ふねにのりぬれば。目しゐたるものも目あきたるものも。ともにゆくがごとし。智惠のまなこある者も。佛を念ぜざれば願力にかなはず。愚癡のやみふかきものも。念佛すれば願力に乘ずるなり。念佛する者をば。彌陀の光明をはなちてつねにてらして捨給はねば。惡緣にあはずして。必臨終に正念をえて往生する也。さらにわが身の智惠のありなしによりて。往生の定不定

をばさだむべからず。たゞ信心のふかゝるべき也。　問ていはく。世をそむきたる人は。ひとすぢに念佛すれば往生も得やすき事也。かやうの身には。あしたにもゆふべにも。いとなむ事は名聞。昨日も今日もおもふ事は利養也。かやうの身にて申さん念佛は。いかゞ佛の御意にもかなひ候べきや。答ていはく。淨摩尼珠といふ珠を。にごれる水に投れば。珠の用力にてその水きよくなるがごとし。衆生の心はつねに名利にそみて。にごれる事かの水のごとくなれども。念佛の摩尼珠を投れば。心の水をのづからきよくなりて。往生をうる事は。念佛のちから也。わが心をしづめ。このさはりをのぞきて後。念佛せよとにはあらず。たゞつねに念佛して。そのつみをば滅すべし。されば。むかしより在家の人。おほく往生したるためしいくばくかおほき。心のしづかならざらんにつけても。よく〳〵佛力をたのみ。もはら念佛すべし。　問ていはく。念佛は數遍を申せとすゝむる人もあり。又さもなくともなど申人もあり。いづれにかしたがひ候べき。答ていはく。さとりもあり。ならふむねもありて申さん事は。その心のうちしりがたければ。さだめがたし。在家の人のつねに惡緣にのみしたしまれ。身には數遍を申さずして。いたづらに日をくらし。むなしく夜をあかさん事。荒涼

の事にや候はんずらん。凡夫は緣にしたがひて退しやすき物なれば。いかにも〳〵はげむべき事也。されば處々に。おほく念々相續してわすれざれといへり。　問ていはく。念々にわすれざる程の事は。わが身にかなひがたくおぼえ候へ。又手には念珠をとれども。心にはそゞろ事をのみおもふ。この念佛は往生の業にはかなひがたくや候はんずらん。これをきらはれば。この身の往生は不定なるかたもありぬべし。答ていはく。念々にすてざれとをしゆる事は。人のほどにしたがひてすゝむる事なれば。わが身にとりて心のをよび身のはげまん程は。心にはからはせ給ふべし。又念佛の時。惡業のおもはるゝ事は。一切の凡夫のくせ也。さりながらも往生の心ざしありて念佛せば。ゆめ〳〵さはりとはなるべからず。たとへば親子の約束をなす人いさゝかそむく心あれども。さきの約束變改する程の心なければ。おなじ親子なるがごとし。念佛して往生せんと志して。念佛を行ずるに。凡夫なるがゆへに貪瞋の煩惱おこるといへども。念佛往生の約束をひるがへさざれば。かならず往生する也。　問ていはく。これ程にやすく往生せば。念佛するほどの人はみな往生すべきに。ねがふものもおほく。念ずるものもおほき中に。往生するものゝまれなるはなにのゆへ

とか思ひ候べき。答ていはく。人の心は外にあらはるゝ事なければ。その邪正さだめがたしといへども。經には三心を具して往生すと見えて候めり。この心を具せざるがゆへに。念佛すれども往生を得ざる也。三心と申は。一には至誠心。二には深心。三には迴向發願心也。はじめに至誠心といふは。眞實心也と釋して。內外とゝのほれる心也。何事をするにも。まことしき心なくては成ずる事なし。人なみ〳〵の心をもて。穢土のいとはしからぬをいとふよしをし。淨土のねがはしからぬをねがふ氣色をして。內外とゝのほらぬをきらひて。まことの志しをもて穢土をもいとひ淨土をもねがへとをしふる也。次に深心といふは。佛の本願を信ずる心也。われは惡業煩惱の身なれども。佛の願力にて。かならず往生するなりといふ道理をきゝてふかく信じて。つゆちりばかりもうたがはぬ心也。人おほくさまたげんとして是をにくみ。これをさへぎれども。これによりて心のはたらかざるを。ふかき信とは申也。次に迴向發願心といふは。わが修するところの行を迴向して。極樂にむまれんとねがふ心也。わが行のちから。わが心のいみじくて往生すべしとはおもはず。佛の願力のいみじくおはしますによりて。むまるべくもなきものも生るべしと信じて。いのちをはらば佛

必ずきたりてむかへ給べしとおもふ心を。金剛の一切のものにやぶられざるがごとく。この心をふかく信じて。臨終までもとほりぬれば。十人は十人ながらむまれ。百人は百人ながらむまるゝ也。されば。この心なきものは。佛を念ずれども順次の往生をばとげず。遠緣とはなるべし。この心のをこりたる事は。わが身にしるべし。人はしるべからず。　問ていはく。往生をねがはぬにはあらず。ねがふといへどもその心勇猛ならず。又念佛を賤しと思ふにはあらず。行じながらをろそかにしてあかしくらし候へば。かゝる身なれば。いかにもこの三心具したりと申べくもなし。されば。このたびの往生をばおもひたえ候べきにや。答ていはく。淨土をねがへどもはげしからず。念佛すれども心のゆるらかなる事をなげくは。往生の心ざしのなきにはあらず。心ざしのなき者はゆるらかなるをもなげかず。はげしからぬをもかなしまず。いそぐみちにはあしのをそきをなげく。いそがざるみちにはこれをなげかざるがごとし。又このめばをのづから發心すと申す事もあれば。漸々に增進してかならず往生すべし。日ごろ十惡五逆をつくれるものも。臨終にはじめて善知識にあひて往生する事あり。いはんや往生をねがひ。念佛を申してわが心のはげしからぬ事をなげかむ人

をば。佛もあはれみ菩薩もまもりて。障りをのぞき。知識にあひて。往生をうべき也。

問ていはく。念佛の行者は。つねにいかやうにかおもひ候べき。答ていはく。あるときには世間の無常なる事をおもひて。このよのいくほどなき事をしれ。ある時には。佛の本願をおもひてかならずむかへ給へと申せ。ある時には。人身のうけがたきことはりをおもひて。このたびむなしくやまん事をかなしめ。六道をめぐるに。人身をうる事は。梵天より糸をくだして。大海のそこなる針のあなをとをさんがごとしといへり。ある時は。あひがたき佛法にあへり。このたび出離の業をうへずば。いつをか期すべきとおもふべき也。ひとたび惡道に墮しぬれば。阿僧祇劫をふれども三寶の御名をきかず。いかにいはんやふかく信ずる事をえんや。ある時には。わが身の宿善をよろこぶべし。かしこきもいやしきも人おほしといへども。佛法を信じ淨土をねがふものはまれ也。信ずるまてこそかたからめ。そしりにくみて惡道の因をのみつくる。しかるにこれを信じこれを貴びて。佛をたのみ往生を志す。これひとへに宿善のしからしむる也。たゞ今生のはげみにあらず。往生すべき期のいたれる也とたのもしくよろこぶべし。かやうの事をおりにしたがひ。事によりておもふべき也。　問

ていはく。かやうの愚癡の身には聖教をも見ず。惡緣のみおほし。いかなる方法をもてか。わが心をまもり。信心をもよほすべきや。答ていはく。そのやう一つにあらず。あるひは人の苦にあふをみて。三途の苦をおもひやれ。あるひは人のしぬるを見て。無常のことはりをさとれ。あるひはつねに念佛してその心をはげませ。あるひはつねによき友にあひて。心をはぢしめられよ。人の心は。おほく惡緣によりてあしき心のをこる也。されば惡緣をばさり。善緣にちかづけといへり。これらの方法ひとしなならず。時にしたがひてはからふべし。　問ていはく。念佛の外の餘善をば。往生の業にあらずとて。修すべからずといふ事あり。これはしかるべしや。答ていはく。たとへば人のみちをゆくに。主人一人につきて。おほくの眷屬のゆくがごとし。往生の業の中に念佛は主人也。餘の善は眷屬也。しかれば餘善をきらふまてはあるべからず

　問ていはく。本願は惡人をきらはねばとて。このみて惡業をつくる事はしかるべしや。答ていはく。佛は惡人をすて給はねども。このみて惡をつくる事。これ佛の弟子にはあらず。一切の佛法に惡を制せずといふ事なし。惡を制するにかならずしもこれをとゞめ得ざるものは。念佛してそのつみを滅せよとすゝめたる也。わが身の

たへねばとて。佛にとがをかけたてまつらん事はおほきなるあやまり也。わが身の惡をとゞむるにあたはずば。ほとけ慈悲をすて給はずして。このつみを滅してむかへ給へと申べし。つみをばたゞつくるべしといふ事は。すべて佛法にいはざるところ也。たとへば人のおやの。一切の子をかなしむに。其中によき子もあり。あしき子もあり。ともに慈悲をなすといへども。惡を行ずる子をば目をいからかし。杖をさゝげていましむるがごとし。佛の慈悲のあまねき事をきゝては。つみをつくれとおぼしめすといふおもひをなさば。佛の慈悲にももれぬべし。惡人までをもすて給はぬ本願としらんにつけては。いよ〳〵佛の知見をばはづべし。かなしむべし。父母の慈悲あればとて。父母のまへにて惡を行ぜんに。その父母よろこぶべしや。なげきながらすてず。あはれみながらにくむ也。佛も又もてかくのごとし。　問ていはく。凡夫は心に惡をおもはずといふ事なし。この惡を外にあらはさざるは。佛をばはぢずして人目をはゞかるといふ物なり。これは心のまゝにふるまふべしや。答ていはく。人の歸依を得むとおもひて。外をかざらんはとがあるかたもやあらん。惡をしのばんがためにたとひ心におもふとも。ほかまではあらはさじとおもひて。をさへん事はず

なはち佛に耻る心也。とにもかくにも惡をしのびて。念佛の功をつむべき也。習ひさきよりあらざれば。臨終正念もかたし。常に臨終のおもひをなして。臥ごとに十念をとなふべし。されば。ねてもさめてもわするゝ事なかれといへり。おほかたは世間も出世も。道理はたがはぬ事にて候也。心ある人は。父母あはれみ。主君もはぢくむにしたがひて。惡事をばしりぞき。善事をばこのまんとおもへり。惡人をもすて給はぬ本願ときかんにもまして。善人をばいかばかりか。よろこび給はんと思ふべき也。一念十念をもむかへ給ふときかば。いはんや百念千念をやとおもひて。心のをよび。身のはげまれん程ははげむべし。されば。とてわが身の器量のかなはざらんをばしらず。佛の引接をばうたがふべからず。たとひ七八十のよはひを期すとも。おもへば夢のごとし。いはんや老少不定なれば。いつをかぎりとおもふべからず。さらに後を期する心あるべからず。たゞ一すぢに念佛すべしといふ事。そのいはれ一にあらず。

これを見むおり〳〵ごとにおもひいてゝ

南無阿彌陀佛とつねにとなへよ

和語燈錄に出づ。

二一　十二問答

問曰。八宗九宗の外に。淨土宗をたつる事自由の條かなど。餘宗の人の申候をば。いかゞ申し候べき。答。宗の名をたつる事は。佛の說にあらず。みづから心ざすところの經敎につきて。そのをしゆる義をさとりきはめて。宗の名をば判ずる事也。諸宗の習みなもてかくのごとし。いま淨土宗の名をたつる事は。淨土の正依の經につきて。往生極樂の義をさとりきはめておはします先達の。宗の名をばたて給へる也。宗のをこりをしらざるものゝ。左樣の事を申候也。　問曰。法華眞言等をば。雜行にはいるべからずと人々の申候をば。いかゞこたへ候べき。答。惠心先德。一代聖敎の要文をあつめて。往生要集をつくり給へる中に十門をたつ。その第九の往生諸業門に。法華眞言等の諸大乘經をいれ給へり。諸行と雜行と言異にして意おなじ。いまの難者は。惠心の先德にまさるべからざるもの也。　問曰。餘佛餘經につきて。善根を修せん人に結緣助成し候はん事は。雜行と申候べきか。答。わが心彌陀ほとけの本願に乘じ。決定往生の信をとるうへには。他の善根に結緣助成せん事は。またく雜行になるべから

ず。わが往生の助業となるべき也。他の善根を隨喜讚嘆せよと釋し給へるをもて。意うべき事也。　問曰。極樂に九品の差別候御事は。阿彌陀ほとけのかまへさせ給へる事にて候やらん。答。極樂の九品は。彌陀の本願にあらず。四十八願の中にもなし。これは釋尊の巧言也。善人惡人一所にむまるゝといはゞ。惡業のものども慢心ををこすべきがゆへに九品の差別をあらせて。善人は上品にすゝみ。惡人は下品にくだると說給へる也。いそぎまいりて見るべし。　問曰。持戒の行者の念佛の數遍のすくなく候はんと。破戒の行人の念佛の數遍のおほく候はんと。往生の後の位の淺深。いづれかすゝみ候べきや。答。居てまします疊ををさへての給はく。この疊のあるにまりてこそやぶれたるかやぶれざるかといふ事はあれ。つや〳〵なからんたゝみをば。なにとか論ずべき。末法の中には。持戒もなく破戒もなし。たゞ名字の比丘ばかりありと。傳敎大師の末法燈明記にかき給へるうへには。なにと持戒破戒の沙汰をばすべきぞ。かゝるひら凡夫のために。をこし給へる本願なればとて。いそぎ〳〵名號を稱すべし。　問曰。念佛の行者等日別の所作にをいて。こゝろをたてゝ申す人も候。又心に念じてかずをとる人も候。いづれかよく候べき。答。それは口にてとなふるも

名號心にて念ずるも名號なれば。いづれも往生の業とはなるべし。たゞし。佛の本願は。稱名の願なるがゆへに。聲をたてゝとなふべき也。このゆへに經には令聲不絕具足十念ととき。釋には稱我名號下至十聲との給へり。耳にきこゆる程は。高聲念佛にとる也。さればとて機嫌をしらず。高聲なるべきにはあらず。地體は聲を出さんとおもふべき也。　問曰。日別の念佛の數遍。相續にいる程は。いかゞはからひ候べき。答。善導の御釋によるに。一万已上は相續にて候べし。但し一万遍をもいそぎ申て。さてその日をくらさん事はあるべからず。一万遍なりとも。一日一夜の所作とすべき也。總じては一食の間に。三度ばかり思ひいださんは。よき相續にてあるべし。それは衆生の根性不同なれば。一準なるべからず。心ざしだにふかければ自然に相續はせらるゝ也。　問曰。禮讚の深心の中には。十聲一聲必得往生。乃至一念無有疑心と釋し。又疏の深心の中には念々不捨者。是名正定之業と釋し給へり。いづれかわが分には。おもひさだめ候べき。答。十聲一聲の釋は。念佛を信ずる機。念々不捨者の釋は。念佛を行ずる樣也。かるがゆへに信をば一念にむまるととりて。行をば一形にはげむべしとすゝめ給へる釋也。又大意は。一發心已後。誓畢此生。无有退轉。唯以淨土爲期の釋を。

本とすべき也。　問曰。本願の一念は。尋常の機にも。臨終の機にも。ともに通じ候べきか。答。一念の願は。いのちつゞまりて。二念にをよばざる機のため也。尋常の機に通ずべくば。上盡一形の釋あるべからず。この釋をもて意うるに。かならずしも一念を本願といふべからず。念々不捨者。是名正定之業。順彼佛願故と釋し給へり。この釋は數遍つもらんも。本願とはきこえたれば。たゞ本願にあふ機の。遲速不同なれば。上盡一形下至一念とをこし給へる本願也と意うべき也。かるがゆへに念佛往生の願とこそ。善導は釋し給へ。　問曰。自力他力の事は。いかゞ意え候べき。答。源空は殿上へまいるべき器量にてはなけれども。上よりめせば二度までまいりたりき。これはわがまいるべきしなにてはなけれども。上の御ちから也。まして阿彌陀ほとけの御ちからにて。稱名の願にこたへて。來迎せさせ給はん事は。なんの不審かあるべき。わが身つみをもくて。無智なれば。佛もいかにしてかすくひ給はんなどおもはんものは。つや〳〵佛の願をしらざるもの也。かゝる罪人どもをやす〳〵とたすけすくはん料にをこし給へる本願の名號をとなへながら。ちりばかりもうたがふ心はあるまじき也。十方衆生のことばの中に。有智無智。有罪無罪。善人惡人。持戒破戒。男子女人。三

寶滅盡の後の百歳までの衆生みなこもる也。かの三寶滅盡の時の念佛者と。當時の御房達とくらぶれば。當時の御房達は。佛のごとし。かの時の人のいのちはたゞ十歳也。戒定惠の三學たゞ名をだにもきかず。惣じていふばかりなきものどもの。來迎にあづかるべき道理をしりながら。わが身のすてられまいらすべき樣をば。いかにしてか案じ出すべき。たゞ極樂のねがはしくもなく。念佛の申されざらん事のみぞ。往生のさはりにては有べけれ。かるがゆへに他力本願ともいひ。超世の悲願ともいふ也。編者曰。拾遺古德傳には。此問答の問をば高階時遠入道西仁とせり。

問曰。至誠等の三心を具し候べき樣をば。いかゞおもひさだめ候べき。答。三心を具する事は。たゞ別の樣なし。阿彌陀ほとけの本願に。わが名號を稱念せば。かならず來迎せんとおほせられたれば。引接せられまいらせんずるぞと。ふかく信じて心に念じ。口に稱するにものうからず。ずてに往生したる心地して。最後の一念にいたるまでたゆまざるものは。自然に三心は具足する也。又在家の者どもは。これ程までおもはざれども。たゞ念佛申す者は極樂にむまるなればとて。つねに念佛をだにも申せば。そらに三心は具足する也。されば。こそいふにかひなきものどもの中にも。神妙なる往生をばする事にてあれ。編者曰。拾遺古德傳には。此問答の問をば室の泊の修行者とせり。

問曰。臨終の一念は。百年の業にすぐれたりと申すは。平生の念佛の中に。臨終の一念ほどの念佛をば。申いだし候まじく候やらん。答。三心具足の念佛はおなじ事也。そのゆへは。觀經にいはく。具三心者必生彼國といへり。必の文字のあるゆへに。臨終の一念とおなじ事也。

和語燈錄に出づ。了惠曰く。この問答の問をば。進行集には。禪勝房の問といへり。ある文には隆寛律師といへり。たづぬべしと。今勅修御傳並に九卷傳に載する禪勝房との問答を見るに。此十二問答に出せる所と同きもの多し。だゞ次にかゝぐる二條は九卷傳にのみ出づるも餘の書には見へず。又西方指南抄には此十二問答中最後の一問を略し。十一箇問答として之を錄せり。文字亦異同あり。

一の疑に三心の事を尋申けるに。上人の給はく。三心を具する者は必彼國に生と說給へり。此三心は本願の至心信樂欲生我國の文を成就する文なり。然則念佛せん人は。此三心を具して念佛すべき也。一に至誠心といふは。阿彌陀佛を賴奉る心也。二に信樂といふは。常に名號を唱て往生を疑ぬなり。三に迴向發願心といふは。往生して衆生を利益せんと思ふ心なり。譬を以て云はゞ。人有て一の太刀をもちたらんに。此太刀は御身の造り給へるかと人問はゞ。我は手づつにて何事もせぬ者にて候。人の

たまひて候也と答へば。人も參らせたれば。わどのゝ爲には財かと又とへば。さ候と答ふ。太刀をもふくるは至誠心也。此太刀は大事の物也。あだにせじと思ふは深心也。さてわれにももち物を切らんは迴向發願心也。しかのごとく。本願にあふは至誠心也。名號を持て常に唱て。餘行の人に云ひ破られざるは深心也。往生せんと思ふは迴向心也。又女人に三心を心得ん時は。御前の袋を一つもふけてましまさんに。あけて見れば万の財を入たり。袋をまうくるは至誠心也。此袋には大事の物を入たり。あだにせじとおもふは深心也。中にある物を取出し要事につかふは迴向心也。しかの如く。本願にあふは袋をもふけたるがごとし。此名號の中には。阿彌陀佛の初發心より乃至佛にならせ給て。六度万行一切の功德を造り集めて。名號に納めて。衆生に與へ給へる名號なれば。をろそかにせじとて。別解別行の人にも云破られずして。南無阿彌陀佛と唱るは。不思議の本願なるによりて。かゝる罪人どもの淨土へ迎へられ。生死を離れずらんと思堅めて。若手はふさがらば數はとらずとも。命終らんまで口に常に唱るを深心と云也。又のやうは譬へば人の敵を持たらんに。敵はつはものなるを。我は弱くして討に及ばざらんに。我敵に勝たる兵もの。我を賴まば討てとらせん

といはむに。悅て賴て宮仕をせば。約束を違へず敵を討也。討者を賴むは至誠心也。宮仕するは深心也。敵を討は迴向發願心也。しかのごとく。我等衆生は無始より已來。惡業煩惱の敵に責られて。六道四生に輪迴して生死を離べきやうなきに。阿彌陀佛の。我に歸し我を賴まば。煩惱の敵を討て得させんと御誓ひあれば。佛を賴奉るは至誠心也。名號を唱て怠なく。佛に宮仕し奉るは深心也。最後臨終に來迎に預りて。生死を離るは迴向心也。三心具足する計安きことはなしと。人には敎へよとぞ仰られける。又一の疑に云。三心を具すべき次第を。ケ樣に習參らせ侍ぬれば。是の身には三心は具し侍べし。在家の人の三心の義もしらず。習候はて。只念佛計申侍らんは。此三心は具すまじく侍やらんと。上人曰。三心といふは。一向專修の念佛者に成る道を敎へたる也。無智の罪人也とも。一向專修の念佛者になりぬれば。皆悉く三心を具足して往生せん事は決定也。故に習知りて一向專修になる人もあり。三心といふ名だにもしらざれども。一向專修の念佛者に成人もあり。一向に佛の願を賴み奉るは至誠心也。深く信じて名號を唱て念々相續して。畢命を期として退轉なきは深心也。往生を願ふは迴向發願心也。譬へば手づゝなる者の手さきのしたる物を得たるがごとし。衆

生は手づゝにて万の功德を造らざれども阿彌陀佛万の功德を造り集めて名號に納めて衆生に與へ給つる也又人の子は幼れども親の慈悲をもて万の財を儲て子に讓るがごとし三心の敎文多けれども如此心得るとぞ仰られける。

九卷傳に出ヅ。

二二　東大寺十問答

一問釋迦一代の聖敎をみな淨土宗におさめ候か又三部經にかぎり候か答八宗九宗みないづれをもわが宗の中におさめて聖道淨土の二門とはわかつ也聖道門に大小あり權實あり淨土門に十方あり西方あり西方の門に雜行あり正行あり正行に助行あり正定業ありかくして聖道はかたし淨土はやすしと釋しいるゝ也宗をたつるをもむきをしらぬものゝ三部經にかぎるとはいふなり。

二問正雜二行ともに本願にて候か答念佛は本願也十方三世の佛菩薩にすてられたる衆せ者をたすけんとて五劫まで思惟し六道の苦機にゆづり是をたよりにて

すくはんと支度し給へる本願の名號也ゆめ〳〵雜行本願といふ者は佛の五智をうたがひて邊地にとゞまり見佛聞法の利益にもるゝ者也是は誑惑の者の道心もなきが山寺法師などにほめられんとて佛意をばかへりみずいひいだせることなり。

三問三心具足の念佛者は決定往生歟答決定往生する也三心に智具の三心あり行具の三心あり智具の三心といふは諸宗修學の人が本宗の智をもては信をとりがたきを經論の明文を出し解釋のをもむきをもて念佛に信をとらしめんとてとき給へる也行具の三心といふは一向に歸するは至誠心也疑心なきは深心也往生せんとおもふは廻向心也かるがゆへに一向念佛してうたがふおもひなく往生せんと思ふは行具の三心也五念四修も一向に信ずる者には自然に具する也。

四問念佛せんにはかならず念珠をもたずともくるしかるまじく候か答かならず念珠を持べき也世間のうたをうたひ舞をまふすらその拍子にしたがふ也念珠をばかせにて舌と手とをうごかす也たゞし無明を斷ぜざらんものは妄念をこるべし世間の客と主とのごとし念珠を手にとる時は妄念のかずをとらんとは約束せ

ず。念佛のかずとらむとて。念佛のあるじをすへつるうへは。念佛は主。妄念は客也。さればとて心の妄念をゆるされたるは。過分の恩也。それにあまさへ。口に樣々の雜言をして。念珠をくりこしなどする事。ゆゝしきひが事なり。

五問。此大佛かく仰ぎまいらせて候へば。この大佛の御はからひにて。淨土にもをくりつけさせ給ふべく候か。答。此事沙汰の外の事也。三寶をたつるに三あり。一に一體三寶といふは。法身の理のうへに三寶の名をたつる也。万法みな法身より出生するがゆへ也。二に別相三寶といふは。十方の諸佛は佛寶也。その智惠をよび所說の經敎は法寶也。三乘の弟子は僧寶也。三に住持三寶といふは。畫像木像は佛寶也。かきつけたる經卷は法寶也。剃髮染衣は僧寶也。もし大佛むかへ給はゞ。三種三寶の次第みだるべし。そのゆへは。住持と別相と分別なければなり。又本尊は娑婆にとゞまりて。行者は西方にさらん事。存の外の事也。たゞし淨土の佛のゆかしさに。そのかたちをつくりて。眞佛の思ひをなすは。功德をうる事也。

六問。有智の人のよのつねならんと。無智の人の外に道心ありとみゑ候はんと。いづれすぐれ候べき。答。有智のものゝ道心なからんは。無智の人の道心あらんには。千重

万重のをとり也。かるがゆへに無智の人の念佛は。本願なれば往生すべし。有智の者の道心なからんは。あるひは不淨說法をし。あるひは虛說妄談をして。決定地獄におつべし。たゞし無智の人の道心は。ひが事を實とおもひて。おそるまじき事をばをそれ。おそるべき事をばをそれぬ也。有智の人の道心あるは。道をしりてやすくゆく也。盲目の人を明眼の人にくらべん事あさましき事也。道心おなじ事ならば。有智の人はなを無智の人に万億倍すぐるべきなり。無智の人の道心はわびてがてらの事也。

七問。念佛申人は。かならず攝取の益にあづかり候か。答。しかなり。

八問。攝取の光明は。一度てらしてはいつも不退なると申人の候は。一定にて候か。答。この事おをきなるひが事也。念佛のゆへにこそてらすひかりの。念佛退轉してのちはなにものをたよりにてはてらすべきぞ。さやうにてあるならば。念佛一遍申さぬものやはある。されども往生する者はすくなくなく。せざるものはおほきなり。現證たれかうたがはん。

九問。本願には十念成就には一念と候は。平生にて候か。臨終にて候か。答。去年申候き。聖道にはさやうに一行を平生に修しつれば。罪卽時に滅して。のちに又相續せざれ

ども成佛すといふ事あり。其はなを緣をむすばしめんとて。佛の方便してとき給へる事也。順次の義にはあらず。花嚴禪門眞言止觀などの。至極甚深の法門こそ。さる事はあれ。これは衆生もとより懈怠のものなれば。一度申をきてのち。申さずとも。往生するおもひに住して。數遍を退轉せん事は。くちおしかるべし。十念は上盡一形に對する時の事也。をそく念佛にあひたらん人は。いのちつゞまりて。百念にもをよばぬは。十念也。十念にもをよばぬは。一念也。此源空が衣もやきすてゝこそ。麻のゆかりを滅したるにてはあらめ。これがあらんかぎりは。麻の滅したるにてはなき也。過去無始よりこのかた。罪業をもて成せる。身もものごとく。心ももとの心ならば。なにをか業成じ。罪滅するしるしとすべき。罪滅する者は無生をう。無生をうる者は金色のはだへとなる。彌陀の願に金色となさんとちかはせ給へども。念佛申人たれか臨終以前に金色となる。たゞ物さかしからで。一發心已後無有退轉の釋をあふひて臨終をまつべき也。

十問。臨終の來迎は。報佛にておはしまし候か。答。念佛往生の人は。報佛の迎にあづかる。雜行の人々往生するは。かならず化佛の來迎にて候也。念佛もあるひは餘行をまじへ。あるひは疑心をいさゝかもまじふる者は。化佛の來迎をみて。報佛をかくしたてまつるもの也。

拾遺和語燈錄に出づ。了惠曰く。これは建久二年三月十三日東大寺聖人奉問源空上人御答也と。

二三　諸問答

ある時問ていはく。（編者曰。東宗要に勢觀上人の問とあり。）智惠のもし往生の要事となるべくば。正直におほせをかうぶりて。修學をいとなむべし。又たゞ稱名不足あるべからずば。そのむねを存すべく候。たゞいまのおほせを如來金言と存べく候。答ていはく。往生の業は。これ稱名といふ事釋文分明也。有智無智をきらはずといふことはりまた顯然也。しかれば。往生のためには稱名足ぬとす。學問をこのまんとおもはんよりは。たゞ一向念佛して往生をとぐべし。彌陀觀音勢至にあひたてまつらん時。いづれの法文か達せざらん。かのくにの莊嚴。晝夜朝暮に甚深の法門をとく也。但し念佛往生のむねをし

らざらん程はこれを學すべし。もしこれをしりなば。いくばくならざる智惠をもとめて。稱名のいとまをさまたぐべからず。

ある時問ていはく。人おほく持齋をすゝむ。この條いかん。答ての給はく。尼法師の食の作法は。もともしかるべしといへども。當世は機すでにをとろへたり。食すでに減じたり。この分際をもて一食せば。心ひとへに食事をおもひて念佛しづかならじ。菩提心經にいはく。食菩提をさまたげず。心よく菩提をさまたぐといへり。そのうへは自身をあひはからふべきなりと。

ある時問ていはく。往生の業にをいては。おもひさだめをはりぬ。たゞし一期の身のありさまをば。いかやうにか存じ候べき。答ての給はく。僧の作法は大小の戒律あり。しかりといへども末法の僧これにしたがはず。源空これをいましむとも。たれの人かこれにしたがふべき。たゞ詮ずるところは。念佛の相續するやうにあひはからふべし。往生のためには。念佛すでに正業なり。このむねをまもりて。あひはげむべきなり。

ある人問ていはく。つねに廢惡修善のむねを存して念佛すると。つねに本願のむね

をおもひて念佛すると。いづれかすぐれて候。答ての給はく。廢惡修善は。これ諸佛の通誡なりといへども。當世のわれらこと〴〵く違背せり。若別意の弘願に乘ぜずば。生死をはなれがたきものか。

ある人問ていはく。稱名の時心をほとけの相好にかけん事。いかやうにか候べき。答ての給はく。しからず。たゞ若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生とおもふばかり也。われらが分際をもて。佛の相好を觀ずともさらに如說の觀にはあらじ。たゞふかく本願をたのみて。口に名號をとなふるこの一事のみ假令ならざる行也。

ある人問ていはく。善導本願の文を釋し給ふに。至心信樂欲生我國の安心を略したまふ事。なに心かあるや。答ての給はく。衆生稱念必得往生としりぬれば。自然に三心を具足するゆへに。このことはりをあらはさんがために略し給へる也。

ある人問ていはく。毎日の所作に。六万十万等の數遍をあてゝ不法なると。二万三万の數遍をあてゝ如法なると。いづれをか正とすべき。答ての給はく。凡夫のならひ二万三万をあつといふとも。如法の義あるべからず。たゞ數遍のおほからんにしかず。

詮ずるところ心をして相續せしめんがため也。かならずしもかずを沙汰するを要とするにはあらず。たゞ常念のためなり。數遍をさだめざるは懈怠の因緣なるがゆへに。數遍をすゝむる也。編者曰。百四十五箇條問答にも見ゆ。

ある人問ていはく。上人の御房の申させたまふ御念佛は。念々ごとにほとけの御意にあひかなひ候らんとおぼえ候。智者にてましませば。くはしく名號の功德をもしろしめし。あきらかに本願のやうをも御意得あるがゆへにと。答ての給はく。なんぢ本願を信ずる事まだしかりけり。彌陀如來の本願の名號は。木こりくさかりなつみみづくみのたぐひごときのものゝ。內外ともにかけて。一文不通なるが。となふれば。かならずむまれなんと信じて。眞實に欣樂して。つねに念佛申を最上の機とす。もし智惠をもて生死をはなるべくば。源空なんぞ聖道門をすてゝ。この淨土門におもむくべき。まさにしるべし。聖道の修行は智惠をきはめて生死をはなれ。淨土門の修行は。愚癡にかへりて極樂にむまると。

和語燈錄に出づ。了惠曰く。已上信空上人の傳說なり。進行集よりいでたりと。淨土隨聞記亦之に同じ。但し彼の記には此中の最後の一問を缺きて。かへりて次の二問をかゝぐ。

或人問曰。眞言所修阿彌陀供養法。此亦可爲往生正行耶。師答曰。不然。佛體雖一。隨教其意不同。眞言教阿彌陀是己心如來。不可外覓者。淨教所謂阿彌陀佛乃是法藏比丘發願成就佛體在西方者。其意大異。不可以一混焉。況彼成佛之法。此往生之教。不可一同也。

或人問曰。善導和尙意以聖道教爲方便敎。出在何文。師答曰。法事讚云。如來出現於五濁。隨宜方便化羣萌。或說多聞而得度。或說小解證三明。或敎福惠雙除障。或敎禪念坐思量。種種法門皆解脫。無過念佛往西方。已上是也。難曰。已言種種法門皆解脫。何以此文爲方便證據乎。答曰。上云隨宜方便化羣萌。次云種種法門皆解脫。至下云無過念佛往西方。明知念佛往生之外皆爲方便說也。

出于淨土隨聞記。

一。或天台宗の人問奉て云。佛敎多門にて生死を出る道一にあらず。其中聖道門は法花に須臾聞之卽得究竟ともいひ。取證如反掌とも云へる一類頓悟の類は暫くこれを指置。敎のおきてに付て次位の階級を定め。修行の方軌を明らめたるには。十信万劫の修行を送て後。無生忍の位には叶と談ぜり。然を淨土門に十惡五逆をつくる罪惡の凡夫なれども。知識の敎をうけて。纔に一念十念の口稱念佛によりて。忽に報土

得生の益を得て。刹那の間にたやすく無生忍の位に叶といへる事。大に不審にて候。抑六字の名號にていかなる功力の候へば。万行にこえてかゝる不思議の奇特をば備候やらんと。上人答給はく。彌陀因位の時一切衆生に代りて。兆載永劫の間六度万行諸波羅蜜の一切の行を修して。其功德を悉く六字の名號に納られたる間。万行万善諸波羅蜜。三世十方の諸佛の功德の。六字の名號にもれたるはなし。故に是を極善最上の法とも名く。されば惠心僧都の。因行果德。自利々他。內證外用。依報正報。恆沙塵數無邊法門。十方三世諸佛功德。皆悉攝在六字之中。是故稱名功德無盡と判じ給へるは此心也。彌陀の本願に。此名號を唱て極樂に生れんと願はん衆生をば。聖衆と共に來て迎接すべし。此願若成就すまじくば衆生と共に地獄には墮とも。佛にならじと四十八のちかひを立給しに。此願已に成就する故に。成佛し給て十劫以來也。故に極惡最下の罪人も。此名號を唱ふれば。万行万善の功德を得。因位の本願にこたえて迎接し給はん。故に本願不思議の力にて。須臾の間に報土に生て。刹那の程に無生の悟を開ん事なにの疑かあるべきや。一念に無上の功德を得る名號也。更に一念十念の功少しとは不可思とぞ仰られける。

九卷傳に出づ。

二四　叡空上人との問答

ある時上人。往生の業には稱名にすぎたる行あるべからずと申さるゝを。慈眼房は觀佛すぐれたるよしをの給ければ。稱名は本願の行なるゆへにまさるべきよしをたて申たまふに。慈眼房。又先師良忍上人も觀佛すぐれたりとこそおほせられしがとの給けるに。上人。良忍上人もさきにこそむまれ給たれと申されけるとき。慈眼房腹立したまひければ。善導和尙も上來雖說定散兩門之益。望佛本願意在衆生一向專稱彌陀佛名と釋したまへり。稱名すぐれたりといふことあきらかなり。聖敎をばよく〳〵御覽じ給はでとぞ申されける。

勅修御傳に出づ。決疑鈔裏書に載するところ文稍略せり。

二五　顯眞法印との問答

このたびいかゞして生死をはなれ侍るべきとの給に。上人。いかにも御はからひに

はすぐべからずと。法印申されけるは。先達にましませば。定めて思定め給つる旨あるらん。しめしたまへとなりとの給へば。上人。自身の爲には。いさゝか思定めたる旨候。たゞはやく極樂の往生をとげ候べしと申されければ。法印順次の往生とげがたきゆへに。この尋をいたす。いかゞしてこのたび。たやすく往生をとぐべきやとの給ふ時。上人答たまはく。成佛はかたしといへども。往生は得やすし。道綽。善導の心によれば。佛の願力を強緣として。亂想の凡夫淨土に往生すと。

淨土隨聞記に出づ。但し彼記の文は漢語なれども今は勅修御傳に改めて和語となしたるものを掲げつ。又十六門記に出だすところ是と稍同からざれば重れて錄するに次の如し。

有時。法眼。上人に對面して。いまだ罪障を斷ぜざる散亂の凡夫いかゞして極樂に順次往生すべきやと問給ふに。上人。成佛は甚難く往生は尤易し。善導和尙の御釋をもて三部經を拜見するに。佛の本願力を強緣として。亂想の凡夫報佛の淨土に生ず。自力聖道の執情をもて他力淨土の眞門を疑ことなかれと答給。云云。

十六門記に出たり。たゞし彼記には顯眞法眼とあり。

二六　靜嚴法印との問答

延曆寺東塔竹林房靜嚴法印。吉水の禪房にいたりて。いかゞして此たび生死をはなれ候べきとの給ければ。源空こそ尋申たく侍れと答申されけるに。法印又決擇門はさる事にて。出離の道にをきては。智德いたり道心ふかくましませば。定めて安立の義候らんと申されれば。源空は彌陀の本願に乘じて。極樂の往生を期する外はまたく知ことなしと。法印申さるゝやう。所存もかくのごとし。美言をうけたまはりて。愚案をかたくせんがために尋申す所なり。但妄念のきをひおこり侍るをば。いかゞし候べきと。上人の給はく。是煩惱の所爲なれば。凡夫の力及べからず。たゞ本願を憑て名號を唱ふれば。佛の願力に乘じて。往生をうと知れりと。

勅修御傳に出づ。拾遺古德傳粗之に同じ。

二七　明遍僧都との問答

明遍問たてまつりての給はく。末代惡世のわれらがやうなる罪濁の凡夫。いかにし

てか生死をはなれ候べき。上人答ての給はく。南無阿彌陀佛と申して。極樂を期するばかりこそ。しえつべき事と存じて候へ。

僧都のいはく。それは形の様に。さ候べきかと存じて候。それにとりて。決定をせん料に申つるに候。それに念佛は申候へども。心のちるをばいかゞし候べき。上人答ていはく。それは源空もちからをよび候はず。

僧都のいはく。さてそれをばいかゞし候べき。上人のいはく。ちれども名を稱すれば。佛の願力に乘じて。往生すべしとこそ意えて候へ。ただ詮ずるところ。おほらかに念佛を申候が第一の事にて候也。

僧都のいはく。かう候〳〵。これうけ給はりにまいりつるに候と。（これより前後には。いかも詞なくていでられけり。）

上人。又僧都退出の後。當座のひじりたちにかたりての給はく。欲界散地にむまれたるものはみな散心ありたとへば人界の生をうけたる物の。目鼻のあるがごとし。散心をすてゝ往生せんといはん事。そのことはりしかるべからず。散心ながら念佛申すものが往生すればこそ。めでたき本願にてはあれ。この僧都の念佛申せども。心の

ちるをばいかゞすべきと不審せられつるこそ。いはれずおぼゆれと云云。

和語燈錄に出づ。勅修御傳。拾遺古德傳。ほゞ之に同じ。

二八　諸弟子との問答

一。有時。鎮西の聖光房と聖覺と但兩人。上人の御前にて淨土の法門聽聞しける時。聖光房尋申て云。仰て本願を信じ。實に往生を願ずれども。妄念鎮に起て止難。散亂彌倍て靜ならず。此の條如何が候や。上人答給はく。妄念餘念をもかへりみず。散亂不淨をもいはず。唯口に名號を唱よ。もし能く稱名すれば。佛名の德として妄念自止。散亂自靜り。三業自調て。願心自發なり。然れば願生の心の少にも南無阿彌陀佛。散亂の增時も南無阿彌陀佛。妄念の起時も南無阿彌陀佛。善心の起時も南無阿彌陀佛。不淨の時も南無阿彌陀佛。清淨の時も南無阿彌陀佛。三心の闕たるにも南無阿彌陀佛。三心具するにも南無阿彌陀佛。三心現起するにも南無阿彌陀佛。三心成就するにも南無阿彌陀佛。これすなはち決定往生の方便なり。心腑に納て忘るゝことなかれ。聖覺尋て云。今の御義のごときは。三心を闕といへども。唯佛名を唱れば。名號の德として。三心

發得して往生すべしと聞へ候。然に和尙。虛假心の行人は。晝夜十二時に。急に走急に作こと。頭然を拂がごとく勇猛に勤行すとも。往生不可なりと。定判し給へり。彼此の御義如何が合せんや。聖光房の云。予が所存も亦爾りと。上人答て曰。此不審は今の所談にあらず。これは本より三心を具すれども。歷緣對境の時に。如法ならざる。其治方を述なり。所引の和尙の解釋は。一向に三心の闕たるを嫌。意趣もとも巧なり。是故に難にあらずと仰ければ。弟子等兩人ながら。信仰の餘に。申し演ん詞もなく。唯一同に阿と云き。

十六門記に出づ。

一。或時。聖光房。法力房。安樂房。侍けるに。安樂房。上人に尋申て云。我等ごときの輩。かたく十重をもたもたず。つねに妄念をこし。又勇猛精進ならずして。わが身の善惡をもかへりみず。たゞ彌陀の本願を仰て。決定往生の思をなし侍るは。往生し侍るべしやと。上人のたまはく。其條勿論也。所詮決定心を生ぜば。往生すべき人なり。煩惱罪惡等の往生を障不障をば。凡夫の心にては覺知すべからずといへども。本願に相應する程の念佛申たらんには。それを障礙して。往生をさまたぐる罪はあるべからず。往

生は念佛の信否によるべし。更に罪惡の有無にはよるべからざるなり。すでに凡夫の往生をゆるす。なんぞ妄念の有無をきらふべきやと仰らるゝに。安樂房又申て云。虛假の者は往生せずと申すは。何樣に心得侍べきぞや。上人の給はく。虛假といふは。ことさらに結構する輩なり。好まずして自然に虛假ならんは。往生の障にあらず。念佛の信心を發たらん人は。必定して往生すべし。更に疑べからず。善導の釋を能々心うべきなり。善導おはしまさざらましかば。われらいかでか。このたび生死を離べきやと仰られて。落涙し給間。聖光房。法力房。安樂房。みなともに涙をおさへて信心をましけり。其時。聖光房。われは一切に往生を疑はずと申されければ。上人又のたまはく。貴房達は少々の罪過ありとも。爭往生を遂ざらんや。但外人には意得ていひきかすべきなり。强盛心をおこさず。落涙するに及ばずとも。念佛だにも申さば。往生すべきなり。見思塵沙無明の煩惱がよろづの障礙をばなすなり。念佛の一行は。この煩惱にもさへられず。往生をとげ十地究竟するなり。他宗には實敎にも。權敎にも。密敎にも。顯敎にも。十地究竟する事は漸頓を論ぜず。きはめたる大事なり。しかるにたゞ念佛の一行によりて往生をとげ。十地願行自然に成就する事は。誠に甚深殊勝の事なり

とゞ仰られける。

一。圓頓戒談義のとき。成覺房幸西尋ていはく。この戒は諸法の至極をもて戒體とす。然に山王院の大師。諸法の至極を禪とすとの給へり。もししからば禪門と。この戒體と合すやいなやと。上人決し給はく。これは教内の理法なり。かれは修心の教外也。なにをもてか合すとせん。得禪の人この戒をとかば。いよ〳〵正理にかなふべし。禪人教をとけば。教文禪にしたがふ。教人禪をとけば。禪門教にしたがふ。ぞよそ眞言止觀をもて。禪を推べきにあらず。いはんや法相三論をや。いかにいはんや自餘の小乘の宗をやと。

勅修御傳に出づ。

二九　一百四十五箇條問答

一。ふるき堂塔を修理して候はんをば。供養し候べきか。答。かならず供養すべしといふ事も候はず。又供養して候はんもあしき事にも候はず。功德にて候へば又供養せねばとてつみをえ。あしき事と申にても候はず。

一。佛の開眼と。供養とは。一つ事にて候か。答。開眼と供養とは。別の事にて候べきを。おなじ事にしあひて候也。開眼と申すは。本體は。佛師がまなこをいれひらきまいらせ候を申候也。これをば事の開眼と申候也。つぎに僧の佛眼の眞言をもてまなこをひらき。大日の眞言をもて。ほとけの一切の功德を成就し候をば。理の開眼と申候也。つぎに供養といふはほとけに。花香佛供。御あかしなどをもまいらせ。さらぬたからをもまいらせ候を。供養とは申候也。

一。この眞如觀は。し候べき事にて候か。答。これは惠心のと申て候へども。いらぬ物にて候也。おほかた眞如觀は。われら衆生は。えせぬ事にて候程に。往生のためには。成べきともおもはれぬことにて候へば。無益に候。

一。又これに計算して候ところは。何事もむなしと觀ぜよと申て候。空觀と申候は。これにて候なされば觀じ候べきやうは。たとへばこの世のことを執著して。思ふまじきとをしへて候と見えて候へば。おほやう御らんのためにまいらせ候。答。これはみな理觀とてかなはぬ事にて候也。僧のとしごろならひたるだにもえせず。まして女房などのつや〳〵案内もしらざらんは。いかにもかなふまじく候也。御たづねまて

も無益にて候。

一。この七佛の名號をとなふべき樣とて。人のたびて候まゝに信じ候へば。つみはうせ候べきか。なに事もそれよりおほせ候御事は。たのもしく候ひて。かやうに申候。答。これさなくとも候なん。念佛にこれらのつみのうせ候まじくばこそ候はめ。

一。一文の師をもをろそかに申候へば。習ひたる物の冥加なしと申候は。まことにて候か。答。師のことはをろそかならず候。思の中にふかき事これにすぎ候はず。

一。心を一つにして念じ候はゞ。心よくなをり候はずとも。何事ををこなひ候はずとも。念佛ばかりにて。淨土へはまいり候べきか。答。心のみだるゝは。これ凡夫の習ひにて。ちからをよばぬ事にて候。たゞ心を一にして。よく御念佛せさせ給ひ候はゞ。そのつみを滅して。往生せさせ給ふべき也。その妄念よりもおもきつみも。念佛だに申候へば。うせ候也。

一。經の陀羅尼は。灌頂の僧にうけ候べきか。答。法花經のはくるしからず。灌頂の僧のうけさする陀羅尼は。別の事に候。それはおぼしめしよらざれ。

一。普賢經に。佛の母を念ずべしと申候は。答。いざおぼえず。

一。百日のうちの。赤子の不淨かゝりたるは。物まうてにはゞかりありと申たるは。答。百日のうちのあか子の不淨くるしからず。なにもきたなき物のつきて候はんは。きたなくこそ候へ。赤子にかぎるまじ。

一。念佛の百萬遍。百度申てかならず往生すと申て候に。いのちみじかくてはいかゞし候べき。答。これもひが事に候。百度申てもし候。十念申てもし候。又一念申てもし候。

一。阿彌陀經十萬卷よみ候べしと申て候は。いかに。答。これもよみつべからんにとりての事に候。たゞつとめをたかくつみ候はんれうにて候。

一。日所作はかならずかずをきはめ候はずとも。かぞへられんにしたがひてかぞへ。念佛も申候べきか。答。かずをさだめ候はねば。懈怠になり候へば。かずをさだめたるがよき事にて候。

一。にらき。ひるしゝをくひて。香うせ候はずとも。つねに念佛は申候べきやらん。答。念佛は。なにゝもさはらぬ事にて候。

一。六齋に。齋をし候はんには。かねて精進をし。いかけをし。よき物をきてし候べきか。答。かならずさ候はずとも候なん。

一。二七日二七日など服藥し候はんに。六齋の日にあたりて候はんをば。いかゞし候べき。答。それちからをよばぬ事にて候。されば。とて罪にては候まじ。

一。六齋は一生すべく候か。何年すべく候ぞ。答。それも御心によるべき事にて候。いくらすべしと申事は候はず。

一。念佛をば。日所作にいくらばかりあてゝか。申候べき。答。念佛のかずは。一萬遍をはじめにて。五萬三萬五萬六萬乃至十萬まで申候也。この中に。御心にまかせて。おぼしめし候はん程を。申させおはしますべし。

一。阿彌陀經をば。一日に何卷ばかりあてゝか。よみ候べき。答。阿彌陀經は。ちかひて一生中に。十萬卷をだにもよみまいらせ候ぬれば。決定して往生すと。善導和尚のおほせられて候也。毎日に十五卷づゝよめば。二十年に十萬卷にみち候也。三十卷づゝよめば。十年にみち候也。

一。五色のいとは。ほとけには。ひだりにとおほせ候き。わがてには。いづれのかたにていかゞひき候べき。答。左右の手にてひかせ給ふべし。

一。佛の名をもかき。貴き事をもかきて候を。あだにせじとて。やき候は罪をうるに。誦

文をしてやくと申候は。いかゞ候べき。答。さる反故やき候はんに。何條の誦文か候べき。しかれどもやくは罪にて候。おほかたは。法文をば。うやまふ事にて候へば。たゞおきところに埋ませ給ふべし。

一。戒うけ候時。和尚となり給へ。阿闍梨となり給へと申事の候。心え候はず。なにといふ事にて候ぞ。答。和尚と申候は。まさしく戒うくる根本の師を申候也。阿闍梨と申候は。戒をうくる時作法をいたす師にて候也。これをば羯磨阿闍梨と申候也。

一。齋し候は功德にて候やらん。かならずすべき事にて候やらん。答。齋は功德をうる事にて候也。六齋の御齋ぞさも候ひぬべき。又御大事にて御やまひなどもをこらせおはしましぬべく候はゞ。さなくとも。たゞ御念佛だにもよく〳〵候はゞ。それにて生死をはなれ。淨土にも往生せさせおはしまさんずる事は。これによるべく候。

一。臨終のおり。阿彌陀の定印などをならひて。五色の糸をひかへ候やらん。たゞさ候はずとも。左右の手にひかへ候やらん。答。かならず定印をむすぶべきにても候はず。たゞ合掌を本體にて。その中にひかへられ候べし。

一。ちかくてかならずしも見まいらせ候はねども。とをらかにて。ひかへ候やらん。答。

とをくもちかくも便宜によるべく候いかなるもくるしく候はず。

一かならず佛を見糸をひかへ候はずとも。われは申さずとも人の申さん念佛をきゝても死候はゞ浄土には往生し候べきやらん。答かならず糸をひくといふ事候はず佛にむかひまいらせねども念佛だにもすれば往生し候也又きゝてもし候それはよく〳〵信心ふかくての事に候。

一ながく生死をはなれ三界にむまれじとおもひ候に極樂の衆生となりても又その縁つきぬれば此の世にむまるゝと申候はまことにて候かたとひ國王ともなり天上にもむまれよたゞ三界をわかれんとおもひ候にいかにつとめをこなひてか還り候はざるべき答これもろ〳〵のひが事にて候極樂へ一たびむまれ候ぬれば。ながくこの世にかへる事候はずみな佛に成ことにて候也たゞし人をみちびかんためにはことさらに還る事も候されども生死にめぐる人にては候はず三界をはなれ極樂に往生するには念佛にすぎたる事は候はぬ也よく〳〵御念佛候べき也。

一女房の聽聞し候に戒をたもたせ候をやぶり候はんずればとて戒をたもつとも申候はぬはいかゞ候べきたゞ聽聞の場にては一時もたもつと申候がめてたき事と申

候はまことにて候か答これはくるしく候はずたとひのちにやぶれ候とも其の時たもたんとおもふ心にてたもつと申すはよき事にて候。

一佛の薄ををして又供養し候か答さ候はずとも。

一所作をかきて人にし入させ候はいかゞ候べき答さなくとも候ひなむ。

一卷經を草子にたゝむは罪と申候はいかゞ候べき答つみをえぬ事にて候。

一ほとけに具する經をとりはなちて人にもたぶはつみにて候か答ひろむるは功德にて

一一部とある經一卷づゝとりはなちてよまんはつみにて候か答つみにても候はず。

一ほとけに厨子をさしてすへまいらせては供養すべく候か答一切あるまじ。

一不輕のごとく人をおがむ事し候べきか答このころの人のえ意えぬ事にて候也。

一七歳の子しにて いみなしと申候はいかに答佛敎にはいみといふ事なし世俗に申したらんやうに。

一佛ににかはを具し候がきたなく候いかゞし候べき答まことにきたなけれども。

具せてはかなふまじければ。

一。尼の服藥し候は。わろく候か。答。やまひにくふはくるしからず。たゞはあしく候。

一。父母のさきに死ぬるは。つみと申候はいかに。答。穢土のならひ。前後ちからなき事にて候。

一。いきてつくり候功德はよく候か。答。ぬでたし。

一。人のまもりをえて候はんは。供養し候べきか。答。せずともくるしからず。

一。わゝくに物くるゝは。つみにて候か。答。つみにて候。

一。經をして供養せずとも。くるしからず候か。答。たゞよむべし。

一。經千部よみては。供養し候べきか。答。さも候まじ。

一。懺悔の事。幡や花鬘などかざり候べきか。答。さらでも。たゞ一心ぞ大切に候。

一。花香をぼとけにまいらせ候事は。答。曉は供養法にかならずまいらせ候。たゞは花瓶にさしちらしても供養すべし。香はかならずたくべし。便あしくばなくとも。

一。經をば僧にうけ候べきか。答。われとよみつべくば。僧にうけずとも。

一。聽聞ものまうでば。かならずし候べきか。答。せずとも。中〳〵わろく候。しづかにだ

ゞ御念佛候へ。

一。神に後世申候事いかゞ。答。佛に申すにはすぐまじ。

一。說經師は。つみふかく候歟。又妻にならんものも。つみふかしと申候は。まことにて候か。答。本躰は功德をうべく候に。末世のはつみをえつべし。妻にならんものは。つみ。

一。麝香丁子をもち候は。つみにて候か。答。かをあつむるは。つみ。

一。妻。おとこに經ならふ事。いかゞ候べき。答。くるしからず。

一。還俗のものに。目を見あはせずと申候は。まことにて候か。答。さまでは不說。ひが事。

一。還俗を心ならずしてははんは。罪いかに。答。あさく候。

一。神佛へまいらんに。三日一日の精進。いづれかよく候。答。信を本にす。いくかといふ本說なし。三日こそよく候はめ。

一。歌よむはつみにて候か。答。あながちにえ候はじ。たゞし罪もえ。功德にもなる。

一。さけのむはつみにて候か。答。まことにはのむべくもなけれども。この世のならひ。

一。魚鳥鹿は。かはり候か。答。たゞおなじ事。

一。尼になりて。百日精進はよく候か。答。よし。

一。佛つくりて。經はかならず具し候べきか。答。かならず具すべしとも候はず。又具してもよし。

一。功德は身のたふるほどゝ申候はゞまことにて候か。答。沙汰にをよび候はず。ちからのたふるほど。

一。經と佛と。かならず一度にすへ候か。答。さも候はず。ひとつづゝも。

一。錫杖は。かならず誦すべきか。答。さなくとも。そのいとまに念佛一遍も申べし。あゝ法師こそありく時。むしのために誦し候へ。

一。いみの日。物まうてし候はいかに。答。くるしからず。本命日にも。

一。五逆十惡。一念十念にほろび候か。答。うたがひなく候。

一。臨終に。善知識にあひ候はずとも。日ごろの念佛にて往生はし候べきか。答。善知識にあはずとも。臨終おもふ樣ならずとも。念佛さへ申さば往生すべし。

一。誹謗正法は。五逆のつみにおほくまされりと申候は。まことにて候か。答。これはいと人のせぬ事にて候。

一。死て候はんものゝかみは。そり候べきか。答。かならずさるまじ。

一。心に妄念のいかにも思はれ候はゞいかゞし候べき。答。たゞよく〳〵念佛を申させ給へ。

一。わがれうの。臨終の物の具。まづ人にかし候はいかゞ候べき。答。くるしからず。

一。五色のいとをうむ事はいかゞ。答。おさなきものにうます。

一。節ある楊枝をばつかはず。續帶青帶無文の帶するはいむと申候は。答。くるしからず。

一。服藥のわたは。あらひ候はざらんはいかゞ候。答。くるしからず。

一。よき物をき。わろきところに居て。往生ねがひ候はいかゞ。答。くるしからず。八齋戒の時こそ。さは候はめ。

一。月のはゞかりの時。經よみ候はいかゞ。答。くるしみあるべしとも見えず候。

一。申す事のかなひ候はぬに。佛をうらみ申はいかゞ。答。うらむべからず。緣により信のありなしによりて。利生はあり。この世のちの世。佛をたのむにはしかず。

一。ひる。しゝは。いづれも七日にて候か。又しゝの干たるは。いみふかしと申候はいかに。答。ひるも香うせなば。はゞかりなし。しゝのひたるによりて。いみふかしといふ事

はひが事。

一。月のはゞかりのあひだ。神の料に。經はくるしく候まじきか。答。神やはゞかるらん。佛法にはいまず。陰陽師にとはせ給へ。

一。子うみて。佛神へまいる事。百日はゞかりと申候はまことにて候か。答。それも佛法には。いまず。

一。法花經一品よみさして。魚くはずと申候はいかに。答。くるしからず。

一。ずゝもたず。かけおびかけずして。經をうけ候事はいかに。答。くるしからず。

一。齋にまめあづきの御れうぐはせずと申候はまことにて候か。答。くるしからず。

一。ねてもさめても。口あらはて念佛申候はんはいかゞ候べき。答。くるしからず。

一。信施をうくるは。つみにて候か。答。つとめしてくふ僧はくるしからず。せねばふかし。

一。神のあたりの物くふはくちなはと申候はいかに。答。禰宜神主は。ひとへにその身になるにこそ。さらぬがすこしくはんはおもからじ。

一。僧の物くひ候も。つみにて候か。答。つみうるも候。えぬも候。佛のもの。奉加結緣の物

くふは。つみ。

一。大佛。天王寺などの邊に居て。僧の物くひて。後世とらんとし候人は。つみか。答。念佛だに申さば。くるしからず。

一。齋するあした。御れうあまたにむかふはいかゞ候。答。くるしからず。

一。齋をつとめてみそうついかに。答。くるしからず。

一。戒をたもちて。のち精進はいく日し候。答。いくかも御心まかせ。

一。聽聞は功德をえ候か。答。功をえ候。

一。念佛を行にしたるものが。物まうてはいかに。答。くるしからず。

一。物まうてして。經を迴向すべきに。經をばよまで。念佛を迴向するくるしからずと申候はいかに。答。くるしからず。

一。わが心ざゝぬ魚は。殺生にては候はぬか。答。それは殺生ならず。

一。服藥のずゝは。あらひ候べきか。答。あらひあらはず。くるしからず。

一。千手藥師は。ものいませ給ふと申。いかに。答。さる事なし。

一。六齋に。にら。ひる。いかに。答。めさゞらんはよく候。

一。齋のくひ物は。きよくし候べきか。答。例の定行水も候まじ。かねて精進も候まじ。ひきいれも。たゞのおりのにて候べし。齋の誦文も女房はせずとも。たゞ念佛を申させ給へ。さしたる事ありて。齋を。かきたらば。いつの日にてもせさせ給へ。

一。三年おがみの事。し候べきか。答。さらずとも候なん。

一。齋のさばには。菜を具し候べきか。齋の生飯をば。屋のうへにうちあげ候べきか。かはらけにとり候べきか。わがひきいれのさらにとり候べきか。答。いづれも御心しだい。

一。女のものねたむ事は。つみにて候か。答。世々に女となる果報にて。ことに心うき事也。

一。出家し候はねども。往生はし候か。答。在家ながら往生する人おほし。

一。五色の糸を。あまたに。きりて。人にたまはんは。いかゞ候べき。答。きるべからず。

一。念佛を申候に。ばらのたつ心のさま〳〵に候。いかゞし候べき。答。散亂の心。よにわろき事にて候。かまへて一心に申させたまへ。

一。かみつけながら。おとこをんなの死候は。いかに。答。かみにより候はず。たゞ念佛と

見えたり。

一。尼の子うみ。おとこもつ事は。五逆罪ほどゝ申。まことにて候か。答。五逆ほどならねども。おもく見えて候。

一。尼法師。かみをおほす。つみにて候か。答。三惡道の業にて候。

一。經佛などうり候は。つみにて候か。答。つみふかく候。

一。人をうり候も。つみにて候か。答。それもつみにて候。

一。精進の時つめきらずと申。又女にかみそらせぬと申候。いかに。答。みなひが事。

一。われも人も。さゑもんかく。罪にて候か。答。ずごさゞらんには。なにか罪にて候べき。

一。酒のいみ。七日と申候は。まことにて候か。答。さにて候。されどもやまひには。ゆるされて候。

一。魚鳥くひては。いかけして。經はよみ候べきか。答。いかけしてよむ本體にて候。せてよむは。功德と罪と。ともに候。たゞしいかけせても。よまぬよりはよむはよく候。

一。妻おとこ一つにて。經よみ候はん事。いかけし候べきか。答。これもおなじ事。本體はいかけしてよむべく候。念佛はせてもくるしからず。經はいかけしてよみ候べし。毎

日よみ候とも。

一。大根柚はをこなひにはばかり候と申はいかに。答。はゞかりなし。

一。尼になりたるかみ。いかゞし候べき。答。經の料紙にすき。もしは佛の中にこそこめ候へ。

一。尼法師の。紺のきぬ著候はいかに。答。よに罪うる事にて候。

一。物まうてし候はんに。男女かみあらひ。せめてはいたゞきあらふと申候は。まことにて候か。答。いづれもさる事候はず。

一。佛をうらむる事は。あるまじき事にて候な。答。いかさまにも。佛をうらむる事なかれ。信あるものは大罪すら滅す。信なき者は小罪だにも滅せず。わが信のなき事をはづべし。

一。八專に物まうでせずと申は。まことにて候か。答。さる事候はず。いつならんおりにも。佛の耳にきかせ給はぬ事の。なじか候べき。

一。灸治の時。物まうてせず。そのおりの著物もずつると申候は。答。これも又きはめたるひが事にて候。たゞ灸治をいたはりてありきなどをせぬ事にてこそ候へ。灸治の

いみある事候はず。

一。ひる。しゝくひて。三年がうちに死候人は。往生せずと申候は。まことにて候やらん。答。これ又きはめたるひが事にて候。臨終に五辛くひたる者をばよせずと申たる事は候へども。三年までいむ事はおほかた候はぬ也。

一。厄病やみて死ぬる者。子うみて死ぬる者は。つみと申候はいかに。答。それも念佛申せば往生し候。

一。子の孝養。おやのするは。うけずと申候はいかに。答。ひが事なり。

一。產のいみいくかにて候ぞ。又いみもいくかにて候ぞ。答。佛敎には。いみといふ事候はず。世間には產は七日。又三十日と申げに候。いみも五十日と申す。御心まかせに候。

一。沒後の佛經しをく事は。一定すべく候か。答。一定にて候。すべく候。

一。所作かきてしいれ。かねてかゝんずるを。まづし候はいかに。答。しいるゝはくるしからず。かねては懈怠也。

一。出家は。わかきとおひたると。いづれか功德にて候。答。老ては功德ばかりえ候。わかきはなをめでたく候。

一。佛に花まいらする誦文。御らんのためにまいらせ候。答。これせんなし。念佛を申させ給へ。

一。いみの者のものへまいり候事は。あしく候か。答。くるしからず。

一。物まうてして。かへさにわがもとへ返らぬ事はあしく候か。又魚鳥にやがてみだれ候事いかに。答。熊野のほかはくるしからず。

一。齋のおりの誦文は。かくし候べしと申候。御らんのためにまいらせ候。答。齋のおりも。たゞ念佛を申させ給へ。女房は誦文せずとも。

一。女房の物ねたみの事。さればつみふかく候な。答。たゞよく〳〵一心に念佛を申させ給へ。

一。桐のはい。かみにつくるは。佛神に申事のかなはぬと申候は。まことにて候か。答。そら事なり。

一。物へまいり候精進。三日といふ日まいり候べきか。四日のつとめてか。答。三日のつとめてまいる。

一。物こもりして候に。三日とおもひ候はんは四日になしていて。七日とおもひて候

はんは。八日になしていて候べきか。答。それは世の人のせんやうに。

一。ずゝにさくらくり。いむと申候はいかに。答。さる事候はず。

一。法師のつみは。ことにふかしと申候は。答。とりわき候はず。

一。現世をいのり候に。しるしの候はぬ人はいかに候ぞ。答。現世をいのるに。しるしなしと申事。佛の御そらごとには候はず。わが心の說のごとくせぬによりて。しるしなき事は候也。されば。よくするにはみなしるしは候也。觀音を念ずるにも。一心にすればしるし候。もし一心なければしるし候はず。むかしの緣あつき人は。定業すらなを轉ず。むかしもいまも緣あさき人は。ちりばかりのくるしみにだにもしるしなしと申て候也。佛をうらみおぼしめすべからず。たゞこの世。のちの世のために佛につかへんには。心を至し。實をはげむ事。この世もおもふ事かなひ。のちの世も淨土にむまるゝ事にて候也。しるしなくば。わが心をはづべし。

建仁元年十二月十四日。けざんにいりて。とひまいらする事。

一。臨終の時不淨のものゝ候には。佛のむかへにわたらせ給ひたるも。かへらせ給ふと申候は。まことにて候か。答。佛のむかへにおはしますほどにては。不淨のものあり

といふともなじかはかへらせ給べき。佛はきよききたなきの沙汰なし。たゞ念佛ぞよかるべき。きよくとも念佛申さゞらんには益なし。萬事をすてゝ念佛を申すべし。證據のみおほかり。

一。これは御文にてたづね申す。

一。家のうちのものゝしたしき。うときをきらはず。往生のためとおもひて。くひ物きものたまはんは。佛に供養せんとおなじ事にて候か。答。したしきうときをえらばず。往生のためとおぼしめして。物たびおはしまさん。めでたき功德にて候。御つかひによく〳〵申候ぬ。

一。破戒の僧。愚癡の僧。供養せんも功德にて候か。答。破戒の僧。愚癡の僧をゝるの世には。佛のごとくたとむべきにて候也。この御つかひに申候ぬ。きこしめし候へ。

了惠曰く。この御ことばは上人のまさしき御手也。あみだ經のうらにをしたりと。

一。見參にいりてうけ給はる事。

一。毎日の所作に。六万十万の數遍をゝずゞをくりて申候はんと。二万三万をずゞをたしかにひとつづゝ申候はんと。いづれかよく候べき。答。凡夫のならひ。二万三万あつ

とも如法にはかなひがたからん。たゞ數遍のおほからんにはすぐべからず。名號を相續せんため也。かならずしもかずを要とするにはあらず。たゞつねに念佛せんがためなり。かずをさだめぬは懈怠の因緣なれば。數遍をすゝむるにて候。

一。眞言の阿彌陀の供養法は正行にて候べきか。答。佛體は一つに似たれども。その意不同なり。眞言教の彌陀は。これ己心の如來。ほかをたづぬべからず。この教の彌陀は。これ法藏比丘の成佛也。西方におはしますゆへに。その意おほきにことなり。

一。つねに惡をとゞめ。善をつくるべき事をおもはへて。念佛申候はんと。たゞ本願をたのむばかりにて。念佛を申候はんといづれかよく候べき。答。廢惡修善は。諸佛の通戒なり。しかれども。當世のわれらは。みなそれにはそむきたる身なれば。たゞひとへに。別意弘願のむねをふかく信じて。名號をとなへさせ給はんにすぎ候まじ。有智無智。持戒破戒をきらはず。阿彌陀ほとけは來迎し給事にて候なり。御意え候へ。

和語燈錄に出づ。勅修御傳には略して十九ケ條をかゝぐるのみ。

○拾遺古德傳に号の字を子に作る。

○拾遺古德傳に除の下に却の字あり。

○拾遺古德傳に佛の下に之の字あり。

第五輯　制誡

三〇　七箇條起請文

普告号予門人念佛上人等。

一可停止未窺一句文。奉破眞言止觀。謗餘佛菩薩事。

右至立破道者學生之所經也。非愚人之境界。加之誹謗正法。既除彌陀願。其報當墮那落。豈非癡闇之至哉。

一可停止以無智身對有智人。遇別行輩好致諍論事。

右論義者是智者之有也。更非愚人之分。又諍論之處諸煩惱起。智者遠離之百由旬也。況於一向念佛行人乎。

一可停止對別解別行人以愚癡偏執心稱當弃置本業。強嫌嗤之事。

右修道之習只各勤自行。敢不遮餘行。西方要決云別解別行者惣起敬心。若生輕慢得罪無窮云云何背此制哉。加之善導和尚大呵之。未知祖師之誡。愚闇之彌甚也。

○拾遺古德傳に戒の下に者の字あり。

○拾遺古德傳に天の下に狗の字あり。

○拾遺古德傳に六を五に作る。

○拾遺古德傳に正を佛に作る。

一可停止於念佛門号無戒行。專勸婬酒食肉。適守律儀者名雜行人。還彌陀本願者說勿恐造惡事。

右戒是佛法大地也。衆行雖區同專之。是以善導和尚擧目不見女人。此行狀之趣過本律制。淨業之類不順之者惣失如來之遺敎。別背祖師之舊跡。旁無據者歟。

一可停止未弁是非癡人離聖敎。非師說恣述私義。妄企諍論。被咲智者。迷亂愚人事。

右無智大天此朝再誕。猥述邪義。既同九十六種異道。尤可悲之。

一可停止以癡鈍身殊好唱導。不知正法。說種々邪法。敎化無智道俗事。

右無解作師。是梵網之制戒也。黑闇之類。欲顯己才。以淨土敎爲饗能。貪名利望檀越。恣成自由之妄說。誑惑世間人。誑法之過殊重。是寧非國賊乎。

一可停止自說非佛敎。邪法爲正法。僞号師範說事。

右各雖一人說。所積爲予一身衆惡。汚彌陀敎文。揚師匠之惡名。不善之甚無過之者也。

以前七箇條。甄錄如斯。一分學敎文弟子等者。頗知旨趣。年來之間。雖修念佛。隨順聖敎。敢不逆人心。無驚世聽。因茲于今三十箇年。無爲涉日月。而至近來此十ヶ年以後。無智不善輩時々到來。非啻失彌陀淨業。又汚穢釋迦遺法。何不加炳誡乎。此七ヶ條之內。不當之間

巨細事等多。具難注述。惣如此等之無方慎不可犯。此上猶背制法輩者是非予門人。魔眷屬也。更不可來草庵。自今以後各隨聞及必可被觸之。餘人勿相伴。若不然者是同意人也彼過如作者。不能嗔同法恨師匠。自業自得之理只在己心而已。是故今日催四方行人。集一室告命。僅雖有風聞慥不知誰人。失據于沙汰。愁歎送年序。非可默止。先隨力及所迴禁遏之計也。仍錄其趣示門葉等之狀如件。

元久元年十一月七日　　沙源空　花押

信空　感聖　尊西　證空　源智　行西　聖蓮　見佛　導亙　導西十人　寂西

宗慶　西緣　親蓮　幸西　住蓮　西意　佛心　源蓮　源雲廿　欣蓮　生阿彌陀

佛　欣西　西緣　安照　如進　導空　冒西　導也　遵西卅　義蓮　安蓮　導源

證阿彌陀佛　念西　行西　行西　尊淨　歸西　行空四十　導感　西觀　覺成

禪忍　學西　玄曜　澄西　大阿　西住　實光五十　覺妙　西入　圓智　導衆

尊佛　蓮惠　源海　蓮惠　安西　教芳六十　念西　安西　詣西　神圓　辨西

空仁　示蓮　念生　尊忍　參西七十　仰善　忍西　好阿彌陀佛　鏡西　昌西

惟西　好西　禪寂　戒心　了西同八日追加人々　僧尊蓮八十　僧仙雲　僧顯願　僧佛眞

○拾遺古德傳に心を身に作る。○拾遺古德傳に據巳下四字なし。

○勅傳に導亙の導を道に作る。○勅傳に導也の導を道に作る。○勅傳に導感の導を道に作る。○又覺成を尊成に作る。○又玄曜の曜を耀に作る。○勅傳に神圓の神を祥に作る。○勅傳に參西の參を叅に作る。

僧西尊　僧良信　僧綽空　僧善蓮　蓮生　度阿彌陀佛　阿日九十　靜西　成願

自阿彌陀佛　覺信　念空　西蓮　向西　親西　實蓮　觀然百人　蓮智　實念

長西　信西　寂明　行西　惠忍　圓空　觀阿彌陀佛　蓮慶百十人　淨阿彌陀佛

觀尊　具慶　蓮慶　蓮佛　進西　正念　持乘　覺辨　蓮定百二十人　導匠　深

心　往西　觀尊　一圓　實蓮　白毫　正觀　有西　上信百卅人　定阿彌陀佛　念

佛　觀阿彌陀佛　蓮仁　蓮西　德阿彌陀佛　自阿彌陀佛　持阿彌陀佛　西佛

空阿彌陀佛百四十人九日　覺勝　西佛　慶俊　信西　進西　源也　雲西　實念　心

光　西源百五十人　應念　惟阿　源西　行願　信惠　忍西　寂因　安西　佛心

心蓮百六十人　觀源　聖西　蓮寂　智圓　參西　永尊　空寂　願蓮　證西　西

念百七十人　戒蓮　專念　法阿彌陀佛　西阿　西法　西念　西忍　幸西　成蓮

實念百八十人　西敎(花押)　僧慶宴　沙門感喜　有實　淨心　立西　唯阿彌陀佛

行西　向西

是れ嵯峨二尊院所藏の原本をうつすものなり。漢語燈錄。拾遺古德傳等粗々之に同じ。勅修御傳には和語に改めて之を揭ぐ。

○勅傳に好阿彌陀佛を住阿に作る。○勅傳に禪寂を祥寂に作る。○勅傳に仙雲を仙空に作る。

○漢語燈錄并に勅傳に此外更に願西を拾遺古德傳には別に善信を出だす。

三一　送山門起請文

叡山黑谷沙門源空敬投當寺住持三寶護法善神寶前。

右源空壯年之昔粗窺三觀幽扃衰老之今偏望九品淨境是乃訪先賢之古蹟覆非下愚之今案也。然近聞華夷皆言源空偏弘念佛道誹謗他教法諸宗由此陵夷諸行由之窒塞矣。一聞此言心神驚怖。又聞浪言遂聞于山門而及于衆議欲加嚴誡頻達貫首矣。予於是且恐且喜。所恐者以貧道之所以叨勞衆徒之胸襟也。所悅者自此永銷謗法之名也。若非衆徒之糺斷者何發貧道之困蒙哉。夫彌陀願網雖普救濟一切善惡尙漏五逆謗法之輩。故彼佛本願云唯除五逆誹謗正法。然則勸念佛者誰謗正法。且聖道淨土二門雖異至其所期同在一實。惠心往生要集云行者生彼國已乃至卽從菩薩漸至佛所跪七寶階瞻万德之尊容聞一實道入普賢之願海。欣求淨土之人又何棄捨華嚴法華等妙法乎。源空念佛餘暇以披天台教釋凝信心於玉泉之流致渴仰於銀池之風。舊執猶存焉。今心又何輕乎。抑予所勸化者老後遁世之輩愚昧出家之徒或來艸菴剃頭。或敲松窗述志。對此等人偏敎極樂專勸念佛。是乃報色衰寤不能練行。性質闇味不堪研精。是故暫措難解難入之門。

試示易修易往之道。佛智既設方便。則雖凡慮豈無斟酌。固非存教之是非。由偏願機之堪不堪也。此事尙爲法滅之緣。冥止之耳。愚蒙竊惑。請取決於衆斷也。源空天性魯鈍不好化導。而有講說。由不得已也。後來若以僻說弘通當受衆徒嚴責。此所不可避也。此等子細先年呈誓詞了。雖不及復陳。而嚴責既疊。不得敢默。覆述下情。只仰賢慮之淵鑑耳。所陳若以虛欺日別七万念佛空失其利。現當二世常沈重苦。永受楚毒無免出期矣。伏乞一切三寶護法諸神證明知見。源空敬白。

元久元年甲子十一月七日　　沙門源空

出漢語燈錄了惠曰。執筆宰相法印聖覺也。勅修御傳。拾遺古德傳。改爲和語。字句亦有出入。

三二　一念義停止起請文

今世歸念佛門入中多有無智誑惑之輩。不知一宗廢立不聞一法名目。內無道心外求名利。恣作妄語迷亂男女。偏營渡世謀計不顧來世惡報。奸弘一念之僞法。以文懈怠之過也。剩立無念之新義。猶廢一稱之小行。善根削跡惡火增勢。爲受刹那五欲之樂。不畏永劫三

途之苦。乃示人云憑彌陀本願者設雖五逆勿懼焉。從所欲造之可也。又不應著袈裟只著俗服。又不應斷嬉肉。云云嗚乎是何言也。弘法大師釋異生羝羊心云但念嬉食如彼羝羊。此輩卽其一人也。亦是十住心中三惡道心也。誠可悲哉。如是之人非止妨餘教法。乃亦失念佛行。勸懈怠無慚之業。示捨戒還俗之儀。此卽附佛法之外道。天魔儻類。破滅佛法過外道之外道。只恐癡闇之人墮彼魔網也。凡念佛行者隨分持戒不造衆惡。念念策勵四威儀不懈廢。又不妨礙餘教餘行。總於佛法作恭敬心。故善導和尙觀念法門云唯須持戒念佛。乃至或得三万六万者皆是上品上生人。又觀經疏云一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近。念念不捨者是名正定之業。順彼佛願故。懷感法師羣疑論云志求都率者勿毀西方行人。願生西方者勿謗都率之業。各隨性欲任情修學。莫相是非。卽爲佛法。遞相非撥。便行魔業也。祖訓如是。愼勿從邪說也。又近聞北越有一邪人。大作妄語云法然上人日課七万遍念佛只是外方便也。內有實義。人未知之。所謂實義者信知彌陀本願一念名號則必往生極樂。淨土之業乃於是滿足焉。一念卽生不勞多念。一念之外何重唱之。又有究竟實義。只是信知本願而已矣。彼上人門人中遲鈍之人未聞此義。利根之輩僅有五人得此淡法。我卽其一人也。此淡法門乃彼上人己心中之奧義。擇器傳之所不容易授也。如此邪說一

無有實。虛誑之甚。雖不足論。今爲疑者自立誓詞。貧道平生所述心行之外別有所祕之法門者十方三寶當垂知見。日別七万念佛併空失其利益。圓頓行者初緣實相具修六度至無生忍。何法更有無行而得道乎。乞願纏縛此魔網者速出邪見稠林就正直之坦塗。以遁捺落鐵城登寶池金蓮矣。抑彼誑惑之輩未讀半卷書。濫稱予之弟子。託事於師範。或自立稱名弘願門義。或作邪書號念佛文集。彼邪書中先作僞經以爲之地。所謂念佛祕經是也。又僞稱華嚴般若等大乘經說云不應勞作諸善。應當唯修一念。云云彼書今現流布華夷。如此邪書所未曾聞。智者一見撫掌大笑。愚輩亦幸莫見誤也。貧道山門已來五十年間廣閱諸宗章疏鑽仰年積聖教殆盡。又或一夏修四種三昧。或九旬行六時懺法。顯密諸行齊戒熏練。既至老邁身心勞疲。於茲淡信彌陀本願專勤念佛。然猶於他宗教悉致敬重。況素所貴眞言止觀哉。予之傳持本山黑谷寶藏若有所闕乃書寫補之。初心愚昧不知予意。僅聞念佛心行切懷偏邪之執。實可傷也。此趣先年粗載七條教誡之文。子細多端不能枚擧也。嗚乎北越程遠寄悠思於雁札。山川迢遞隔面萬里之月。龍雲相逐容膝一佛之席而已。

承元三年己巳六月十九日　　沙門源空

漢語燈錄に出づ。然るに九卷傳に載する所更に詳なり。故に重錄するに左の如し。

當世念佛門に趣く行人其中におほく無智誑惑の輩あり。いまだ一宗の廢立をしらず。一法の名目に及ばず。心に道心なく。身に利益をもとむ。これによりて恣に妄語を構て諸人を迷亂す。偏にこれを渡世の計として。全く來生の罪をかへりみず。かたましく一念の僞法をひろめて。無行の過を謝し。あまさへ無念の新義を立て。猶一稱の小行を失ふ。微善也といへ共。善根におひて跡をけづり。重罪也といへ共罪障におひていよ〳〵勢をます。刹那五欲の樂を受んが爲に。永劫三途の業をおそれず。人を教示しても。彌陀の願を憑むものは五逆を捨る事なし。心に任てこれをつくれ。袈裟を著すべからず。宜しく直垂をきよ。姪肉を斷べからず。恣に鹿鳥を食べしと。云云弘法大師異生羶羊心を釋して云。姪食を思ふ事。彼羶羊のごとしと。云云彼輩たゞ欲にふけること。偏に彼類歟。十住心の中の三惡道の心也。誰か是を哀まざらんや。たゞ餘教を妨のみに非ず。返て念佛の行をうしのふ。懈怠無慚の業を勸て。捨戒還俗の義を示す。これ本朝には外道なし。是既に天魔の構へ也。佛法を破滅し世人を惑亂す。此教訓にしたがはん者は。癡鈍のいたす所也。いまだ教文を學せずといふ共。誠あらん人何ぞこれを信ずべきや。善導和尙の觀念法門には。唯

深持戒念佛すとの給へり。和尙の弟子三昧發得の懷感法師の羣疑論には。都率を志求せん者は。西方の行人を毀ることなかれ。西方に生れんと欣はん者は。都率の業を毀ることなかれ。各性欲に隨て情にまかせて。修學すべしと釋し給へり。安養の行人もし此教に隨はんと思はんものは。祖師の跡を逐て隨分に戒品を守り。衆惡をつくらず。餘教を妨ず。餘行を輕しむる事なかれ。惣じて佛法におひて恭敬心をなし。更に三万六万の念佛を修して。五門九品の淨土を期すべし。しかるを近日北陸道の中に。一の誑法の者あり。妄語を構て云。法然上人の七万遍の念佛は。たゞこれ外の方便也。內に實義あり。人未だ是を知らず。所謂心に彌陀の本願をしれば。身かならず極樂に往生す。淨土の業こゝに滿足しぬ。此上何ぞ一遍也といふ共。重て名號を唱べきや。彼上人の禪坊におひて。門人等廿人ありて祕義を談ぜしに。淺智の類は性鈍にしていまださとらず。利根の輩わづかに五人此深法を得たり。我其一人也。彼上人の己心中の奧義也。容易にこれを授けず。器を擇て傳授せしむべしと。云云風聞の說實ならば皆もつて虛言なり。迷者を哀れまんが爲に誓言をたつ。貧道これを祕して。僞て此旨をのべ。不實の事をしるさば。十方の三寶正に知見をた

れ。毎日七万遍の念佛。むなしく其利益を失はん。圓頓行者の初より。實相を緣ずる。猶六度万行を修して。無生忍にいたる。いづれの法か。行なくして證をうるや。乞願は此疑網に墮せん類ひ。邪見の稠林を切て正直の心地をみがき。將來の鐵城を遁て。終焉の金臺にのぼれ。胡國ほど遠し。思を雁札に通ず。北陸境遙なり。心を像教にひらけ。山川雲重て面を千万里の月にへだつとも。化導緣あつて膝を一佛土の風にちかづけん。誑惑の輩いまだ半卷の書をよまず。一句の法をうけず。むなしく弟子と號する甚其謂なし。己が身に智德かけて。人をして信用せしめんが爲に。恣に外道の法を說て師匠の敎として。或は自稱して弘願門と名付。或は心に任て謀書を造て念佛要文集と號す。此書の中に初て僞經を作て。新に證據にそなふ。念佛祕密經是也。華嚴等の大乘の中に。本經になき所の文を作て云。諸善を作べからず。只專修一念を勤むべしと。彼書いま花夷に流布す。智者見ると云共。是あざむけるなるべし。愚人是を信受する事なかれ。如此の謀書前代にもいまだきかず。猶如來におひて妄語を寄す。況や凡夫におひて虛言を與へんをや。此猛惡の性一をもて万を察すべき者也。是癡闇の輩也。いまだ邪見とするに及ばず。誑惑の類也。名利の爲

に他をあやまつ。抑貧道山學の昔より五十年の間。廣く諸宗の章疏を披閱して。叡岳になき所をば是を他門に尋て必ず一見を遂ぐ。鑽仰年積て聖敎殆盡す。加之或は一夏の間四修を修し。或は九旬の中に六時懺法を行ず。年來長齋して。顯密の諸行を修練しき。身既に病老してのち念佛をつとむ。今稱名の一門につゐて易往の淨土を期すといへ共。なを他宗の敎文におひて。悉く敬重をなす。いはんや。もとより貴ぶ所の眞言止觀をや。本山黑谷の法藏に傳持し。闕する所の聖敎をば書寫してこれを補す。然を新發意の侶。愚闇後來の客。いまだその往昔をみず。此深奧をしらず。僅に念佛の行義をきゝて。猥しく偏愚の邪執をなす。嗚呼哀哉。傷べし悲べし。有智の人是を見て旨を達せよ。其趣粗先年の比。記す所の七箇條の敎誡の文に載たり。子細端多し毛擧不能而已。

承元三年六月十九日　　沙門源空云云

〻三三　念佛行者訓條

七箇條起請文

をよそ往生淨土の人の要法は。おほしといへども。淨土宗の大事は。三心の法門にある也。もし三心を具せざるものは。日夜十二時に。かうべの火をはらふがごとくにすれども。つねに往生をえずといへり。極樂をねがはん人は。いかにもして。三心のやうを心えて念佛すべき也。三心といふは。一には至誠心。二には深心。三には迴向發願心なり。まづ至誠心といふは。大師釋しての給はく。至といふは眞也。誠といふは實也といへり。たゞ眞實心を。至誠心と善導はおほせられたる也。眞實といふは。もろ〳〵の虛假の心のなきをいふ也。虛假といふは貪瞋等の煩惱ををこして。正念をうしなふを。虛假心と釋する也。すべてもろ〳〵の煩惱のをこる事は。みなもと貪瞋を母として出生する也。貪といふにつゐて喜足小欲の貪あり。不喜足大欲の貪あり。いま淨土宗に制するところは。不喜足大欲の貪煩惱也。まづ行者かやうの道理を心えて念佛すべき也。これが眞實の念佛にてある也。喜足小欲の貪はくるしからず。瞋煩惱も敬

上慈下の心をやぶらずして。道理を心えんほど也。癡煩惱といふはをろかなる心なり。此心をかしこくなすべき也。まづ生死をいとひ淨土をねがひて。往生を大事といとなみて。もろ〳〵の家業を事とせざれば。癡煩惱なき也。少々の癡は往生のさはりにはならず。これほどに心えつれば。貪瞋等の虛假の心はうせて。眞實心はやすくおこる也。これを淨土の菩提心といふなり。詮ずるところ。生死の報をかろしめ。念佛の一行をはげむがゆへに。眞實心とはいふ也。二に深心といふは。ふかく念佛を信ずる心なり。ふかく念佛を信ずといふは。餘行なく一向に念佛になる也。もし餘行をかゝれば。深心かけたる行者といふ也。詮ずるところ。釋迦の淨土三部經は。ひとへに念佛の一行をとくと心え。彌陀の四十八願は。稱名の一行を本願とすと心えて。ふた心なく念佛するを。深心具足といふなり。三に迴向發願心といふは。無始よりこのかたの所作のもろ〳〵の善根を。ひとへに往生極樂といのる也。又つねに退する事なく念佛するを迴向發願心といふなり。これは惠心の御義なり。此心ならば至誠心深心具足してのうへに。つねに念佛の數遍をなすべし。もし念佛退轉せば。迴向發願心かけたるもの也。淨土宗の人は。三心のやうをよく〳〵心えて念佛すべき也。三心の中に。

ひとつもかけなば往生はかなふまじき也。三心具足しぬれば往生は無下にやすくなるなり。すべてわれらが輪廻生死のふるまひは。だゞ貪瞋癡の煩惱の絆によりて也。貪瞋癡をこらば。なを惡趣へゆくべきまどひのをこりたるぞと意えて。是をとゞむべき也。しかれどもいまだ煩惱具足のわれらなれば。かくは意えたれどもつねに煩惱はをこる也。をこれども煩惱をば心のまらう人とし。念佛をば心のあるじとしつれば。あながちに往生をばさへぬ也。煩惱を心のあるじとして念佛を心のまらう人とする事は。雜毒虛假の善にて往生にはきらはるゝ也。詮ずるところ。前念後念のあひだには。煩惱をまじふといふとも。かまへて南無阿彌陀佛の六字の中に。貪等の煩惱ををこすまじき也。

一。われは阿彌陀佛をこそたのみたれ。念佛をこそ信じたれとて。諸佛菩薩の悲願をかろしめたてまつり。法華般若等の。めでたき經どもを。わろくおもひそしる事は。ゆめ〳〵あるべからず。よろづのほとけたちをそしり。もろ〳〵の聖教をうたがひそしりたらんずるつみは。まづ阿彌陀佛の御心にかなふまじければ。念佛すとも悲願にもれん事は一定也。

一。つみをつくらじと身をつゝしみてよからんとするは。阿彌陀ほとけの願をかろしむるにてこそあれ。又念佛をおほく申さんとて。日々に六万遍などをくりゐたるは。他力をうたがふにてこそあれといふ事のおほくきこゆる。かやうのひが事ゆめ〳〵もちふべからず。まづいづれのところにか。阿彌陀佛はつみつくれとすゝめ給ひける。ひとへにわが身に惡をもとゞめえず。つみのみつくりゐたるまゝにかゝるゆくゑほとりもなき虛言をたくみいだして。物もしらぬ男女のともがらをすかしほらかして。罪業をすゝめ。煩惱ををこさしむる事。返々天魔のたぐひなり。外道のしわざ也。往生極樂のあだかたきなりとおもふべし。又念佛のかずをおほく申すものを。自力をはげむといふ事これ又ものもおぼえずあさましきひが事也。だゞ一念二念をとなふとも。自力の心ならん人は。自力の念佛とすべし。千遍万遍をとなふとも。百日千日よるひるはげみつとむとも。ひとへに願力をたのみ。他力をあふぎたらん人の念佛は。聲々念々しかしながら他力の念佛にてあるべし。されば三心ををこしたる人の念佛は。日々夜々時々剋々にとなふれども。しかしながら願力をあふぎ。他力をたのみたる心にてとなへゐたればかけてもふれても。自力の念佛とはいふべ

からず。

一。三心と申す事をしりたる人の念佛に。三心具足してあらん事は左右にをよばず。つや〳〵三心の名をだにもしらぬ。無智のともがらの念佛には。よも三心は具し候はじ。三心かけば往生し候なんやと申す事。きはめたる不審にて候へども。これは阿彌陀ほとけの法藏菩薩のむかし五劫のあひだ。よるひる心をくだきて案じたてゝ。成就せさせ給ひたる本願の三心なれば。あだ〳〵しくいふべき事にあらず。いかに無智ならん者もこれを具し。三心の名をしらぬものまでも。かならずそらに具せんずる樣を擇ばせ給ひたる三心なれば。阿彌陀佛をたのみたてまつりて。ずこしもうたがふ心なくして。この名號をとなふれば。あみだほとけかならずわれをむかへて。極樂にゆかせ給ふときゝて。これをふかく信じて。ずこしもうたがふ心なく。むかへさせ給へとおもひて念佛すれば。この心がすなはち三心具足の心にてあれば。だゞひらに信じてだにも念佛すれば。ずゞろに三心はあるなり。されば。こそよにあさましき一文不通のともがらのなかに。ひとすぢに念佛するものは。臨終正念にして。めでたき往生をするは。現に證據あらたなる事なれば。つゆちりもうたがふべからず。

中〳〵よくもしらぬ三心沙汰して。あしさまに心えたる人〳〵は。臨終のわろくのみありあひたる。それにてたれ〳〵も心うべきなり。

一。ときゞ〳〵別時の念佛を修して。心をも身をもはげましとゝのへすゝむべき也。日々に六万遍を申せば七万遍をとなふればとて。ただ在もいはれたる事にてはあれども。人の心ざまはいたく目もなれ耳もなれぬれば。いそ〳〵とすゝむ心もなく。あけくれ心いそがしき樣にてのみ。疎略になりゆく也。その心をためなをさん料に。時々別時の念佛はすべき也。しかれば善導和尚もねんごろにすゝめ給ひ。惠心の往生要集にもずゝめさせ給ひたる也。道場をもひきつくろひ。花香をもまいらせん事。とにちからのたへむにしたがひてかざりまいらせて。わが身をもことにきよめて。道場にいりてあるひは三時あるひは六時などに念佛すべし。もし同行などあまたあらん時は。かはるゞ〳〵いりて不斷念佛にも修すべし。かやうの事はをの〳〵ことがらにしたがひてはからふべし。さて善導のおほせられたるは。月の一日より八日にいたるまで。或は八日より十五日にいたるまで。或は十五日より廿三日にいたるまで。或は廿三日より晦日にいたるまでとおほせられたり。をの〳〵さしあはざら

ん時をはからひて。七日の別時をつねに修すべし。ゆめ〳〵すゞろ事どもいふものにすかされて。不善の心あるべからず。

一。いかにも〳〵最後の正念を成就して目には阿彌陀ほとけを見たてまつり。口には彌陀の名號をとなへ。心には聖衆の來迎をまちたてまつるべし。としごろ日ごろいみじく念佛の功をつみたりとも。臨終に惡緣にもあひ。あしき心もをこりぬるものならば。順次の往生しはづして。一生二生なりとも。三生四生なりとも。生死のながれにしたがひてくるしからん事はくちおしき事ぞかし。されば善導和尚すゝめておほせられたる樣は願弟子等臨命終時。乃至上品往生阿彌陀佛國とあり。いよ〳〵臨終の正念はいのりもしねがふべき事也。臨終の正念をいのるは。彌陀の本願をたのまぬ者ぞなど申すは。善導には。いかほどまさりたる學生ぞとおもふべき也。あなあさましおそろし〳〵。

一。念佛はつねにをこたらぬが。一定往生する事にてある也。されば善導すゝめての給はく。一發心已後誓畢此生無有退轉唯以淨土爲期。又云。一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故といへり。かやうにすゝめま

し〳〵たる事はあまたおほけれども。ことゝ〳〵くにかきのせず。たとむべし。あふぐべし。さらにうたがふべからず。

一。げに〳〵しく念佛を行じてげに〳〵しき人になりぬればよろづの人を見るに。みなわが心にはをとりたり。あさましくわろければ。わが身のよきまゝにはゆゝしき念佛者にてある物かな。だれ〳〵にもすぐれたりと思ふ也。この事をばよく〳〵意えてつゝしむべき也。世もひろし。人もおほければ。山の奥林の中にこもりゐて。人にもしられぬ念佛者の。貴くめでたき。さすがにおほくあるを。わがきかずしらぬにてこそあれ。されば。われほどの念佛者よもあらじと思ふはひが事也。大憍慢にてあれば。それをたよりにて。魔緣の付て往生をさまたぐる也。されば。わが身のいみじくて。つみをも滅し。極樂へもまいらばこそあらめ。ひとへに阿彌陀佛の願力にてこそ。煩惱をも罪業をもほろぼしうしなひて。かたじけなく彌陀ほとけの。てづからみづからむかへとりて。極樂へかへらせましますことなれ。されば。わがちからにて往生する事ならばこそ。われかしこしといふ慢心をばをこさめ。若憍慢の心だにもをこりなば。たちどころに阿彌陀ほとけの願にはそむきぬるものなれば彌陀も諸佛も

護念し給はずなりぬれば。惡魔のためにもなやまさるゝ也。返〳〵も憍慢の心ををこすべからず。あなかしこ〳〵。

和語燈錄。勅修御傳等に出づ。

三四　一枚起請文

もろこし我がてうにもろ〳〵の智者達のさたし申さるゝ觀念の念ニモ非ズ。又學文をして念の心を悟リテ申念佛ニモ非ズ。たゞ往生極樂のためニハ南無阿彌陀佛と申て疑なく往生スルゾト思とりテ申外ニハ別ノ子さい候はず。但三心四修と申事ノ候ハ皆決定して南無阿彌陀佛にて往生スルゾト思フ内ニ籠り候也。此外におくふかき事を存ゼバ二尊ノあはれみニハヅレ本願にもれ候べし。念佛を信ゼン人ハたとひ一代ノ法ヲ能々學ストモ。一文不知ノ愚どんの身ニナシテ。尼入道の無ちノともがらに同して。ちシヤノふるまいヲせずして。只一かうに念佛すべし。

爲證以兩手印

淨土宗ノ安心起行此一紙ニ至極せり。源空が所存此外ニ全ク別義を存ゼズ。滅後ノ

邪義ヲふせがんが爲メニ所存を記し畢。

建暦二年正月二十三日　　源空在判

これ黑谷金戒光明寺の藏本を寫すものなり。然るに和語燈錄。勅修御傳。九卷傳及び了譽の一枚起請之註等。みな爲證以兩手印已下を略してかゝげず。又物語集に是とほゞ同き法語あり。左に之をかゝげん。

上人のの給はく。念佛往生と申す事は。もろこしわが朝の。もろ〳〵の智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念佛にもあらず。又學問をして念佛の心をさとりとほして申す念佛にもあらず。たゞ極樂に往生せんがために南無阿彌陀佛と申て。うたがひなく往生するぞとおもひとりて申すほかに。別の事なし。たゞし三心ぞ四修ぞなど申す事の候は。みな南無阿彌陀佛にて決定して往生するぞとおもふうちにおさまれり。たゞ南無阿彌陀佛と申せば。決定して往生する事なりと信じとるべき也。念佛を信ぜん人は。たとひ一代の御のりをよく〳〵學しきはめたる人なりとも。文字一もしらぬ愚癡鈍根の不覺の身になして。尼入道の無智のともがらに。わが身をおなじくして。智者のふるまひせずして。たゞ一向に南無阿彌陀佛と申てぞかなはんずなど。

三五　二箇條疑問勘付

附聖光房二箇條疑問

淨土宗の小僧辨長上人の御房の法座前へ誠惶誠恐謹言。二箇條疑問事

一　鏡像圓融疑問事

一　金剛寶戒疑問事

一。鏡像圓融疑問者。所謂或淨土宗學者。向天台宗學者。相語云。天台宗與淨土宗。其義是一致也。所以天台宗。以鏡像之譬顯圓融之法。淨土宗亦復如是。以此鏡像圓融之義。爲淨土宗最底。是則淨土宗甚深義也。暫善導和尙爲誘引初心之人。制止難行勸進專修。理實以鏡像圓融之譬得其心。爲後心之人。天台淨土是則一同也。云云。天台諸宗之人者以鏡像圓融之譬。用淨土宗最底者。以淨土宗不可立別宗。只以天台摩訶止觀等可立淨土宗。何故以天台宗之外可立淨土宗哉。又小僧辨長跪上人御房法座前。常難蒙淨土敎訓之條。於此義者未會聞也。但依機未熟不蒙此御敎訓歟。何況小僧。善導所造和國到來西方化導八卷文證之中。於鏡像圓融之文更以未見之處。云云又自本依

不存此御言。不示此義。給哉。又小僧辨長自幼稚之昔。稟天台之流。於鏡像圓融之法門者。或時口誦文證。或時心推義理。但於長大之今。列淨土之座。承上人御房御義之時。異國漢朝先賢先哲於淨土法門各書義時其義蘭菊也。但於其中善導禪師之御義。往生之甘露也。所謂分別專雜二行。選擇正助二行。棄雜取專。兼助志正。吾淨土宗尤爲元意。如此御敎訓常蒙之。於鏡像之義爲淨土宗骨目云事。未蒙其仰。若爾者且爲專修堅固。且爲謗家對治。蒙其義決之狀如件。

二。金剛寶戒疑問者。或淨土宗學者云。付淨土宗有戒品。所謂金剛寶戒是也。於諸宗戒品是異也。密々口傳所傳之也。是吉水上人御房之傳也。云云。少僧辨長救云。吉水上人御房御義全以不然。淨土宗者只彌陀本願專修正行也。以此一行爲往生正路。全以不兼餘行。何以於此宗。付金剛寶戒哉云云。以前二ヶ條爲決斷弟子之疑問。爲對治諸宗謗難。又爲停止一家狼藉。又爲印持末代專修。上人御房御在世之時。錄子細言上者也。早住哀愍慈悲之御心。決斷左右進退之是非。賜御證判。停止彼狼藉之僻見。欲立此專修一行。子細言上如件。沙門辨長誠惶誠恐謹言。

元久三　月　日　（以上二箇條疑問）

就之上人以自筆被勸付云。已上二ヶ條以外僻事也。源空全以如此事不申候。以釋迦彌陀爲證。更如然僻事所不申候也云云。

九卷傳に出づ。

三六　沒後遺誡文

一。普告予遺弟等。予之沒後各宜別住。不須共居一所。共居雖似和合而又恐起鬪諍。不如閒居靜處獨行念佛也。又爲予修追福亦莫聚居一所致諍論起忿怒也。且莫修圖佛寫經檀施等善。唯應一向修念佛之行。平生之時自行化他既唯念佛一行。沒後寧雜自餘修善哉。又氣絕之後卽時與行念佛。或一晝夜或一七日至誡勸修。不要中陰之間不斷念佛。恐生懈怠還妨勇進也。有志之輩勿敢乖遺語矣。

一。予見聞古今人之沒後在家出家多有喧諍。皆由諍遺塵也。或兄弟忽妄連枝之昵。或同法俄變一器之志。每見聞此事不敢勝安忍。普告予門人。於予沒後就坊舍資具等莫起諍論。白衣尙可愧。況於緇服乎。門徒雖多信空實是多年給仕弟子。因爲表懇志聊有遺屬。謂黑谷本坊。寢殿雜舍 白川本坊。寢殿雜舍 坂下園一所。洛中領地一所。此外本尊。三尺彌陀立像定朝 聖教。摺寫六十

卷等 付屬之者也。其書在別紙 又吉水中坊。舊在西山廣谷 高畠領地一所付屬之感西也。又吉水東新坊。本故六條尼公之所持而圓親爲其假子。故今付屬之圓親。其書在別紙 又吉水西舊坊。長尊其本主也。今還遺之。佛堂一宇。舊在大谷 西坊尼公以西尊成乘乞之。因付與之。此外雜舍一兩皆附西坊付屬之長尊也。感西長尊是亦年來常隨弟子。故付與之者也。凡五衆亾後資財皆入僧。生存之間物屬於己。予今分與乃以此也。沒後二條豫示遺誡如斯。若夫不忘累劫之緣荷負半偈之恩。服膺遺語以擬報恩。同法遺弟共如水乳。互策勵心行。同入和合海。是予所願也。

建久九年四月八日　　釋源空

漢語燈錄に出づ。然るに圓光大師行狀翼贊に載する所更に之より詳なり。故に重錄するに左の如し。

一。葬家追善事。

蓋夫獨處閑居。修道之要。慣閑世事。道念紛亂。予沒後有志之輩。遺弟同法等。全不可摹會一所者也。其故何者。雖復似和合。集則起鬪諍。此言誡哉。甚可謹慎。若然者我同法等。於我沒後各各別住。不如不會。鬪諍之基由集會故也。羨我弟子同法等。當各閑住。本在草菴。苦

祈新生蓮臺。莫努努羣居一所。致諍論起忿怒。有知恩志之人。毫末不可違予遺戒者也。兼又沒後追善之儀則。亦深記予所存。圖佛寫經等善。浴室檀施等行。一向不可修之。若有報恩志之人。唯應一向修念佛之行。平生之時。既就自行化他。唯局念佛之行。沒故之後。爲報恩追修專雜自餘之修善哉。但於念佛行。尙切加用心。或眼閉之後。一晝夜自卽日始之。標誠至心各修念佛。中陰之間不斷念佛。動生懈倦之咎。還闕勇進之行。凡沒後行儀皆應用眞實心。可棄虛假行。有志之倫勿乖遺言矣。

二。不可諍論房舍資具衣鉢遺物等事。

予竊聞古見今。於入沒後。多有喧諍。抑是由諍遺塵也。或在家之兄弟。忽忘連枝之昵。或釋門之法孫。俄變一器之志。每見聞此事。不敢勝安忍。然則我弟子同法有志之倫。明察此趣於我沒後。莫起諍論。但雖弟子多入室者僅七人也。所謂信空。感西。證空。圓親。長尊。感聖。良淸也。此等諸人於彼世出世間之恩深。於我至順至孝之志篤者也。誰人忘二世之恩德。致一旦之諍訟乎。此中信空大德者。是多年入室之弟子也。其志諄厚而有誠。爲表懇志。聊有遺屬。謂黑谷本房。寢殿雜舍 白川本房。寢殿雜舍 坂下薗一所。洛中地一所。此外本尊 三尺彌陀立像定朝 聖教 摺寫六十卷等 付屬之了。其書在別紙 感西大德亦是年來常隨給仕之弟子也。其思相共而不淺。爲

酬給仕之恩。又聊有所付屬。謂吉水中房。本在西山廣谷 高畠地一所。但賣買之時半直與之 付屬之了。吉水東新房。是圓親大德所領也。是本主故六條尼公爲其養子付屬。並六條敷地手自書付屬與之了。雖然源空一期之間可進止之旨慇載彼書。將今重所付屬也。其書在別紙 長尊大德者死去時。覺悟房。並付帳一口沙汰與之了。又於白川邊買儲一屋之時。價直與之了 又此吉水西舊房其本主顯然也。人皆所知不能分配者也。持佛堂 本在大谷 西坊。尼公。自西尊成乘坊之手乞之。所讓渡也。此外雜舍一兩雖加潤色。皆附西本房了。此外無房舍及領地。不能付屬自餘諸人者也。此外雖非舊交。當時同法者三人。所謂遵西。直念。欣西也。爲其證人。故所註列也。又西來東去。尋問法門。朝來暮往。叩求出離之人甚多。誠以不足言者也 云云。

建久九年四月八日

釋源空 在御判

第六輯　消息

三七　答九條殿下問書

沙門源空欽言。尊公閣下生知之質覺悟世間電光志求樂土不退述下賢旨咨叩心要。倏忽奉承　高命驚悚誠難譬喩嚴威是迫欲辭不能貴問曰一發信心更無疑慮者少修一念十念以備往生資糧自其而後不復稱念而自以爲決可往生矣如此之人亦可順次往生也否又信心決定之後設犯四重五逆等重罪而不可爲往生障耶對曰觀經所說十念往生是臨終事非平生時臨終平生豈可混同平生行人縱起決定信心成就一念十念其人自其而後不復稱念則順次往生恐難尅果後念罪惡障往生故又縱犯小罪若不懺悔則尙成往生之障況犯四重五逆重罪而不用懺悔者豈可得往生乎是反不免惡趣者也或曰縱起淡信常專稱念若犯重罪卽當能懺悔念佛若其不然則難得順次往生也此義尤善矣夫乃至一念無有疑心上盡一形下至十聲一聲等之文此卽決定往生之依憑也然一稱念後不復用念且信心決定之後犯罪亦不妨往生也如此信者雖是似淡信反

成就邪見者近來自住此邪見者世間甚多誠可悲也又貴問曰一生不退稱念佛者誤犯重罪未及懺悔念佛而命終者以前念佛功可得往生耶將以後犯罪咎不得往生耶對曰誤犯罪咎其過實輕然於往生猶爲不定何者已造之罪不修懺悔罪體勢用能障善故上來所述卑懷如是餘虔附于貴使耳且徵弟子善惠今明之間拜待閣下誠惶謹言。

二月廿一日　　源空

拾遺漢語燈錄に出づ但し九卷傳に載する所是とやゝ異同あればかされて左に之を錄せん。

或時月輪殿より條々の御不審を御書にのせて上人に尋仰られければ委請文にのせて申されけり所謂一の御疑云一度信心を起て更に疑心なくば一念十念をもて決定往生の業として其後稱念せずといふとも順次の往生更に不審有べからざるか又信心決定の後は四重五逆等の罪を犯と云とも往生の障と成べからざるかと上人の請文に云たとひ決定往生の信心を起候とも其後又稱念する事なく並びに小罪也とも是を犯して後懺悔せずば敢て往生を遂がたく候歟何況四重五逆等の重罪を犯候はんに於ては往生するに及ばず還て惡趣を遁れがたく候近來諸宗の衆徒都鄙の道俗喧嘩たへず候旨此儀より起候歟又一の御疑云縱淡信を起し專稱

を致す共。重罪を犯して後更に懺悔念佛せずば。順次の往生遂難く候歟。上人請文に云。此義神妙に候。乃至一念無有疑心の釋は上盡一形下至十聲等にても。決定往生すべしと信ずべき文也。雖然一念の後。又稱念せず。ならびに犯罪せば。なを決定往生と信ずべきにあらず。如此信候は一重深心に似たりと雖。還て邪見と成候歟。近來此邪見に住する輩多候也と。又一の御疑云。一生不退の念佛は。不慮に重罪を犯して後いまだ懺悔念佛せずして命終せんものは。前の念佛の功によりて往生すべきか。將又犯罪の咎によりて往生すべからざる歟と。上人の請文云。不慮の犯罪其過頗輕と云とも。往生に於ては猶不定に候。其故は已作の罪懺悔を不用して善業を障ずといふ事なく候故也。

九卷傳に出づ。

三八　九條殿下の北政所へ進ずる御返事

かしこまりて申あげ候。さては御念佛申させおはしまし候なるこそ。よにうれしく

候へ。まことに往生の行には。念佛がめてたき事にて候也。そのゆへは。念佛は。是彌陀本願の行なれば也。餘行は。眞言止觀のたかき行なりといへども。彌陀の本願にあらず。又念佛は。釋迦付屬の行なり。餘行は。定散兩門のめてたき行なりといへども。釋尊是を付屬し給はず。又念佛は。六方諸佛の證誠の行なり。餘行は顯密事理のやむごとなき行也といへども。諸佛これを證誠し給はず。此ゆへに。樣々の行おほしといへども。往生のみちには。ひとへに念佛がすぐれたる事にて候なり。しかるを。往生のみちにうとき人の申すやうは。念佛は餘の眞言止觀の行にたえざるやすきまゝのつとめにてこそあれと申は。きはめたるひが事にて候也。そのゆへは。餘行をば彌陀の本願にあらずときらひすて。又餘行は釋尊の付屬にあらざればえらびとゞめ。又餘行は諸佛の證誠にあらざるをもてやめおさめて。いまはたゞ彌陀の本願にまかせ。釋尊の付屬により。諸佛の證誠にしたがひて。をろかなるわたくしのはからひをばやめて。これらのゆへつよき念佛の行を信じつとめて。往生をばいのるべしと申事にて候也。されば惠心の僧都の往生要集に。往生の業には。念佛を本とすと申したるは此意也。今はたゞ餘行をとゞめ給て。一向に念佛にならせ給ふべし。念佛にとりても。

一向專修の念佛がめてたき事にて候也。そのむねは。三昧發得の善導和尚の觀經の疏にみえて候。されば雙卷經には。一向專念無量壽佛ととき給ひて候。をよそ一向のことばは。二向三向に對して。ひとへに餘の行をばえらびすて。きらひのぞく意にて候なり。往生要集にも。諸行の中に念佛すぐれたるよし見えて候。又傳敎大師の。七難消滅の法にも。念佛をつとむべしとみえて候。されば。君達などの御いのりの料にも。念佛がめてたき事にて候。をよそ十方の諸佛。三界の天衆の擁護し給ふ行にて候へば。現世後生の御つとめ。何事かこれにすぎ候はん。いまはたゞ。一向專修の但念佛にならせ給ふべく候。

和語燈錄。勅修御傳等に出づ。又西方指南抄に出す所文稍異同あり。

三九　御消息

御文こまかにうけ給はり候ぬ。かやうに申候事の。一分の御さとりをもそへ。往生の御心ざしもつよくなり候ぬべからんには。をそれをもはゞかりをも。かへりみるべ

きにて候はず。いくたびも申たくこそ候へ。まことにわが身のいやしく。わが心のつたなきをばかへりみ候はず。だれ〳〵もみな人の。彌陀のちかひをたのみて。決定往生のみちに。をもむけがしとこそおもひ候へども。人の心さま〳〵にして。たゞ一すぢにゆめまぼろしのうき世ばかりのたのしみさかへをもとめて。ずべてのちの世をもしらぬ人も候。又後世ををそるべきことはりをおもひしりて。つとめをこなふ人につきても。かれ此に心をうごかして。一すぢに一行をたのまぬ人も候。又いづれの行にても。もとよりしはじめおもひそめつる事をば。いかなることはりをきけども。本の執心をあらためぬ人も候。又けふはいみじく信ををこして。一すぢにをもむきぬとみゆる程にうちすつる人も候。かくのみ候て。まことしく淨土の一門にいりて。念佛の一行をもはらにする人のありがたく候事は。わが身ひとつのなげきとこそは。人しれず思ひ候へども。法によりて。人によらぬことはりをうしなはぬ程の人も。ありがたき世にてをのづからすゝめこゝろみ候にも。われからのあなづらはしさに。申いづることはりもすてらるゝにこそなど。おもひしらるゝ事にてのみ候か。心うくかなしく候て。是ゆへにいまひときは。とく淨土にむまれて。さとりをひらきて

のちいそぎ此世界に還りきたりて神通方便をもて結縁の人をも無縁のものをも
ほむるをもそしるをもみなことゝく念佛にすゝめいれて淨土へむかへむとち
かひををこしてのみこそ當時の心をもなぐさむる事にて候に此おほせにぞわが
心ざしもしるしあるこゝちして あまりにうれしく候へその儀にて候はゞおなじ
くは まめやかにげに〳〵しく御沙汰候ひてゆくすゑもあやうからず往生もたの
もしき程におぼしめしさだめさせおはしますべく候 詮じては人のはからひ申す
べき事にても候はず よく〳〵案じて御らん候へ 此事にすぎたる御大事何事かは
候べき 此世の名聞利養は中〳〵に申ならぶるもいま〳〵しく候 やがてきのふ今
日まなこにさへぎりみゝにみちたるはかなさにて候めれば 事あたらしく申たつ
るにをよばず たゞ返々も御心をしづめて おぼしめしはからふべく候 さきには聖
道淨土の二門を心えつけて 淨土の一門にいらせおはしますべきよしを申候きい
まは淨土門につきてをこなふべき樣を申べし 淨土に往生せんとおもはん人は 安
心起行と申て 心と行と相應すべき也 その心といふは 觀无量壽經に說ていはく もも
し衆生ありて かの國にむまれんとねがはん者は 三種の心ををこして 卽往生すべ

し なにをか三つとする 一には至誠心 二には深心 三には迴向發願心也 三心を具せ
るものは かならずかの國にむまるといへり 善導和尙此三心を釋していはく 一に
至誠心と云は 至といは眞也 誠といは實也 一切衆生の身口意業に修せむところの
解行かならず眞實心の中になすべき事をあかさんとおもふ 外には賢善精進の相
を現じ 內には虛假をいだくことをえざれ 內外明闇をえらばず かならず眞實をも
ちひよ かるがゆへに至誠心となづくといへり 此釋の意は 至誠心といふは 眞實心
也 その眞實といふは 身にふるまひ 口にいひ 心におもはん事 みなまことの心を具
すべき也 卽內はむなしくして 外をかざる心のなきをいふなり 此心はうき世をそ
むきて まことのみちにおもむくとおぼしき人々の中に よく〳〵用意すべき心ば
へにて候也 われも人も いふばかりなきゆめの世を執ずる心のふかゝりしなごりに
て ほど〳〵につきて名聞利養をわづかにふりすてたるばかりを ありがたくいみ
じき事にして やがてそれを返りて又名聞にしなして 此世さまにも心のたけのう
るさきにとりなしてさとりあさき世間の人の心の中をばしらず 貴がりいみじか
るを 是こそは本意なれとしえたる心ちして みやこのほとりをかきはなれて かすか

なるすみかをたづぬるまでも。心のしづまらんためをばつぎにして。本尊道場の莊嚴まがきのうちには。木立などの心ぼそく。ものあはれならんことがらを。人にみえきかれん事をのみ執する程に。露ばかりの事も。人のそしりにならん事あらじと。いとなむ心より外におもひまじふる事も。なきやうなる心のみして。佛のちかひをたのみ。往生をねがはんなどいふ事をば思ひいれず。沙汰もせぬことの。やがて至誠心かけて。往生もえせぬ心ばへにて候也。又かく申候へば。一途に此世の人目をばいかにもありなんとて。人のそしりをかへりみぬがよきぞと申にては候はず。たゞし時にのぞみ。譏嫌のために。世間の人目をかへりみる事は候へども。それをのみおもひいれて。往生のさはりになるかたをば。かへりみぬ樣にひきなされ候はん事の。返々もおろかにくちおしく候へば。御身にあたりても。御心えさせまいらせ候はんために申候也。此心につきて四句の不同あるべし。一には外相は貴げにて。內心は貴からぬ人あり。二には外相も內心も。ともに貴からぬ人あり。三には外相は貴げもなくて內心は貴き人あり。四には外相も內心もともに貴き人あり。四人が中にさきの二人は。いまきらふところの。至誠心かけたる人也。是を虛假の人となづくべし。のちの二

人は至誠心具したる人也。是を眞實の行者となづくべし。されば詮ずるところは。たゞ內心にまことの心をこして。外相はよくもあれ。あしくもあれ。とてもかくてもあるべきにやと。おぼえ候也。おほかた此世をいとはん事も。極樂をねがはん事も。人目ばかりをおもはで。まことの心をこすべきにて候也。これを至誠心と申候也。二に深心といふは。善導釋していはく。深心といふはずなはちこれふかく信ずる心なり。是に二種あり。一には決定してふかくわが身は是煩惱を具せる罪惡生死の凡夫也。善根薄少にして。曠劫よりこのかた。つねに三界に流轉して。出離の緣なしと信ずべし。二にはふかくかの阿彌陀佛四十八願をもて。衆生を攝取し給に。卽名號を稱する事。下十聲一聲にいたるまで。かの願力に乘じて。さだめて往生する事をうと信じて。乃至一念もうたがふ心なきがゆへに。深心となづく。又深信といふは。決定して心をたてゝ。佛敎にしたがひて修行して。ながくうたがひをのぞき。一切の別解別行。異學異見異執のために。退失傾動せられざる也といへり。此釋の意は。はじめにはわが身の程を信じ。のちには佛の願を信ずる也。たゞし後の信を決定せんがために。はじめの信心をばあぐる也。そのゆへは。もしはじめの信心をあげずして。のちの信心を

出したらましかば。もろ〳〵の往生をねがはん人。たとひ本願の名號をばとなふとも。みづから心に貪欲瞋恚等の煩惱をもをこし。身に十惡破戒等の罪惡をもつくりたる事あらば。みだりにみづから身をひがめて。かへりて本願をうたがひ候ひなましいま此の本願に十聲一聲までも往生すといふは。おぼろげの人にはあらじ。妄念もをこさず。罪もつくらずめてたき人にてぞあるらん。わがごときともがらの。一念十念にてはよもあらじとぞおぼえまし。しかるを善導和尙未來の衆生の。此うたがひをのこさん事をかゞみて。此二種の信心をあげて。われらがごときいまだ煩惱をも斷ぜず。罪業をもつくる凡夫なりとも。ふかく彌陀の本願を信じて。念佛すれば。一聲にいたるまで決定して。往生するむねを釋し給へり。此釋のことに心にそみて。いみじくおぼえ候也。まことにかくだにも釋し給はざらましかば。われらが往生は不定にぞおぼえまし。とあやうくおぼえ候也。されば此の義を心えわかぬ人やらん。わが心のわろければ往生はかなはじなどこそは。申あひて候めれ。そのうたがひの。やがて往生せぬ心にて候けるものを。たゞ心のよきわろきをも返りみず。罪のかろきおもきをも沙汰せず。心に往生せんとおもひて。口に南無阿彌陀佛ととなへて。聲に

つきて決定往生の思ひをなすべし。その決定の心によりて。卽往生の業はさだまる也。かく心うればうたがひなし。往生は不定とおもへば。やがて不定也。一定とおもへば一定する事にて候也。されば詮じては。ふかく信ずる心と申候は。南無阿彌陀佛と申せば。其佛のちかひにていかなる身をもえらばず。いかなるとがをもきらはず。一定むかへ給ふぞと。ふかくたのみて。うたがふ心のすこしもなきを申候なり。又別解別行にやぶられざれと申候は。解こことに。行こことならん人の。いはん事につゐて。念佛をもすて往生をもうたがふ事なかれと申候也。さとりことなる人と申すは。天台法相等の八宗の學生是也。行こことなる人と申すは。眞言止觀等の一切の行者是なり。これらはみな聖道門の解行なり。淨土門の解行にことなるがゆへに。別解別行となづくるなり。あらぬさとりの人に。いひやぶらるまじきことはりをば。善導こまかに釋し給ひて候へども。その文ひろくして。つぶさにひくにをよばず。心をとりて申さばたとひ佛きたりてひかりをはなち。したをいだして煩惱罪惡の凡夫の。念佛して一定往生すといふ事は。ひが事ぞ信ずべからずとの給とも。それによりて。一念もうたがふ心あるべからず。そのゆへは。一切の佛はみなおなじ心に。衆生をばみちびき給

ふ也。卽まづ阿彌陀如來願ををこしていはく。もしわれ佛になりたらんに。十方の衆生。わが國にむまれんとねがひて。我が名號をとなふる事。下十聲一聲にいたらんに。わが願力に乘じて。もしむまれずば。正覺をとらじとちかひ給て。その願成就して。すでに佛になり給へり。しかるを釋迦ほとけ此世界にいて、衆生のために。かの佛の本願をとき給へり。又六方にをの〳〵恆河沙數の諸佛まし〳〵て。一々に舌をのべて。三千世界におほふて。无虛妄の相を現じて。釋迦佛の彌陀の本願をほめて。一切衆生をすゝめて。かの佛の名號をとなふれば。さだめて往生すととき給へるは。決定してうたがひなき事也。一切衆生みなこの事を信ずべしと。證誠し給へり。かくのごときの一切の諸佛。一佛ものこらず。同心に一切の凡夫。念佛して決定して往生すべきむねを。あらはし願をたてあらはせるはその願をとき。あらはせるはその說を證して。すゝめ給へるうへには。いかなる佛の又きたりて。往生すべからずとはの給べきぞといふことはりの候ぞかし。このゆへに佛きたりて。の給ともおどろくべからずとは申候なり。佛なをしかり。いはんや菩薩聲聞緣覺をや。いかにいはんや。凡夫をやと意えつれば。一たびも此念佛往生の法門をきゝひらきて。信ををこしてんのちは。いかなる

人とかく申とも。ながくうたがふ心あるべからずとこそおぼえ候へ。これを深心と申候也。三に迴向發願心といふは。善導釋していはく。過去及今生の。身口意業に。修するところの世出世の善根。をよび他の一切の凡聖の。身口意業に修せんところの。世出世の善根を隨喜して。此自他所修の。善根をもて。こと〳〵くみな眞實深信の心の中に迴向して。かの國にむまれんとねがふ也。また迴向發願心といふは。かならず決定眞實の心の中に迴向して。むまるる事をうるおもひをなせ。この心ふかく信じて。なをし金剛のごとくにして。一切の異見異學別解別行の人のために。動亂破壞せられざれといへり。此釋の意はまづわが身につきて。さきの世をよびこの世に。身にも口にも意にもつくりたらん功德をみなこと〳〵く極樂に迴向して往生をねがふなり。次に我身の功德のみならず。こと人のなしたらん功德をも。佛菩薩のつくらせ給ひたらん功德をも。隨喜すれば。みな我功德となるをもて。こと〳〵く極樂に迴向して。往生をねがふなり。すべてわが身の事にても。此世の果報をもいのり。おなじくのちの世の事なりとも。極樂ならぬ餘の淨土にむまれんとも。もしは都率にむまれんとも。もしは人中天上にむまれんとも。たとひかくのごとくかれにてもこれにて

も。異事に迴向する事なくして。一向に極樂に往生せんと迴向すべき也。もしこのことはりをも。おもひさだめざらんさきに。この世の事をもいのり。あらぬかたへも迴向したらん功德をも。みなとり返して。往生の業になさんと迴向すべき也。一切の善根をみな極樂に迴向すべしと申せばとて。念佛に歸して。一向に念佛申さん人の。ことさらに餘の功德をつくりあつめて。迴向せよとには候はず。過ぬるかたにつくりをきたらん功德をも。もし又こののちなりとも。をのづから便宜にしたがひて。念佛のほかの善を修する事のあらんをも。しかしながら往生の業に迴向すべしと。申す事にて候也。此心金剛のごとくにして。別解別行の人にやぶられざれと申候は。さきにも申候つる樣に。ことさとりの人にをしへられて。かれこれに迴向する事なかれと申候也。金剛はやぶれぬものにて候なれば。たとへにとりて。此心のやぶれぬ事も。金剛のごとくなれと申候にやとおぼへ候。是を迴向發願心とは申候也。三心のありさま。おろ〳〵申ひらき候ぬ。此三心を具しぬれば。かならず往生するなり。一心もかけぬれば。むまるゝ事をえずと。善導は釋し給ひたれば。往生をねがはん人は。最も此三心を具すべき也。しかるにかやうに申したるには。別々にて。事〳〵しきやうなれ

ども。意えとくには。さすがにやすく具しぬべき心にて候也。詮じてはたゞまことの心ありて。ふかく佛のちかひをたのみて。往生をねがはんずるにて候ぞかし。されば あさきふかきのかはりめこそ候へども。さほどの心は。たれかをこさゞらんとこそ はおぼえ候へ。かやうの事は。うとくおもふおりには。大事におぼえ候。とりよりて沙汰すれば。さすがにやすき事にて候也。よく〳〵心えとかせおはしますべく候。たゞしこの三心は。その名をだにもしらぬ人も。そらに具して往生し。又こまかにならひ沙汰する人も。返りて闕る事も候也。是につきても。四句の不同候べし。さは候へども。又是を意えて。わが心には三心具したりとおぼえば。心づよくもおぼえ。又具せずとおぼえば。心をもはげまして。かまへて具せんとおもひしり候はんは。よくぞ候ひぬべければ。心のをよぶ程は申に候。このうへさのみはつくしがたく候へば。とゞめ候ぬ。又この中におぼつかなく。おぼしめす事候はんをば。をのづから見參にいり候はん時。申ひらくべく候。是ぞ往生すべき心ばへの沙汰にて候。これを安心とはなづけて候也。

拾遺和語燈錄。勅修御傳等に出づ。義山曰。此御文體甚だ禮儀ありて見ゆれば。若は月輪殿の北の方

第六輯　消息　御消息

へ遣はされける御返事なるにやと。然るに和語燈錄の跋文に。九條の北の政所へ遣ずる御返事二通あり。其の中三心なのせたる本は。餘の和語の書に似ず。義勢も違へり。大に疑ひあるうへに。古き人僞書と申傳へたり。されば これを入れずとあり。而して今此文收めて燈錄の中に在るを見れば。恐くは九條の北の方へ遣はされたる他の一通の御返事にはあらざるべし。

四〇　鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事

御文のやうくはしくうけ給候ぬ。さては念佛の功德は。佛もときつくしがたしとの給ひて候。されば智惠第一の舍利弗。多聞第一の阿難も念佛の功德はしりがたしとの給て候ひし也。かくのごとく廣大の善根にて候へば。まして源空などは申つくすべくも候はず。源空。此朝にわたりて候。聖敎を。隨分にひらき見候へども。淨土の敎文は。わたりはてずとかんがへて候。わづかに震旦よりとりわたして候敎文をだにも。一年二年などには。申つくすべくもおぼえ候はず。さりながらも。おほせをかうぶりて候へば。少々申のべ候べし。先念佛を信ぜざる人々候ひて申候なる事は。くまがへの入道。つのとの三郎などは。無智のものなればこそ。餘行をばせさせずして。念佛ばかりをば。法然房はすゝめたれと申候なる事。きはまりなきひが事にて候。其ゆへは。念佛の行は。本より有智無智をえらばず。彌陀のむかしちかひ給ひし本願はあまねく十方世界の一切衆生のためなり。無智のためには念佛を願とし。有智のためには餘行を願とし給ふ事なし。されば有智無智。善人惡人。持戒破戒。貴も賤も。男も女もへだてず。若は佛の在世の衆生。若は佛の滅後の衆生。若は末法万年の後。三寶みなうせたる時の衆生迄も。たゞ念佛ばかりこそ。現當の祈禱とはなり候はめ。善導和尙は。彌陀の化身にて。殊に一切衆生をあはれみ給ひて。諸の聖敎をかんがへて。專修念佛をすゝめ給へるも。ひろく一切衆生のためにて候也。されば彌陀の本願により。善導の御心にしたがひて。念佛の一門をすゝめ候はんに。いかてか。無智の人のみにかぎりて。有智の人をへだてゝ。往生せさせじとはし候はんや。若しからば。彌陀の本願にもそむき。善導の御意にもかなふべからず。然ば此邊にまうて來て。往生の道をたづね候人には。有智無智を論ぜずひとへに專修念佛をすゝめ候なり。さやうに專修念佛

を申候をとゞめんとつかまつる人は。先世に念佛三昧得道の法門をきかずして。後の世にさだめてまた三惡道にかへるべき者の。しかるべくてさやうに申候也。その ゆへは聖敎にひろくみえて候也。是卽修行するをみては毒心ををこし。方便してきをひてあだをなす。かくのごときの生盲闡提のともがらは。頓敎を毀滅してながく沈淪す。大地微塵劫を超過すとも。いまだ三途の身をはなれん事を得べからずと。とき給へり。此文の意は。淨土をねがひ念佛を行ずる人を見ては。毒心ををこし。ひが事をたくみめぐらして。樣々の方便をなして。專修念佛の行をやぶり。あだをなして。申とゞむる也。かくのごときの人は。むまれてより佛法のまなこしゐて。善根のたねをうしなへる。闡提のともがらなり。是彌陀の名號をとなへて。ながく生死をはなれて。常住の極樂に往生すべけれども。この敎法をそしりほろぼすつみによりて。ながく三惡道にしづむ。かくの如きの人は。大地微塵劫をつくすとも。ながく三途の身をはなれんこと有べからずといふ也。しかれば則。さやうにひが事を申さん人をば。かへりてあはれみ給ふべき也。左程の罪人の申さんによりて。專修念佛に懈怠をなし。念佛往生にうたがひをなし。不審をいたさん人は。いふにかひなき事にこそ候はめ。を

よそ彌陀に緣あさく。往生の時いたらぬものは。きけども信ぜず。念佛の者をみては腹をたち。聲をきゝてはいかりをなして。念佛はあしき事なりなど申すはずべて經論にも見へざる事を申にて候也。御意をえさせ給ひて。いかに申す共。御心ばかりは御變改候べからず。あながちに信ぜざらん人をば。御すゝめ候べからず。佛なを力をよびたまはず。いかにいはんや凡夫のちからはをよぶまじく候。かゝる不信の衆生をも。過去の父母兄弟親類なりと思召候て。慈悲ををこして念佛申て。極樂の上品上生にまいりてさとりをひらき。ずみやかに生死にかへりいりて。誹謗不信の人をも。むかへんとおぼしめすべき事にて候なり。此由を御意得候べきなり。

一。異解の人の餘の善根を修せんには。財寶をあひ助成しておぼしめすべき樣は。我はこれ一向專修にて決定して往生すべき身なり。他人のとをきみちを。わが近き道に。結緣せさせんとおぼしめすべき也。其うへ專修をさまたげ候はざらんは結緣せんにとがなし。

一。人〳〵の堂をつくり。佛を作り。經をかき。僧を供養せんをば。能々心をこたらずして信ををこして。かくのごとくの雜善根をも修せしめ給へと。御すゝめ候べし。

一。念佛の意をしらずして。此世のいのりに佛にも神にも申し。經をも誦しかき。堂を
も作らば。それも先のごとくおぼしめすべく候。せめては又後の世のためにせばこ
そあらめ。其要なしなどおほせ候べからず。專修をさふる人にはあらざるなりと思
召候べし。

一。念佛を申事樣々の義候へども。只六字をとなふるばかりに一切はおさまりて候
也。意には本願をたのみ。口には名號をとなへ。手には數珠をとり。つねに心にかくる
が。きはめたる決定の業にて候也。念佛の行は。本より行住坐臥時處諸緣をえらばず。
身口の不淨をもきらはぬ行にて候へば。易行往生とは申候なり。但其中にも。心をき
よくして申をば第一の行と申候也。只淨土を心にかくれば。心淨の行法にて候也。人
をもかやうに御すゝめ候べし。さやうにつねに申させ給はんをば。とかく申べき樣
候はず。我身もしるべくて。此度往生すべしとおぼし召候べし。ゆめ〳〵此心能々つ
よくならせ給べし。

一。念佛の行を信ぜぬ人にあひて論じ。又あらぬ行の人々にむかひて執論候べから
ず。あながちに別解異學の人を見て。あなづりそしる事候まじ。いよ〳〵重罪の人と

なさん事不便に候。おなじ心に極樂をねがひ。念佛を申さん人をば。たとひ卑賤の人
なりとも。父母師匠にもをとらずおぼしめすべし。今生の財寶のともしからんにも。
ちからをくはへ給べし。またすこしも念佛に心をかけ候はんをば。能々すゝめたま
ふべく候。是も彌陀如來への御みやづかへと思召候べし。釋迦如來入滅よりこのか
た。次第に小智小行になりて候に。我も〳〵と智惠ありがほに申す人々は過にて候
べし。せめては錄內の經敎をだにもきかずみず。いかにいはんや錄の外の經敎を見
ざる人の。智惠有がほに申すは。ゐのうちのかへるに似たり。隨分に震旦日本の聖敎
を取あつめて。ひらきかんがへて候に。念佛を信ぜぬ人は。先世に重罪をつくりて。地
獄に久しく有て。又地獄へはやく歸るべき人なり。たとひ千佛世にいでゝ。念佛はま
たく往生の業にあらずとをしへ給ふとも。信ずべからず。是は釋迦如來よりはじめ
て。恆河沙の佛の證誠し給へる事なればと思召て。御心ざし金剛よりもかたくして
一向專修は御變改候べからず。若論じ申さん人をばこれへつかはされて。だて申さ
んやうをきけと仰候べし。樣々の要文書しるしてまいらすべく候へども。たゞこれ
にすぎ候まじ。又娑婆世界の人は。餘の淨土をねがはん事は。弓なくして天の鳥をと

り。足なくしてたかき木ずゑのはなをおらんとせんがごとし。必專修念佛は。現當のいのりと成候也。これも經の說にて候也。又御內の人〳〵には。九品の業を。人にしたがひてはじめをはりたへ候ひぬべきやうに。御すゝめ候べし。あなかしこ〳〵。

和語燈錄。勅修御傳等に出づ。又西方指南抄に載する所文稍異同あり。

四一　答兵部卿平基親書

附基親奉上人書

念佛の數遍。ならびに本願を信ずる樣。基親の愚案かくのごとくに候。難者いはれなく覺候。此折紙に御存知の旨。御自筆をもて書給はるべく候。難者にやぶらるべからざるがゆへなり。別解別行の人にて候はゞ。耳にも入べからず候に。御弟子等の說に候へば。不審をなし候なり。又念佛者は女犯はゞかるべからずと申あひだ。在家は勿論なり。出家はこはく本願を信ずとて。出家の人の女にちかづき候條。いはれなく候歟。善導は目をあげて女人を見るべからずとこそ候めれ。この事あら

〳〵仰をかふるべく候。基親は。たゞひらに本願を信じて。念佛を申候なり。料簡も才學も候はざるゆへなり云云。取意。彼註進の狀云云。

基親取信本願之樣

雙卷經上云。設我得佛。十方衆生。至心信樂。欲生我國。乃至十念。若不生者。不取正覺。文同下云。聞其名號。信心歡喜。乃至一念。至心迴向。願生彼國。卽得往生。住不退轉。文往生禮讚云。今信知彌陀本弘誓願。及稱名號。下至十聲一聲等。定得往生。乃至一念。無有疑心。文觀經疏云。一者決定深信。自身現是罪惡生死凡夫。曠劫已來。常沒常流轉。無有出離之緣。二者決定深信。彼阿彌陀佛。四十八願。攝受衆生。無疑無慮。乘彼願力。定得往生。文此等の文を案じ候て。基親罪惡生死の凡夫なりといへども。一向に本願を信じて。名號を唱へ候。毎日に五萬遍なり。決定佛の本願に乘じて。上品に往生すべきよし。ふかく存知候なり。此外別の料簡なく候。しかるに或人。本願を信ずる人は一念なり。しかれば。五萬遍無益なり。これ本願を信ぜざるなりと申。基親答曰。念佛一聲の外。百遍乃至萬遍は。本願を信ぜずといふ文候やと。難者云。自力にて往生はかなひがたし。たゞ信をなしてのちは。念佛の數無益なりと申。基親又申云。自力往生と

は。他の難行等をもて。願ずと申さばこそは。自力とは申候はめ。隨て善導の疏云。上盡百年下至一日七日。一心專念彌陀名號定得往生。必無疑。と候めるは。百年念佛すべしとこそは候へ。又上人の御房。七萬遍を唱へしめまします。基親御弟子の一分たり。よて數多く唱へんと存候なり。佛の恩を報ずるなり。禮讚云不相續念報彼佛恩。故。心生輕慢。雖作業行。常與名利相應故。人我自覆。不親近同行善知識故。樂近雜緣。自障障他往生正行故。云云。佛恩を報ずとも。念佛の數遍多く申べしと。見えたりと申。云云。編者曰。以上基親書。

仰旨謹奉候畢。御信をとらしめ給樣。折紙具に拜見候に。一分も愚意の所存にたがはず候。ふかく隨喜し奉候なり。近來一念の外の數遍無益なりと申義出來候。勿論不足言の事に候。文釋を離て義を申人。すでに證を得候歟如何。尤不審候。又ふかく本願を信ずるもの。破戒もかへりみるべからざるよしの事。これまたとはせ給にも不可及事歟。附佛法の外道。外に求べからず。凡は近來念佛の天魔きをひ來て。かくのごときの狂言いてきたり候歟。なを〳〵左右にあたはず候。云云取詮。

勅修御傳に出づ。然るに漢語燈錄には漢語を以て之を記し。文意稍略せり。今之を重載するに左の如し。

近日道體安寧也否。弟子基親辱承尊師慈誨。淡立信於阿彌陀佛本願。公務之暇唱佛。日五萬遍。頃有邪人詰難多端。悉胸臆之妄談。全非師授之正道也。今別記吾所領解取信本願之趣。謹呈之猊座下。又有邪人曰。淡信本願修念佛者。出家在家共不應避婬酒食肉等諸惡業也。予曰在家且措。出家犯婬食肉無有此處。善導和尙不擧目見女人。豈非是龜鏡乎。伏乞受師賢判以防邪人誣說。幸甚謹言。

基親取信本願章

雙卷經上云設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念若不生者不取正覺。已上同經下云諸有衆生聞其名號信心歡喜乃至一念至心迴向願生彼國卽得往生住不退轉。已上往生禮讚云今信知彌陀本弘誓願及稱名號下至十聲一聲等定得往生。乃至一念無有疑心。故名淡心。已上觀經疏云一者決定淡信自身現是罪惡生死凡夫曠劫已來常沒常流轉無有出離之緣。二者決定淡信彼阿彌陀佛四十八願攝受衆生無疑無慮乘彼願力定得往生。已上基親熟案此等文自啓發信知。雖爲罪惡生死凡夫淡信本願唱佛名號乘彼願力決定往生。如是信知焉。是以稱名念佛日五萬聲。更無他事。或云信

本願人一念已足。五萬稱名亟無益也。欲積多念者由疑本願也。予云念佛一聲之外不須多念。積多念者不信本願出在何文。或云須多念者是自力心。故不信本願也。一念已足。多念又何爲乎。予云凡自力他力者聖淨二門相對論之。淨土門中雖有正雜二修之別。共乘彼佛願。故皆名他力。聖道門者卽難行道也。以是自力故。淨土門者卽易行道也。以是他力故。然則雜行尙非自力。何況稱佛之多念乎。故善導疏曰上盡百年下至一日七日專念名號定得往生。既言上盡百年。豈非是多念乎。且吾師上人日別唱七萬聲。吾從師蹤故唱五萬耳。或又云本願是一念也。二念已後爲謝佛恩。故善導禮讚曰又不相續念報彼佛恩故。已上知是相續爲報佛恩也。予云佛好功德彌多品位彌高。是故行者相續多念則稱佛意。是乃爲報佛恩。非汝所謂之報謝也。編者曰。以上基親書。

恭領芳書。承聞君雖公務事繁。深信彌陀本願之旨。日別稱名至五萬遍。實是人中芬陀利華。隨喜何極乎。且披見寄取信本願一章。無有一事違愚懷也。邪人妄說固不足言。離聖教文恣立私義。實附佛法外道。天魔所爲。尙非面謁難盡。不堪痛歎。可恐可恐。

四二　遣鎭西聖光房書

源空所存。皆申于御邊畢。此外若有所存者。以楚釋四王奉仰其證。　在判

出聖光上人傳。決疑鈔直牒同之。

四三　黑田の聖人へつかはす御文

末代の衆生を往生極樂の機にあてゝ見るに。行すくなしとてうたがふべからず。一念十念にたりぬべし。罪人なりとてうたがふべからず。罪根ふかきをもきらはず。時くだれりとてうたがふべからず。法滅已後の衆生なを往生すべし。いはんやこのごろをや。わが身わろしとてうたがふべからず。自身はこれ煩惱具足せる凡夫なりといへり。十方に淨土おほけれども。西方をねがふは。十惡五逆の衆生もむまるゝゆへ也。諸佛の中に彌陀に歸したてまつるは。三念五念にいたるまで。みづから來りてむかへ給ふがゆへ也。諸行の中に念佛をもちゆるは。かのほとけの本願なるがゆへ也。今彌陀の本願に乘じて往生してんには。願として成ぜずといふ事あるべからず。本

願に乘ずる事は。たゞ信心のふかきによるべし。うけがたき人身をうけて。あひがたき本願にあひて。をこしがたき道心ををこして。はなれがたき輪廻のさとをはなれて。むまれがたき淨土に往生せん事は。よろこびの中のよろこび也。つみをば十惡五逆のもの。なをむまると信じて。小罪をもをかさじとおもふべし。罪人なをむまる。いかにいはんや善人をや。行は一念十念むなしからずと信じて。無間に修すべし。一念なをむまる。いかにいはんや多念をや。阿彌陀佛は不取正覺の詞を成就して。現にかのくにゝましませば。さだめていのちをはらん時には來迎し給はんずらん。釋尊はよきかなや。わがをしへにしたがひて。生死をはなれんとすと知見し給ふらん。六方諸佛はよろこばしきかな。われらが證誠を信じて。不退の淨土に往生せんとすとよろこび給ふらんと。天にあふぎ地にふして。よろこぶべし。このたび彌陀の本願にあへる事を。行住坐臥にも報ずべしかのほとけの恩德を。たのみてもなをたのむべきは乃至十念の詞。信じてもなを信ずべきは必得往生の文なり。

和語燈錄勅修御傳等に出づ。世に小消息と稱するもの是なり。

四四　答空阿彌陀佛書

接來翰審道情。聞所勞日久矣。痛懷不少。但痟瘍病設雖服藥無驗多不至死門。宜應保養。抑凡夫之出離生死也無如往生淨土。往業雖多無過稱名。稱名往生是乃彼佛本願行也。故善導和尚云如無量壽經云若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺。彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。上已凡念佛之時應作是觀本願不誤必垂引接。此外不須別觀行也。又往生要集臨終行儀云應作是念如來本誓一毫無謬。願佛決定引接我。南無阿彌陀佛。或漸漸取略應念。願佛必引接。南無阿彌陀佛。上已臨終觀念取要不過此也。又平常正念之時稱名積功。設雖臨終不稱佛名決定往生也。其旨見羣疑論。平生克決信於此處。寧臨死門有所恐乎。

源　空

三月十日

漢語燈錄に出づ。勅修御傳にかゝぐるものは和語にして少し略せり。然るに義山曰。大師の空阿彌陀佛に遣はし給へる書の眞蹟今珍藏する人あり。親たり拜見するに左の如しと。

仰旨委以承候畢。先御所勞事返々爲歎候。但痟瘍病なんどにては。設雖大事候多分

及死門事不出來歟抑凡夫の生死をいづる事は往生淨土にはしかず往生の業おほしといへども稱名念佛にはしかず稱名往生はこれかの佛の本願の行也故に善導和尙のたまはく若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛當知本誓重願不虛衆生稱念必得往生已上文故に稱名往生はこれ彌陀の本願なり念佛のときこの觀をなすべし本願あやまりたまはずかならず引接をたれたまへとこのほかには別の觀行いるべからず又往生要集の臨終の行儀にいはくこの念をなすべし如來の本誓は一毫もあやまり給事なしねがはくはほとけ決定して我を引接し給へ南無阿彌陀佛あるひは漸々に略をとりて念ずべしねがはくは佛かならず引接し給へ南無阿彌陀佛已上臨終の觀念要をとるにこれにすぐべからず又正念のとき稱名の功を積候ぬればたとひ臨終に稱名念佛せずといふとも往生つかまつるよし羣疑論に見えて候也其旨可存給候子細此御房申候訖

三月十日

源空

圓光大師行狀翼贊に出づ

四五　越中國光明房へつかはす御返事

一念往生の義は京中にも粗流布するよしうけ給はるところ也をよそ言語道斷の事也まことにほと〳〵御問にもをよぶべからざる事歟雙卷經の中には乃至一念信心歡喜といひ又善導和尙の疏には上一形を盡し下十聲一聲にいたるまでもさだめて往生する事をうと信じて乃至一念もうたがふ心なかれといへる これらの文をあしく料簡するともがらの かゝる大邪見に住して申候ところ也乃至といひ下至といへるは上一形をつくすをかねたる詞也しかるをこのごろの愚癡無智のともがらの おほく偏に十念一念なりと執して上盡一形をすつる條無慚無愧の事也まことに十念一念までもほとけの大悲本願なをかならず引接し給ふ无上の功德なりと信じて一期不退に行ずべき也文證おほしといへどもこれを出すにをよばず不足言の事也こゝにかの邪見の人この難をうけて答ていはくわがいふところも信を一念にとりて念ずべき也しかりといひて又念佛すべからずとはいはずと云云ことばは尋常なるに似たれども心は邪見をはなれず しかるゆへは決定の信

心をもて一念してのちは。又念ぜずといふともず惡五逆なをさはりをなさず。いはんや餘の小罪をやと信ずべき也といふ。このおもひに住せんものはたとひ多念ずといふともあにほとけの御意にかなはんや。いづれの經論いかなる人師の說ぞや。これひとへに懈怠無道心のいたり。不當不善のたぐひのぼしきまゝに惡をつくらんとおもひていひ出せる事なり。又念ぜずばその惡かの勝因をさへて。むしろ三途におちざらんや。かの一生造惡のものゝ。臨終に十念して往生するは。これ懺悔念佛のちからなり。この惡義には混亂すべからず。かれは懺悔の人也。これは邪見の人也。なを〳〵不可說の事也。たとひ精進のものなりといふとも。此義をきかばかならず懈怠になりなん。まれに持戒の人ありといふとも。この說を信ぜばすなはち無慚になりぬべし。をよそかくのごときの人は。附佛法の外道也。師子身中のむし也。又うたがふらくは。天魔破旬のために。その正解をうばゝれたるともがらの。もろ〳〵の往生の人をさまたげんとするか。もともあやしむべし。ふかくをそるべし。こと〴〵く筆端につくしがたし。あなかしこ〳〵。

和語燈錄。勅修御傳等に出づ。又西方指南抄に載する所。差謬少からず。

四六　正如房へつかはす御文

正如房の御事こそ返々あさましく候へ。そののちは心ならずうときやうになりまいらせて。念佛の御信もいかゞとゆかしくおもひまいらせ候つれども。さしたる事も候はず。又申べきたよりも候はぬやうにて。思ながらなにとなくむなしくまかりすぎ候つるに。たゞれいならぬ御事。大事になどばかりうけ給はり候はんだにも。いま一度見まいらせたく。をはりまでの御念佛の事も。おぼつかなくこそおもひまいらせ候べきに。まして御心にかけてつねに御たづね候らんこそ。まことにあはれにも。心ぐるしくもおもひまいらせ候へ。左右なくうけ給はり候まゝに。まいり候て見まいらせたく候へども。おもひきりて。しばし出ありき候はて。念佛申候はゞやと思ひはじめたる事の候を。樣にこそよる事にて候へ。これをば退してもまいるべきにて候に。又思ひ候へば。詮じてはこの世の見參はとてもかくても候なん。屍ねを執ずるまどひにもなり候ひぬべし。たれとてもとまりはつべき身にも候はず。われも人もたゞをくれさきだつかはりめにてこそ候へ。そのたえまを思ひ候も。又いつまでぞと

さだめなきうへにたとひ久しと申候とも。ゆめまぼろしいく程かは候べきなれば。たゞかまへて〳〵。おなじ佛の國にまいりあひてはちすの上にて。この世のいぶせさをもはるけともに過去の因緣をもかたり。たがひに未來の化導をもたすけん事こそ。返々も詮にて候べきとはじめよりも申をき候しが。返々も本願をとりつめまいらせて。一念もうたがふ御心なく。一聲も南無阿彌陀佛と申せば。わが身はたとひいかに罪ふかくとも。佛の願力によりて一定往生するぞとおぼしめして。よく〳〵一すぢに念佛し候べき也。われらが往生は。ゆめ〳〵わが身のよしあしきにはよりぬ候まじ。ひとへにほとけの御ちからばかりにて候べき也。わがちからばかりにては。いかにめてたく貴き人と申すとも。末法のこのごろ。たゞちに淨土にむまるゝ程の事は。ありがたくぞ候べき。又佛の御ちからにて候はんには。いかに罪ふかくをろかにつたなき身なりとも。それにはより候まじ。たゞ佛の願力を信じ信ぜざるにぞより候べき。されば觀無量壽經にとかれて候は。むまれてよりこのかた念佛一遍も申さず。それならぬ善根もつや〳〵なくて。あさゆふものころし。ぬすみし。かくのごときのもろ〳〵のつみをのみつくりて。とし月ををくりゆけども。一念も懺悔の心も

なくて。あかしくらしたるものゝ。をはりの時に善知識のすゝむるにあひて。たゞ一聲南無阿彌陀佛と申したるによりて。五十億劫があひだ。生死にめぐるべき罪を滅して。化佛菩薩三尊の來迎にあづかりて。佛の名をとなふるがゆへに罪滅せり。われきたりてなんぢをむかふとほめられまいらせて。ずなはちかの國に往生すと候。又五逆罪と申て。現身に父をころし。母をころし。惡心をもて佛身をそこなひ。諸宗を破り。かくのごとくをもきつみをつくりて。一念懺悔の心もなからんそのつみによりて。無間地獄におちておぼくの劫ををくりて苦をうくべからん者。をはりの時に善知識のすゝめによりて。南無阿彌陀佛と十聲となふるに。一聲におの〳〵八十億劫が間生死にめぐるべき罪を滅して。往生すととかれて候めれば。さほどの罪人だにも。たゞ十聲一聲の念佛にて往生はし候へ。まことに佛の本願のちからならでは。いかでかさる事候べきとおぼえ候。本願むなしからずといふ事は。これにても信じつべくこそ候へ。これはまさしき佛說にて候。佛の御言ばは一言もあやまらずと申候へば。たゞあふぎて信ずべきにて候。これをうたがはゞ佛の御そら事と申にもなりぬべく候。かへりては又そのつみも候ひぬべしとこそおぼえ候へ。ふかく信ぜさせ

給ふべく候。さて往生せさせおはしますまじきやうにのみ。申きかせまいらする人々の候らんこそ。返々あさましく心ぐるしく候へ。いかなる智者。めてたき人々おほせらるゝとも。それになおどろかせおはしまし候ぞ。をの〳〵のみちにはめてたく貴き人なりとも。さとりことに。行ことなる人の申候事は。往生淨土のためには。中々ゆゝしき退縁惡知識とも申ぬべき事どもにて候。只凡夫のはからひをばきゝいれさせおはしまさで。一すぢに佛の御ちかひをたのみまいらせおはしますべく候。さとりことなる人の。往生いひさまたげんによりて。一念もうたがふ心あるべからずといふことはりは。善導和尙のよく〳〵こまかにおほせられをきたる事にて候也。たとひおほくのほとけ空の中にみち〳〵て。ひかりをはなちしたをのべて。惡をつくりたる凡夫なりとも。一念してかならず往生すといふ事はひが事ぞ。信ずべからずとの給ふとも。それによりて。一念もうたがふ心あるべからず。そのゆへは。阿彌陀佛のいまだ佛になり給はざりしむかし。はじめて道心ををこし給ひし時。われ佛になりたらんに。わが名をとなふる事。十聲一聲までせんもの。わが國にむまれずば。佛にならじとちかひ給ひたりし。その願むなしからず。すでに佛になり給へり。又釋迦

佛この娑婆世界にいでゝ。一切衆生のために。かの本願をとき。念佛往生をすゝめ給へり。又六方恆沙の諸佛。この念佛して一定往生すと釋迦佛のとき給へるは決定なり。もろ〳〵の衆生一念もうたがふべからずと。あらゆる諸佛みなこと〴〵く證誠し給へり。すでに阿彌陀佛は願をたて。釋迦佛はその願をとき。六方諸佛はその說を證誠し給へるうへは。このほかになにほとけの又これらの諸佛にたがひて。凡夫往生せずとはの給ふべきぞといふことはりをもて。佛現じての給ふとも。それにおどろきて信心をやぶりうたがふ心あるべからず。いはんや菩薩たちのの給はんをや。又辟支佛をやと。こま〳〵と善導は釋し給ひて候也。ましてこのごろの凡夫のいかに申候はんによりてげにいかゞあらんずらんなど。不定におぼしめす御心ゆめゆめ候まじく候。いかにめてたき人と申すとも。善導和尙にまさりて往生の道をしりたらん事もかたく候。善導は又凡夫にあらず阿彌陀佛の化身也。阿彌陀佛のわが本願をひろめて。衆生を往生せさせむ料にかりに人とむまれて。善導とは申候也。そのをしへは。申さば佛說にてこそ候へ。あなかしこ〳〵。うたがひおぼしめすまじきにて候。又はじめより佛の本願に。信ををこさせおはしまして候し御心の程。見まいら

せ候に。なにしにかは往生はうたがひおぼしめし候べき。經にとかれて候ごときは、いまだ往生の道もしらぬ人にとりての事にて候。もとよりよく〳〵きこしめししたゝめてそのうへ御念佛の功つもりたる事にて候はんには。かならず又臨終の善知識にあはせおはしまさずとも。往生は一定せさせおはしますべき事にてこそ候へ。中〳〵あらぬさまなる人はあしく候なん。たゞいかならん人にても。尼女房なりとも。つねに御まへに候はん人に。念佛申させて。きかせおはしまして。御心一つをつよくおぼしめして。ただ中々一向に凡夫の善知識をおぼしめしすてゝ。佛を善知識にたのみまいらせ給ふべく候。もとよりほとけの來迎は。臨終正念のためにて候也。それを人のみな臨終正念にて念佛申たるに。佛はむかへ給ふとのみ心えて候は。佛の願を信ぜず。經の文を信ぜぬにて候也。稱讃淨土經には。慈悲をもてくはへたすけて。心をしてみだらざらしめ給ととかれて候也。たゞの時によく〳〵申をきたる念佛によりて。佛は來迎し給ふ時に正念に住すと申べきにて候也。たれも佛をたのむ心はすくなくして。よしなき凡夫の善知識をたのみ。さきの念佛をばむなしくおもひなして。臨終正念をのみいのることどもにて候。ゆゝしきひがゐんの事に

て候也。これをよく〳〵御意え候て。つねに御目をふさぎ掌をあはせて。御心をしづめておぼしめすべく候。ねがはくは阿彌陀佛本願あやまたず。臨終の時かならずわがまへに現じて。慈悲をもてくはへたすけて。正念に住せしめ給へと。御心にもおぼしめし。口にも申させ給ふべく候。これにすぎたる事候まじ。心よはくおぼしめす事の候まじき也。か樣に念佛をかきこもりて申候はんなどおもひ候もひとへにわが身一つのためとのみはもとよりおもひ候はず。おりしもこの御事をかくうけ給はり候ぬれば。いまよりは一念ものこさず。こと〳〵くその往生の御たすけになさんとこそ廻向しまいらせ候はんずれば。かまへて〳〵おぼしめすさまに遂させまいらせ候はゞやとこそふかく念じまいらせ候へ。もしこの心ざしまことならば。いかでか又御たすけにもならで候べき。たのみおぼしめさるべきにて候。おほかたは申いて候ひし一ことばに。御心をとゞめさせおはします事も。この世一つの事にて候はじと。さきの世もゆかしく。あはれにこそおもひしらるゝ事にて候へば。うけ給はるごとくば。このたびま事にさきだゝせおはしますにても。又おもはずにさきだちまいらせ候事になるさだめなきにて候とも。つゐに一佛淨土にまいりあひまいらせ

候はんはうたがひなくおぼえ候。ゆめまぼろしのこの世にていま一度などゝおもひ申候事は。とてもかくても候ひなん。これをば一すぢにおぼしめしすてゝいとゞもふかくねがふ御心をもまし。念佛をもはげましおはしましまして。かしこにてまたんとおぼしめすべく候。返々もなを〳〵往生をうたがふ御心候まじく候。五逆十惡のをもき罪つくりたる惡人。なを十聲一聲の念佛によりて往生をし候はんに。まして罪つくらせおはします御事はなに事か候べき。たとひつくらせ候べきにても。いく程の事かは候べき。この經にとかれて候罪人にはいひくらぶべくやは候。それにまづ心ををこし出家をとげさせおはしましまして。めでたき御のりにも緣をむすび。時にしたがひ日にしたがひて。善根のみこそはつもらせおはしますにて候らめ。そのうへふかく決定往生の法文を信じて。一向專修の念佛にいりて。一すぢに彌陀の本願をたのみて。ひさしくならせおはしまして候。なに事にか一事も往生をうたがひおぼしめし候べき。專修の人は百人は百人ながら十人は十人ながら往生すと。善導の給ひて候へば。ひとりそのかずにもれさせおはしますべきかはとこそおぼえ候へ。善導をもかこち。佛の本願をもせめまいらせ給ふべく候。心よはくはゆめ〳〵おぼ

しめすまじく候。あなかしこ〳〵。ことはりをや申ひらき候とおもひ候ほどに。よにおほくなり候ひぬる。さやうのおりふし骨なくやとおぼえ候へども。もしさすがのびたる御事にても又候らん。えしり候はねば。このたび申候はてはいつをかまち候べき。もしのどかにきかせおはしまして。一念も御心をすゝむるたよりにやなり候とおもひ候ばかりに。とゞめえ候はて。これほどこまかになり候ぬ。機嫌をしり候はねば。はからひがたくてわびしくこそ候へ。もし無下によはくならせおはしましたる御事にて候はゞ。これは事ながく候べく候。要をとりてつたへまいらせおはしまするべく候。うけたまはり候まゝに。なにとなくあはれにおぼえ候て。おし返し又申候也。

和語燈錄に出づ。西方指南抄亦ほゞ同じ。

四七　熊谷入道へつかはす御返事

其一

第六輯　消息　熊谷入道へつかはす御返事

御文くはしくうけ給はり候ぬ。か樣にまめやかに大事におぼしめし候らん。返々ありがたく候。まことにこのたびかまへて。往生しなむとおぼしめしきるべく候。うけがたき人身すでにうけたり。あひがたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂をねがふ心をこりたり。彌陀の本願ふかし。往生はたなごゝろにある也。ゆめ〳〵御念佛をこたらず。決定往生のよしを存ぜさせ給ふべく候。何事もとゞめ候ぬ。

九月十六日　　源空

其二

御文よろこびてうけ給はり候ぬ。まことにそのゝちはおぼつかなく候つるに。うれしくおぼせられて候。但念佛の文かきてまいらせ候。御らん候べし。念佛の行は。かの佛の本願の行にて候。持戒誦經誦呪理觀等の行は。かの佛の本願にあらぬをこなひにて候へば。極樂をねがはん人は。まづかならず本願の念佛の行をつとめてうへに。もし異をこなひをも念佛にしくはへ候はんとおもひ候はゞ。さもつかまつり候。又たゞ本願の念佛ばかりにても候べし。念佛をつかまつり候はて。たゞことをこなひば

かりをして。極樂をねがひ候人は。極樂へもえむまれ候はぬ事にて候よし。善導和尚のおぼせられて候へば。但念佛が。決定往生の業にては候也。善導和尚は。彌陀の化身にておはしまし候へば。それこそは一定にて候へと申にて候。又女犯と候は不婬戒の事にこそ候なれ。又御きんだちなどのかんだうと候は。不瞋戒のことにこそ候なれ。されば持戒の行は。佛の本願にあらぬ行なれば。だへたらんにしたがひて。だもたせ給べく候。孝養の行も佛の本願にあらず。だへんにしたがひて。つとめさせおはしますべく候。又あかゞねの阿字の事も。をなじことに候。又さくぢやうの事も。佛の本願にあらぬつとめにて候。とてもかくても候なん。又迎接の曼陀羅はたいせちにおはしまし候。それもつぎの事に候。たゞ念佛を三万。もしは五万。もしは六万。一心に申させおはしまし候はんぞ決定往生のをこなひにては候。こと善根は。念佛のいとまあらばの事に候。六万遍をだに申させ給はゞ。そのほかには。なに事をかはせさせおはしますべき。まめやかに。一心に三万。五万。念佛をつとめさせ給はゞ。少々戒行やぶれさせおはしまし候とも。往生はそれにはより候まじきことに候。たゞしこの中に孝養の行は。佛の本願の行にては候はねども。八十九にておはしまし候なり。あひかま

へてことしなどをばまちまいらせさせおはしませかしとおぼえ候あなかしこ〳〵。

五月二日　　源空　御自筆也

其三

をよそこの條こそとかく申にをよび候はずめてたく候へ往生をせさせ給ひたらんにはすぐれておぼえ候死期しりて往生する人々は入道どのにかぎらずおほく候かやうに耳目をおどろかす事は末代にはよも候はじむかしも道綽禪師ばかりこそおはしまし候へ返々申ばかりなく候たゞしなに事につけても佛道には魔事と申す事のゆゝしき大事にて候なり よく〳〵御用心候べきなり かやうに不思議をしめすにつけても たよりをうかがふ事も候ひぬべきなり めでたく候にしたがひて いたはしくおぼえ候てかやうに申候なり よく〳〵御つゝしみ候てほとけにもいのりまいらせさせ給ふべく候 いつか御のぼり候べき かまへて〳〵 のぼらせおはしませかし 京の人々おほやうはみな信じて念佛をもいますこしいさみあひて候是につけても いよ〳〵すゝませ給ふべく候 あしさまにおぼしめすべからず候なを〳〵めでたく候あなかしこ〳〵。

四七四

四月三日　　源空

熊谷入道殿に

以上三文和語燈錄に出づ了惠曰く最後の一文は熊谷入道念佛して さま〴〵の現瑞を感じたりけるを上人へ申あげたりける時の御返事なりと

四八　大胡太郎實秀へつかはす

御返事

さきの便にはさしあふ事候て御返事こまかに申さず候ひき さだめて不審におぼし召候らんと思給候 さてはたづねおぼせられ候し事ども 御文などにては たやすく申ひらきがたき事にて候 あはれ京に久しく御逗留候し時こまかに御沙汰候はましかば よく候ひなまし 大方は念佛して往生すと申事ばかり わづかに見および候 我心一つにふかく信じたるばかりにてこそ候へ 人まてつまびらかに申きかせ

などする程の身にて候はねば。まして立いりたる事共の不審など。御文にて申ひらくべしともおぼへ候はねども。わづかにみをよび候程の事を。はゞかりまいらせて。ともかくも御返事申候はざらん事の。をそれにて候へば。心のをよぶ程は。かたのごとく申候はんと存候也。まづ三心具足して往生すと申候事は。實にその名目ばかりをうちきく時には。いかなる心を申やらんと。事々しくおぼえ候ひぬべけれ共。善導の御意にては。心えやすき事にて候也。かならずならひ沙汰せざらん無智の人。さとりなからん女人などの。え具せぬほどの心ばえにては候はぬ也。たゞまめやかに往生せんと思ひて。念佛申さん人は。自然に具足しぬべき心にて候物を。其ゆへは。三心と申すは。觀無量壽經にとかれて候やうは。もし衆生ありて。かの國にむまれんとねがはんものは。三種の心ををこして。ずなはち往生すべし。何等をか三とする。一には至誠心。二には深心。三には迴向發願心也。この三心を具するものは。かならずかのくにゝむまるととかれたり。しかるに善導和尚の御意によらば。はじめに至誠心といふは。眞實の心也。眞實といふは。いはく。內はむなしくして外をかざる心のなきを申也。ずなはち觀經疏に釋していはく。外には賢善精進の相を現じ。內には虛假をい

だく事をえざれといへり。この釋の心は。內はをろかにして。外にはかしこき人とおもはれんとふるまひ。內には惡をつくり。外には善人のよしをしめし。內には懈怠の心を懷きて。外には精進の相を現ずるを。眞實ならぬ心とは申也。外も內もありのまゝにて。かざる心のなきを。至誠心となづくるにてこそ候めれ。

二に深心といふは。ずなはちこれ深く信ずる心也。何事をふかく信ずるぞといふに。まづもろ〳〵の煩惱を具足し。おほくのつみをつくりて。餘の善根などなからん凡夫。阿彌陀佛の大悲本願をあふぎて。その佛の大悲の名號をとなへて。もしは百年にても。もしは四五十年にても。もしは十二十年にても。乃至一二年にてもあれ。ずべて往生せんとおもひはじめたらん時よりして。最後臨終の時にいたるまで懈怠せず。もしは七日一日。十聲一聲にても。おほくもすくなくも。稱名念佛の人は決定して往生すべしと信じて。乃至一念もうたがふ心なきを深心とは申也。しかるにもろ〳〵の往生をねがふ人。本願の名號をたもちながらなを內に妄念のをこるををそれ。外に餘善のすくなきによりても。ひとへにわが身をかろしめて。往生を不定におもはゞ。すでに本願をうたがふなり。されば善導は。はるかに未來の行者の。此うたがひをの

こさん事をかゞみて。其疑心をのぞきて。決定の心をすゝめむがために。煩惱を具足して。罪業をつくり。善根すくなく智解なからん凡夫。十聲一聲までの念佛によりて。決定して往生すべきことはりをくはしく釋しをしへ給へる也。たとひおほくの佛。空の中に充滿して。光をはなち。舌をのべて。造罪の凡夫。念佛して往生すといふ事はひが事なり。信ずべからずとの給ふとも。それによりて。一念もおどろきうたがふ心あるべからず。そのゆへは。阿彌陀ほとけ。いまだ佛になり給はざりしむかし。もし我佛になりたらん時。十方の衆生。わが名號を十たびとなへ。一こゑもとなへむとなふることかみ百年より。しも十聲一聲までも。もしわが國にむまれずといはゞ。われ佛にならじとちかひ給ひたりしに。その願むなしからずして。佛になりて。すでに久しくなり給へり。知るべしかの名號をとなへむ人は。かならず往生すべしといふ事を。又釋迦佛。此娑婆世界にいて給ひて。一切衆生のために。かの彌陀の本願をときて。念佛往生をすゝめ給へり。又六方恆沙の諸佛。をの〳〵廣長の舌をいだして。釋迦の念佛して往生すとき給ふは決定也。もろ〳〵の衆生。ふかく信じてすこしもうたがふ心あるべからずと。爾許の佛たちの。一佛ものこらず。一味同心に證誠し給へり。す

てに阿彌陀ほとけは。その願をたて給ふ。釋迦ほとけは。その願のむなしからざる事をときすゝめ給ふ。六方恆沙の諸佛は。その說の眞實なる事を證誠し給へり。このほかに又いづれの佛の。これらの諸佛にたがひて。凡夫念佛して往生せずとはの給ふべきぞといふことはりをもて。おほくのほとけ現じての給ふとも。それにおどろきて。さては念佛往生かなふまじきかと。信心をやぶり。疑心ををこすべからず。いはんや菩薩たちのの給はんをや。いはんや羅漢辟支等をやと釋し給ひて候也。いかにいはんや近來の凡夫のいひさまたげんをや。いかにめでたき人と申すとも。善導和尙にまさりたてまつりて。往生の道をしりたらんこともありがたく候。又善導はたゞの凡夫にはあらず。卽阿彌陀佛の化身也。かの佛我本願をひろめて。あまねく一切衆生にしらしめて。決定して往生せさせん料に。かりに凡夫の人とむまれて。善導和尙といはれ給ふ也。いはゞその敎は。佛說にてこそ候へ。いかにいはんや垂迹のかたにても。現身に念佛三昧をえて。まのあたり淨土の莊嚴を見。佛にむかひたてまつりて。たゞちに佛のをしへをうけたまはりて。の給へる詞ども也。本地をおもふにも。垂迹をたづぬるにも。かた〳〵あふひて信ずべし。されば。たれも〳〵煩惱のこきうすき

をかへりみず。罪障のかろきおもきをも沙汰せず。たゞ口に南無阿彌陀佛ととなへむこゑにつきて。決定往生のおもひをなすべし。その決定の心をやがて深心とはなづくる也。その深心を具しぬれば。決定して往生する也。詮ずるところは。とにもかくにも念佛して往生すといふ事を。ふかく信じてうたがはぬを。深心とはなづけて候なり。

三に廻向發願心といふは。是亦別の心には候はず。わが所修の行業を。一向に極樂に廻向して。往生をねがふ心也。かくのごときの三心を具して。かならず往生すべし。此心一つもかけぬれば。往生せずと善導は釋し給へる也。たとひ眞實の心ありてうへをかざらずとも。佛の本願をうたがはゞ。すでに深心かけたる念佛也。たとひ疑心なくとも。外をかざりて內に實の心なくば。至誠心かけたる人なるべし。たとひこの二心を具してかざる心も疑心もなくとも。極樂にむまれむとおもふ心なくば。廻向發願心かけぬべし。三心を意えわかつ時には。かくのごとく別々なる樣なれども。詮ずるところは。眞實の心ををこして。ふかく本願を信じて。往生をねがふ心を。三心具足の心とは申也。誠に是ほどの心だにも具足せずしては。いかゞ往生ほどの大事をば

とげ給ふべきや。此心は。申せば又やすき事にて候也。これをかやうに意えしらねばとて。又え具足せぬ心にては候はぬ也。その名をだにもしらぬものも。この心をばそなへつべく候。又よく〳〵しりたらん人の中にも。そのまゝに具せぬも候ひぬべき心ばへにて候也。されば。こそいふに甲斐なき人數ならぬものどもの中よりも。たゞひらに念佛申すばかりにて。往生したりといふ事は。むかしより申つたへたる事にて候へ。それらはみなしらねども三心を具したる人にてありけりと意えらるゝ事にて候也。又年ごろ念佛申たる人の臨終のわろき事の候は。さきに申つるやうに。へばかりをかざりて。たうとき念佛者と人にいはれんとのみ思ひて。下にはふかく本願をも信ぜず。まめやかに往生をもねがはぬ人にてこそは候らめと意えられ候也。されば此三心を具せざるゆへに。臨終もわろく。往生もせぬ事にて候也としろしめすべき也。かく申候へば。さては往生は大事の事にこそとおぼしめす事ゆめ〳〵候まじき也。一定往生すべしと思ひとらぬ心を。やがて深心かけて往生せぬ心とは申候へば。いよ〳〵一定の往生とこそおぼしめすべき事にて候へ。まめやかに往生の心ざしありて。彌陀の本願をうたがはずして念佛を申さん人は。臨終のわろき事

は大方は候まじき也。そのゆへは。佛の來迎し給ふ事は。もとより行者の臨終正念のためにて候也。それを意えぬ人は。みなわが臨終正念にて念佛申たらむ時に佛はむかへ給ふべき也とのみ意えて候は。佛の願をも信ぜず。經の文をも意えぬ人にて候也。そのゆへは。稱讃淨土經にいはく。佛慈悲をもて加へ祐けて。心をしてみだらしめ給はずととかれて候へば。たゞの時によく〳〵申をきたる念佛によりて。臨終にかならず佛は來迎し給ふべし。佛の來迎し給ふを見たてまつりて。行者正に念住すと申す義にて候也。しかるにさきの念佛をむなしく思ひなして。よしなく臨終正念をのみいのる人などの候は。ゆゝしき僻亂にいりたる事にて候也。さればほとけの本願を信ぜん人は。かねて臨終をうたがふ心あるべからずとこそおぼえ候へ。たゞ當時申さん念佛をば。いよ〳〵至心に申べきにて候。いつかは佛の本願にも。臨終の時念佛申たらむ人をのみ迎へんとはたて給ひて候。臨終の念佛にて往生すと申事は。日比往生をもねがはず。念佛をも申さずして。ひとへにつみをのみつくりたる惡人のすでに死なんとする時に。はじめて善知識のすゝめにあひて。念佛して往生すとこそ。觀經にもとかれて候へ。もとよりの行者は。臨終の沙汰をば。あながちにすべき

樣は候はぬ也。佛の來迎一定ならば。臨終の正念も亦一定とおぼしめすべき也。此大意をもて。よく〳〵御心をとどめて。意えさせ給ふべく候。又罪をつくりたる人だにも。念佛して往生す。まして法花經などうちよみて。念佛申さんは。何かはくるしかるべきと人々の申候らん事は。京邊にもさやうに申候人々おほく候へば。まことにさぞ候らん。それは餘宗の意にてこそ候らめ。よしあしをさだめ申べきに候はず。僻事と申さば。をそれあるかたおほく候。たゞし淨土宗の意。善導の御釋には。往生の行に大にわかちて二つとす。一には正行。二には雜行也。はじめに正行といふは。是にあまたの行あり。はじめに讀誦正行といふは。これは無量壽經。觀經。阿彌陀經等の三部經を讀誦する也。次に觀察正行といふは。これはかの國の依正二報のありさまを觀ずる也。次に禮拜正行といふは。これは阿彌陀ほとけを禮拜する也。次に稱名正行といふは。南無阿彌陀佛ととなふる也。次に讚嘆供養正行といふは。これは阿彌陀佛を讚嘆したてまつる也。これをさして五種の正行となづく。讚嘆と供養とを二つの行とする時は。六種の正行とも申也。此正行に付てふさねて二つとす。一には一心にもはら彌陀の名號をとなへたてまつりて。立居起臥。晝夜に忘るゝことなく。念々にすて

ざる者を。これを正定の業となづく。かの佛の本願に順ずるがゆへにと申て。念佛をもてまさしくさだめたる往生の業と立て候。もし禮誦等によるをば。なづけて助業とすと申て。念佛のほかの禮拜讀誦讃嘆供養などをば。かの念佛をたすくる業と申て候也。さてこの正定業と。助業とをのぞきて。そのほかのもろ〳〵の業をば。みな雜行となづく。布施持戒忍辱精進等の六度万行も。法花經をもよみ。眞言をもをこなひ。かくのごとくのもろ〳〵の行をば。みなことゝ〳〵く雜行となづく。さきの正行を修するをば。專修の行者といひ。のちの雜行を修するをば。雜修の行者と申候也。この二行の得失を判ずるに。さきの正行を修するには。心つねにかの國に親近して。憶念ひまなく。のちの雜行を行ずるには。心つねに間斷す。廻向してむまるゝ事をうべしといへども。ずべて疎雜の行となづくといひて。極樂にうとき行といへり。又專修のものは。十人は十人ながらむまれ。百人は百人ながらむまる。何をもてのゆへに。外の雜緣なくして。正念をうるがゆへに。彌陀の本願とあひ應ふがゆへに。釋迦のをしへにたがはざるがゆへに。雜行のものは。百人が中に一二人むまれ。千人が中に四五人むまる。何をもてのゆへに雜緣亂動して正念をうしなふがゆへに。彌陀の本願と相應

せざるがゆへに。釋迦のをしへと相違するがゆへに。諸佛の語にしたがはざるがゆへに。係念相續せざるがゆへに。憶念間斷するがゆへに。みづからも往生の業をさへ。他の往生をもさふるがゆへに。など釋せられて候めれば。善導和尙をふかく信じて。淨土宗にいらん人は。一向に正行を修すべしと申す事にてこそ候へ。そのうへは善導のをしへをそむきて餘行をくはへんと思はん人は。をの〳〵ならひたる樣どもこそ候らめ。それをよしあしとはいかゞ申候べき。善導のすゝめ給へる行どもををきてずゝめ給はぬ行をすこしにてもくはふべき樣なしと申ことにてこそ候へ。すゝめ給へる正行ばかりだにもなを物うき身にて。いまだすゝめ給はぬ雜行を加へんことは。まことしからぬかたも候ぞかし。又つみをつくる人だにも念佛して往生す。まして善なれば法花經などをよまんは何かくるしからんなど申候らんこそ。無下にきたなくおぼえ候へ。往生をたすけばこそいみじくも候はめ。さまたげにならぬばかりを。いみじきことととて。くはへをこなはんことは。なにかは詮にて候べき。されば惡をば佛の心につくれとやすゝめさせ給ふ。かまへてとゞめよとこそいましめ給へども。凡夫のならひ當時のまよひにひかれて。惡をつくるは力をよばぬ事に

てこそ候へ。まことに悪をつくる人の樣に。しかるべくて經もよみたく。餘行もくはへたからんことは。ちからをよばず。但法花經などをよまんことを。一言葉なりとも悪をつくらんことにいひならべて。それもくるしからねば。まして是はなど申すらんことこそ不便の事にて候へ。ふかき御のりもあしく意うる人にあひぬれば。かへりて物ならずきこへ候ことこそ。あさましくおぼへ候へ。これをかやうに申候へば。餘行の人々ははらをたつことにて候へば。御心一つに意得て。ひろくちらさせ給まじく候。あらぬさとりの人のともかくも申候はん事をば。耳にきゝいれさせ給はで。たゞ一筋に善導の御すゝめにしたがひて。いますこしも。一定往生する念佛の數遍を申そへんとおぼしめすべき事にて候也。餘行はたとひ往生のさはりとこそならずとも。不定の往生とはきこえて候めれば。一定往生の正行を修すべきにて候なり。正行のいとまを餘行にいれて。不定の往生の業をくはへん事は。且は損にては候はずや。よく〳〵意えさせ給ふべきことにて候也。たゞしかく申候へば。雜行をくはへん人は。ながく往生すまじなど申事にては候はず。いかさまにも餘行の人なりとも。すべて人をくだし人をそしる事は。ゆゝしきことが。おもき事にて候也。よく〳〵御つ

ゝしみ候て。雜行の人なればとて。あなづる御心候まじく候也。よかれあしかれ。人のうへのよしあしをば。おもひいれぬがよき事にて候也。又心ざし本より此門にありて進みぬべからんをば。こしらへすゝめさせ給ふべく候。さとりたがひてあらぬさまならん人などに。論じあはせ給ふ事はあるまじき事にて候。よく〳〵ならひしり給ひたる聖たちだにも。さやうの事をばつゝしみておはしましあひて候ぞ。まして殿原などの御身にては。一定僻事にて候はんずるに候。唯御身一つにまづよく〳〵往生をねがひて。念佛をはげませ給ひて。位たかき往生をとげて。いそぎ娑婆に還りて人をばみちびかせ給へ。かやうにくはしくかきつけて申候事も。返々はばかりおもふ事にて候也。あなかしこ。御披露候まじく候。あなかしこ〳〵。

三月十四日　　源空

和語燈錄。九卷傳等に出づ。又西方指南抄に載する所。之と異同少からず。

四九　大胡の太郎實秀が妻室のもとへつかはす御返事

御文こまかにうけ給はり候ぬ。まづはるかなる程に。念佛の事きこしめさんがために。わざと御つかひ上せさせ給ひて候。念佛の御心ざしの程返々あはれに候。さてたづねおぼせられて候念佛の事は。往生極樂のためには。いづれの行なりといへども念佛にすぎたる事は候はぬ也。其ゆへは。念佛はこれ彌陀の本願の行なるがゆへ也本願といふは。阿彌陀ほとけいまだほとけになり給はざりしむかし。法藏菩薩と申しゝいにしへ。ほとけの國土をきよめ衆生を成就せむがために。世自在王如來と申しゝほとけの御まへにして。四十八の大願ををこし給ひしその中に。一切衆生の往生のために一つの願ををこし給へる。これを念佛往生の本願と申也。すなはち無量壽經の上卷にいはく。設我得佛。十方衆生。至心信樂欲生我國。乃至十念。若不生者不取正覺。已上善導和尚此願を釋しての給はく。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。已上念佛といふは。佛の法身を憶念するにもあらず。佛の相好を觀念するにもあらず。たゞ一心にもはら阿彌陀ほとけの名號を稱念する。これを念佛とは申也。かるがゆへに稱我名號とはいふ也。念佛の外の一切の行は。これ彌陀の本願にあらざるがゆへに。たとひ

めてたき行なりといへども。念佛にはをよばざる也。おほかたそのくにゝむまれんとおもはんものは。そのほとけのちかひにしたがふべき也。されば彌陀の淨土にむまれんとおもはんものは彌陀の誓願にしたがふべき也。本願の念佛と。本願にあらざる餘行とさらにたくらぶべからず。かるがゆへに往生極樂のためには。念佛の行にすぎたる事は候はぬ也と申す也。往生にあらざる道には。餘行又をの〳〵つかさどるかたあり。しかるに衆生の生死をはなるゝみち。ほとけのをしへさま〳〵におほく候へども。このごろの人の三界を出て生死をはなるゝみちは。たゞ極樂に往生し候ばかり也。このむね聖教のおほきなることはり也。次に極樂に往生するにその行さま〳〵におほく候へども。われらが往生せん事念佛にあらずば。かなひがたく候也。そのゆへは念佛はこれ佛の本願なるがゆへに。願力にすがりて往生する事はやすし。されば詮ずるところは。極樂にあらずば生死をはなるべからず。念佛にあらずば極樂へむまるべからざる者也。ふかくこのむねを信ぜさせ給ひて。一すぢに極樂をねがひ。一すぢに念佛して。このたびかならず生死をはなれんとおぼしめすべき也。又一一の願のをはりに。若不爾者不取正覺とちかひ給へり。しかるに阿彌陀佛

ほとけになり給ひてよりこのかたずてに十劫をへ給へり。まさにしるべし誓願むなしからず。みなことゝく成就し給へることを。其中に念佛往生の願ひとりむなしかるべからず。しかれば衆生稱念するもの一人もむなしからず。みなかならず往生する事をうもししからずばたれかほとけになり給へる事を信ずべきや。三寶滅盡の時なりといへども。一念すればなを往生す。五逆重罪の人なりといへども。十念すれば又往生す。いかにいはんや三寶の世に生れて。五逆をつくらざるわれら。彌陀の名號をとなへんに。往生うたがふべからず。いまこの願にあへる事は。まことにこれおぼろげの緣にあらず。よく〳〵よろこびおぼしめすべし。たとひ又あふといふとも。もし信ぜずばあはざるがごとし。いまふかくこの願を信ぜさせ給へり。往生疑おぼしめすべからず。必〳〵ふた心なくよく〳〵御念佛候ひて。このたび生死をはなれ。極樂にむまれさせ給ふべし。又觀無量壽經にいはく。一一光明遍照十方世界。念佛衆生攝取不捨。已上これは彌陀の光明たゞ念佛の衆生をてらして。餘の一切の行人をば照さずといふ也。但餘の行を行じても極樂をねがはゞ。ほとけのひかりてらして攝取し給ふべし。なんぞたゞ念佛のものばかりをえらびててらし給ふやとなら

ば。善導和尚釋しての給はく。彌陀身色如金山。相好光明照十方。唯有念佛蒙光攝。當知本願最爲强。已上念佛はこれ彌陀本願の行なるがゆへに。成佛の光明かへりて本地の誓願をてらし給ふ也。餘行はこれ本願にあらざるがゆへに。彌陀の光明きらひてらし給はざる也。いま極樂をもとめん人は。本願の念佛を行じて。攝取のひかりにてらされんとおぼしめすべし。これにつけても念佛の大切に候。よく〳〵申させ給ふべし。又釋迦如來この經の中に。定散のもろ〳〵の行をときをはりて後に。まさしく阿難に付囑し給時に。上にとくところの定善の十三觀。散善の万行をば付囑せずして。只念佛の一行を付囑し給へり。經に云。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。卽是持無量壽佛名。已上善導和尚此文を釋しての給はく。從佛告阿難汝好持是語已下。正明付囑彌陀名號。流通於遐代。上來雖說定散兩門之益。望佛本願。意在衆生一向專稱彌陀佛名。已上これは定散のもろ〳〵の行は。彌陀の本願にあらず。故に釋迦如來往生の行を付囑し給ふに。餘の定善散善をば付囑せずして。念佛はこれ彌陀の本願なるがゆへに。まさしくえらびて本願の行を付囑し給へるなり。いま釋迦のをしへにしたがひて往生をもとめんもの付囑の念佛を修して釋尊の御意にかなふべし。これにつけても

又よく〳〵御念佛候てぼとけの付囑にかなはせ給ふべし。又六方恆沙の諸佛。舌をのべて三千大千世界におほひて。もはらたゞ彌陀の名號をとなへて。往生すといふは。これ眞實なりと證誠し給ふ也。これ又念佛は彌陀の本願なるが故に。六方恆沙の諸佛是を證誠し給ふ也。餘の行は本願にあらざるがゆへに。諸佛も證誠し給はざる也。これにつけても又よく〳〵御念佛せさせ給ひて。六方の諸佛の護念をかうぶらせ給べし。彌陀の本願。釋尊の付囑。六方諸佛の護念。一一にむなしからず。このゆへに念佛の行は諸行にはすぐれたる也。又善導和尚はこれ彌陀の化身也。淨土の祖師おほしといへども。たゞひとへに善導によるに。往生の行おほしといへども。おほきにわかちて二とし給へり。一には專修。いはゆる念佛也。二には雜修。いはゆる一切のもろ〳〵の行也。上にいふとこのゝ定散等これ也。往生禮讚に云。若能如上念念相續畢命爲期者。十卽十生。百卽百生。何以故。無外雜緣得正念故。與佛本願得相應故。不違教故。隨順佛語故。若欲捨專修雜業者。百時希得一二。千時希得五三。何以故。由雜緣亂動失正念故。與佛本願不相應故。與教相違故。不順佛語故。係念不相續故。憶想間斷故。已上これは專修と雜行との得失なり。得といふは。往生する事をうるをいふ。いはゆる念佛する

ものは十人はすなはち十人ながら往生し。百人はすなはち百人ながら往生すといふこれ也。失といふは。いはゆる往生の益をうしなへる也。雜修のものは。百人が中にまれに一二人往生する事をえて。その餘はむまれず。千人が中にまれに五三人むまれて。その餘は又むまれず。專修のものゝみ。みなむまるゝ事をうるは何のゆへぞ。阿彌陀佛の本願に相應するがゆへ也。釋迦如來のをしへに隨順せるがゆへ也。雜業のものゝむまるゝ事のすくなきはなにのゆへぞ。彌陀の本願にたがへるがゆへ也。釋迦のをしへにしたがはざるがゆへ也。念佛して淨土をもとむるものは。二尊の御こゝろにふかくかなへり。雜を修して淨土をもとむるものは。二佛の御意にそむけり。善導和尚二行の得失を判ぜる事はこれのみにあらず。觀經の疏と申す文の中に。おほくの得失をあげたり。しげきがゆへにいださず。これをもて。しりぬべし。をよそ此念佛は。そしるものは地獄におちて多劫苦をうくる事きはまりなし。信ずるものは淨土に生れて永劫樂をうくる事きはまりなし。なを〳〵いよ〳〵信心をふかくして。ふた心なく念佛せさせ給ふべし。くはしき事は御文にはつくしがたく候。この御つかひ申候べし。

正月廿八日　　源空

和語燈錄。勅修御傳等に出づ。然るに　語燈錄及び西方指南抄には此の書を。天胡實秀が妻室のもとへつかはす御返事となし。御傳には實秀に遣はされける狀となして。妻室も亦ふかく此消息のをしへを信受せしことを記せり。義山は是非決しがたし。後人の考を待のみといふ。今は和語燈錄に從ふ。又了惠曰。此御文は正治元　己未。御使は蓮上房房尊覺也と

五〇　津戸三郎へつかはす御返事

其一

御文くはしくうけ給り候ぬ。御所より念佛の事召問はれ候はんにはなじかはくはしき事をば申させ給ふべきげにもいまだくはしくならはせ給はぬ事にて候へば。專修雜修の間の事はくはしき沙汰候はずとも。いかやうなる事ぞと召問はれて。法門のくはしき事はしり候はず。御京上の時うけ給はりわたりて。聖のもとへまかり候て。後世の事をばいかゞし候べき。在家のものなどの後生たすかるべき事は。何事か候らんと問候しかば。聖の申候し樣は。おほかた生死をはなるゝみち。樣々におほく候へども。その中にこのごろの人の生死をいづる道は。極樂に往生するよりほかには。こと道はかなひがたき事也。是ほとけの衆生をすゝめて。生死をいださせ給ふ一つの道也。しかるに極樂に往生する行又樣々におほく候へども。その中に念佛して往生するより外には。こと行はかなひがたき事にてあるなり。そのゆへは。念佛はこれ彌陀の一切衆生のために。みづからちかひたまひたりし本願の行なれば。往生の業にとりては。念佛にしく事はなし。されば往生せんとおもはゞ。念佛をこそはせめと申候き。いはんや又最下のものゝ法門をもしらず。智惠もなからんものは。念佛の外には何事をしてか往生すべきといふ事なし。われおさなくより法門を習ひたるものにてあるだにも。念佛より外には何事をかして往生すべしともおぼへず。たゞ念佛ばかりをして。彌陀の本願をたのみて。往生せんとのみおもひてある也。まして在家の人などは。何事かあらんと申されしかば。ふかくそのむねをたのみて。念佛をばつかまつり候也と。申させ給ふべし。又この念佛を申事は。たゞわが心より。彌陀の本願の行なりとさとりて申事にもあらず。唐の代に善導和尚と申候し人の往生の行業にをいて。專修雜修と申す二つの行をわかちて。すゝめ給へる事也。專修とい

ふは。念佛也。雜修といふは。念佛の外の行也。專修のものは。百人は百人ながら往生し。雜修の者は千人が中にわづかに一二人ありといへる也。唐土に又信中と申者こそ。このむねをしるして。專修淨業文といふ文をつくりて。唐土の諸人をすゝめたり。その文は。じやうせう房などのもとには候らん。それをもちてまいらせ給ふべし。又專修につきて五種の專修正行といふ事あり。この五種の正行につきて。又正助二行をわかてり。正業といふは。五種の中に第四の念佛也。助業といふは。その外の四種の行也。いま決定して淨土に往生せんとおもはゞ。專雜二修の中には。專修の敎によりて。一向に念佛をすべし。正助二業の中には。正業のすゝめによりて。ふた心なくたゞ第四の稱名念佛をすべしと申候しかば。くはしき旨ふかき意をばしり候はず。さては念佛は。めてたき事にこそあなれと信じて申ばかりにて候。伴の人の申候しは。善導和尙と申人は。氏ある人にも候はず。阿彌陀ほとけの化身にておはしまし候なれば。をしへすゝめさせ給はんこと。よもひが事にては候はじと申されしを。ふかく信じて念佛はつかまつり候也。そのつくらせ給ひたる文どもおほく候なれども。文字もしり候はぬものにて候へば。たゞ意ばかりをきゝて。後生やたすかり候。往生やし候

とて。となへ申ほどにちかきものども見うらやみ候て。少々申すものども候也。これほどに申させ給ふべし。中〳〵くはしく申させ給はゞ。あやまちもありなどして。あしき事もこそ候へとおぼえ候。樣々に難答をしるしてと候へども。時にのぞみてはいかなること葉どもか候はんずらん。書てまいらせ候はんもあしく候ぬべく候。たゞよく〳〵御はからひ候て。早晚よきやうにこそははからはせ給ひ候はめ。又念佛申すべからずとおほせられ候とも。往生に心ざしあらん人はそれにはより候まじ。念佛よく〳〵申せとおほせられ候とも道心なからん者はそれにはより候まじ。とにかくにつけても。このたび往生しなんと。人をばしらず御身にかぎりてはおぼしめすべし。わざとはるゝ〳〵と人のぼさせ給ひて候こそ。返々下人も不便に候へ。なを〳〵召し問はれ候はん時には。これより百千申て候はん事は。時にもかなひ候まじければ。無益の事にて候。はからひてよきやうに。早晚にしたがひて申させ給はんにすべきにても候はず。それは又中〳〵あしき事にても候ぬべし。たゞいと子細はしり候はず。これほどにきゝて申候なりと申させ給ひ候はんに。心候はん人はさり

とも心え候ひなん。又道心なからん人は。いかに道理百千萬にわかつとも。よも心え候はじ。殿は道理ふかくして。ひが事おはしまさぬ事にて候と申あひて候へば。これらほどにきこしめさむに。念佛ひが事にてありけり。今はな申しそとおほせらるゝ事はよも候はじ。ざらざらん人は。いかに申すとも。思とも。無益の事にてこそ候はんずれ。何事も御文にはつくしがたく候。あなかしこ〳〵。

十月十八日

其二

おぼつかなくおもひまいらせつる程にこの御文返々よろこびてうけ給はり候ぬ。さても專修念佛の人は。よにありがたき事にて候に。その一國に三十餘人まで候らんこそまめやかにあはれに候へ。京邊などのつねにきくならひ。かたはらをも見ならひ候ひぬべきところにて候だにも。おもひきりて專修念佛をする人は。ありがたき事にてこそ候に。道綽禪師の平州と申候ところにこそ。一向念佛の地にては候に。專修念佛三十餘人は。よにありがたくおぼえ候。これひとへに御ちから。又熊谷の入道などのはからひにてこそ候なれ。それも時のいたりて。往生すべき人のおほく候

べきゆへにこそ候らめ。緣なき事は。わざと人のすゝめ候にだにも。かなはぬ事にて候に。子細もしらせ給はぬ人などの。おほせられんによるべき事にても候はぬに。もとより機緣純熟して。時いたりたる事にて候へばこそ。さ程に專修の人などは候はめと。をしはかられあはれにおぼえ候。だゞし無智の人にこそ。機緣にしたがひて。念佛をばすゝむる事にてはあれと申候なる事は。もろ〳〵の僻事にて候。阿彌陀ほとけの御ちかひには。有智無智をもえらばず。持戒破戒をもきらはず。佛前佛後の衆生をもえらばず。在家出家の人をもきらはず。念佛往生の誓願は。平等の慈悲に住してをこしたまひたる事にて候へば。人をきらふ事はまたく候はぬなり。されば觀無量壽經には。佛心者大慈悲是なりとときて候也。善導和尙是文をうけて。この平等の慈悲をもてあまねく一切を攝すと釋し給へり。一切のことばひろくして。もるゝ人候べからず。釋迦のすゝめ給も。惡人善人愚人智人。ひとしく念佛すれば。往生すとすゝめたまへる也。されば念佛往生の願は。これ彌陀如來の本地の誓願なり。餘の種々の行は本地のちかひにあらず。釋迦如來の種々の機緣にしたがひて。樣々の行をとかせたまひたる事は。釋迦も世に出給ふ意は。彌陀の本願をとかんとおぼしめす御意

にて候へども。衆生の機縁にしたがひてときたまふ日は。餘の種々の行をもとき給ふは。是隨機の法也。佛の自の御心のそこには候はず。されば念佛は。彌陀にも利生の本願。釋迦にも出世の本懷也。餘の種々の行には似ず候なり。これは無智のものなればといふべからず。又要文の事。書てまいらせ候べし。又熊谷の入道の文は是へとりよせ候て。なをすべき事の候へば。その〻ちかきてまいらせ候べし。なに事も御文に申つくすべくも候はず。のちの便宜に又々申候べし。

九月廿八日

其　三

まづきこしめすまゝにいそぎおほせられて候御心ざし申つくしがたく候。この例ならぬ事は。ことがらはむつかしき樣に候へども。當時大事にて。今日あす左右すべき事にては。さりながらも候はぬに。としごろの風のつもり。この正月より別時念佛を五十日申て候しに。いよ〳〵風をひき候て。二月の十日ごろより。すこし口のかわく樣におぼえ候しが。二月の廿日は。五十日になり候しかば。それまでとおもひ候て。なをしゐて候し程に。その事がまさり候て。水などのむ事になり。又身のいたく候事

などの候しが。今日までなやみもやみ候はず。ながびきて候へども。又たゞいまいかなるべしともおぼえぬ程の事にて候也。醫師の大事と申候へば。やいとをふたたびし湯にてゆて候。又樣々の唐のくすりたべなどして候氣にや。このほどはちりばかりよき樣なる事の候也。左右なくのぼるべきなど仰られて候こそ。世にあはれに候へ。さ程とをく候程には。たとひいかなる事にても。のぼりなどし給御事はいかでか候べき。いづくにても念佛して。たがひに往生し候ひなんこそ。めてたくながきはかり事にては候はめ。何事も御文にはつくしがたく候。又々申候べし。

四月廿六日

其　四

御文くはしくうけ給はり候ぬ。又たづねおほせられて候事ども。おほやうしるし申候。

一。熊谷入道。津戸の三郎は。無智のものなればこそ。但念佛をばすゝめたれ。有智の人にはかならずしも念佛にはかぎるべからずと申よしきこえて候らん。きはめたるひが事にて候。そのゆへは。念佛の行は。もとより有智無智にかぎらず。彌陀のむかし

ちかひ給ひし本願も。あまねく一切衆生のため也。無智のためには念佛を願じ。有智のためには餘のふかき行を願じ給ふ事なし。十方衆生の句に。ひろく有智无智。有罪無罪。善人惡人。持戒破戒。賢愚男女。もしはほとけの在世の衆生。もしはほとけの滅後のこのごろの衆生。もしは釋迦の末法万年の後。三寶みなうせてのをはりの衆生までもみなこもれる也。又善導和尙彌陀の化身として。專修念佛をすゝめ給へるも。ひろく一切衆生のためにすゝめて。無智の人にのみかぎる事は候はず。ひろき彌陀の本願をたのみ。あまねき善導のすゝめをひろめんものゝ。いかでか無智の人にかぎりて。有智の人をへだてんや。もししからば彌陀の本願にもそむき。善導の御意にもかなふべからず。されば。この邊にまふてきて。往生のみちをとひたづね候人には。有智無智を論ぜず。みな念佛の行ばかりを申候也。しかるに虛言を構へて。さやうに念佛を申とゞめんとするものは。さきの世に念佛三昧。淨土の法門をきかず。のちの世に又三惡道にかへるべきものゝ。さやうの事をばたくみ申候事にて候也。そのよし聖教に見えて候也。

見有修行起瞋毒　方便破壞競生怨　如此生盲闡提輩　毀滅頓教永沈淪

超過大地微塵劫　未可得離三途身

と申たる也。この文の意は。淨土をねがひ念佛を行ずるものを見てはいかりをなし毒心をふかくして。はかりごとをめぐらし。さま〳〵の方便をなして。念佛の行をやぶり。あらそひてあだをなし。是をとゞめんとする也。かくのごときの人は。むまれてよりこのかた。佛法の眼しゐて。ほとけのたねをうしなへる闡提のともがら也。この彌陀の名號をとなへて。ながき生死をたちまちにきり。常住の極樂に往生すといふ頓教の御法をそしりほろぼして。このつみによりて。ながく三惡道にしづむなり。かくのごとき人は。大地微塵劫をすぐとも。ながく三惡道の身をはなるゝ事をうべからずといへる也。されば。さやうに虛言をたくみて申候らん人をば。かへりてあはれむべきものなり。さほどのものゝ申さんによりて。念佛にうたがひをなし。不審をこさんものは。いふにたらぬ程の事にてこそは候はめ。おほかた彌陀に緣あさく往生に時いたらぬものは。きけども信ぜず。をこなふを見てははらをたて。いかりをふくみて。さまたげんとする事にて候也。その意をえていかに人申とも。御心ばかりはゆるがせ給ふべからず。あながちに信ぜざらんは。佛なをちからをよび給ふまじ

いかにいはんや凡夫はちからをよぶまじき事也。かゝる不信の衆生のために。慈悲ををこし利益せんと思はんにつけても。とく極樂へまいりて。さとりをひらきて。生死にかへりて誹謗不信のものをもわたし。一切衆生をあまねく利益せんと思べき事にて候也。このよしを意えておはしますべし。

一。一家の人々の善根に結緣助成せん事。この條左右にをよばず。もともしかるべき事に候。念佛の行をさまたぐる事をこそ。專修の行には制したる事にて候へ。人々のあるひは堂をつくり佛をつくり。經をもかき僧をも供養せんにはちからをくはへ緣をむすばんが。念佛をさまたげ。專修をさふる程の事には候まじき也。

一。念佛申させ給はんには。心をつねにかけて。口にわすれずとなふるが。めてたき事にて候也。念佛の行は。もとより行住坐臥時處諸緣をきらはぬ行にて候へば。たとひ身もきたなく。口もきたなくとも。心をきよくしてわすれず申させ給はん事は。返々神妙に候。ひまなくさやうに申させ給はんこそ。返々ありがたくめでたく候へ。いかならんところ。いかならんときなりとも。わすれず申させ給はゞ。往生の業にかなずなり候はんずる也。この心なからん人には。をしへさせ給ふべし。いかならん時に

も申されざらんをこそ。ねんじて申さばやとおもふべきに。申されんをねんじて申させ給はぬ事はいかでか候べき。ゆめ〳〵候まじ。たゞいかなるおりにもきらはず申させ給ふべし。

一。念佛の行あながちに信ぜざらん人に論じあひ。又あらぬ行ことさとりの人にむかひて。いたくしゐておほせらるゝ事候まじく候。異解異學の人を見てはこれを恭敬して。かろしめあなどる事なかれと申たる事にて候也。されば。おなじ心に。極樂をねがひ念佛を申さん人には。たとひ塵刹の外の人なりとも。同行のおもひをなして。一佛淨土にむまれんとおもふべき事にて候也。阿彌陀佛に緣なく。極樂淨土にちぎりすくなく候はん人の。信もおこらず。ねがはしくもなく候はんにはちからをよばず。たゞ心にまかせていかならんをこなひをもして。後生たすかりて。三惡道をはなるべき事を。人の心にしたがひてすゝめ給ふべき也。又さは候へども。ちりばかりもかなひぬべからん人には阿彌陀ほとけをすゝめ。極樂をねがはすべき也。いかに申すともこの世の人の。極樂にむまれて生死をはなれん事。念佛ならで極樂にむまるゝ事は候まじき事にて候也。このあひだのことをば。人の心にしたがひてはからふ

べきにて候なり。いかさまにも物をあらそふ事は。ゆめ〳〵候まじき事に候。もしはそしり。もしは信ぜざらんものをば。ひさしく地獄にありて。又地獄へ還るべきものなりとよく〳〵意えて。こゝがらてこしらへすゝむべきにて候。又よもとおもひまいらせ候へども。いかなる人申とも。念佛の御心などたぢろぎおぼしめす事有まじく候。たとひ千佛世にいでゝ。念佛は往生すべからずと。まのあたりをしへさせ給ふとも。これは釋迦彌陀よりはじめて。恆沙のほとけの證誠せさせ給ふ事なればとおぼしめして。心ざしを金剛よりもかたくして。このたびかならず阿彌陀ほとけの御まへゝ參らんずると。おぼしめすべき事にて候也。かくのごときの事かたはしを申さんに。御心え候て。わがため人のためにをこなはせたまふべし。

九月十八日　　眞觀　承

以上五文。和語燈錄。勅修御傳。九卷傳等に出づ。然るに最後の一文具略同からず。燈錄は今の如し。四項をあぐ。御傳には第二項を除きて唯三項あり。九卷傳及び西方指南抄には第二項の次に別に一項。第三項の次に九卷傳には一項。指南抄には二項あり。今之を載錄するに左の如し。

一。此世の祈に。佛にも神にも申さん事は。そも苦敷候まじ。後世の往生の爲には。念

佛の外に。あらぬ行をすること。念佛を妨れば。あしき心にては候へ。此世の爲にする事は。往生の爲には候はねば。神佛の祈。更に苦敷かるまじく候。九卷傳。指南抄。

一。御佛。仰にしたがひ具に開眼して。下し參らせ候。阿彌陀の三尊造りて參らせ候ける。返々神妙に候。佛像造りまいらせたるは目出度功德にて候也。同上。

一。いま一いふべき事のあるとおぼせられて候は。なに心にか候らん。なむ條はゞかりか。候べき。おぼせ候べし。指南抄。

其五

この度かまへて往生しなんと思食きるべく候。受がたき人身すでに受たり。あひがたき念佛往生の法門にあひたり。娑婆をいとふ心あり。極樂をねがふ心おこりたり。彌陀の本願深し。往生は御心にあるべきなり。ゆめ〳〵御念佛をこたらず。決定往生のよしを存ぜさせ給べし。云云。

これは或時の御文なり。勅修御傳。九卷傳等に出づ。但し熊谷入道へつかはされける御文の中にも是とおなじき詞あり。同き御文を兩人に遣はされけるにや。

其六

誠にさやうにて志ばかりふかきも。出家の定にてこそは候へ。何事も時いたる事にて候へば。強にいそぎ思召べきことにも候はず。いかにも又すまふにもより候はず。期の至る折は程なきことにて候。又戒品書てまいせら候。假名もて戒品などかきたるはあしく候へば。是は寛印供奉と申候人の。せさせ給ひたる十重禁の次第にて候。三聚淨戒はわたくしにかきて候。別々に候也。袈裟まいらせ候。新きも候へども。わざと當時かけふるして候を參らせ候也。なのり房號かきてまいらせ候。男ながらも皆法名をつきけさをかくることにて候也。別紙にかきて候也云云。

これは戒並に袈裟など乞ける時の御返事なり。九卷傳に出づ。

其七

これ程に思食事は。此世一の事にはあらず。先の世のふかき契りと哀に候。かまへて極樂に此度まいりあはせ給べし。常に持て候ずゞまいらせ候。御念佛をこたらずさせおはしますべしと。云云。

これは上人所持の念珠を所望しける時の御返事なり。勅修御傳。九卷傳等に出づ。

其八

影の事は熊谷入道の書て候しか共。無下に此姿たがひて候ひしかば。すてゝくだりて候也。されば此たびもゑがきて下し候はぬには。唯口惜候。其かはりには善導和尚の御影をおがませおはします。すべく候。云云。

これは上人の眞影を所望しける時の御返事なり。九卷傳に出づ。

其九

七月十四日の御消息。八月廿一日に見候ぬ。遙のさかひに。かやうに仰られて候。御こゝろざし申つくすべからず候。まことにしかるべき事にて。かやうに候。とかく申ばかりなく候。但今生の事は。これにつけても。われも人もおもひしるべき事に候。いとひてもいとはんと思召べく候。けふあすともしり候はぬ身に。かゝる目を見候。心うき事にて候へども。されば こそ。穢土のならひにては候へ。だゞとく〳〵往生をせばやとこそ思候へ。たれもこれを遺恨の事など。ゆゝめにも思召べからず候。しかるべき身の宿報と申。又穢惡充滿のさかひ。これにはじめぬ事に候へば。なに事につけても。たゞいそぎ〳〵往生をせんと思べき事に候。あなかしこ〳〵。云云。

八月廿四日　　源空判

五一〇

これは上人流刑のよし聞き傳へて。武藏國より遙に讃岐國へ書狀を遣ずる時の御返事なり。九卷傳。勅修御傳に出づ。

五一　法性寺信實の伯母なる女房に遣はす御返事

念佛行者のぞんじ候べきやうは。後世をそれ往生をねがひて念佛すれば。をはるときかならず來迎せさせ給よしをぞんじて。念佛申より外のことは候はず。三心と申候も。ふさねて申ときはたゞ一の願心にて候なり。そのねがふ心のいつはらずかざらぬ方をば。至誠心と申候。この心の實にて念佛すれば。臨終にらいかうすといふことを。一念もうたがはぬ方を。深心とは申候。このうへわが身もかの土へむまれむとおもひ。行業をも往生のためと向るを。迴向心とは申候なり。このゆへにねがふ心いつはらずして。げに往生せむとおもひ候へば。をのづから三心はぐそくすることにて候也。抑中品下生に來迎の候はぬことはあるまじければ。とかれぬにては候はず。九品往生にをの〳〵みなあるべきことの略せられてなき事も候也。善導の御心

は。三心も品々にわたりてあるべしとみえて候。品々ごとにおほくのこと候へども。三心と來迎とはかならずあるべきにて候なり。往生をねがはん行者は。かならず三心ををこすべきにて候へば。上品上生にこれをときて。餘の品々をも。是になずらへてしるべしと見えて候。又われら戒品のふねいかだもやぶれたれば。生死の大海をわたるべき緣も候はず。智惠のひかりもくもりて。生死のやみをてらしがたければ。聖道の得道にももれたるわれらがためにぼどこし給他力と申候は。第十九の來迎の願にて候へば。文に見えず候とても。かならず來迎はあるべきにて候也。ゆめ〳〵御うたがひ候べからず。あなかしこ〳〵。

源空

和語燈錄。勅修御傳等に出づ。

五二　或人のもとへつかはす御消息

一。毎日御所作。六万遍めでたく候。うたがひの心だにも候はねば。十念一念も往生はし候へども。おほく申候へば。上品にむまれ候。釋にも上品花臺見慈主。到者皆因念佛

多と候へば。

一。宿善によりて。往生すべしと人の申候らん。ひが事にては候はず。かりそめの此世の果報だにも。さきの世の罪。功德によりて。よくもあしくもむまるゝ事にて候へば。まして往生程の大事。かならず宿善によるべしと。聖敎にも候やらん。たゞし念佛往生は。宿善のなきにもより候はぬやらん。父母をころし。佛身よりちをあやしたるほどの罪人も。臨終に十念申て往生すと。觀經にも見えて候。しかるに宿善あつき善人は。をしへ候はねども。惡にをそれ佛道に心すゝむ事にて候へば。五逆などはいかにも〳〵つくるまじき事にて候也。それに五逆の罪人。念佛十念にて往生をとげ候時に。宿善のなきにもより候まじく候。されば經に。若人造多罪。得聞六字名。火車自然去。花臺卽來迎。極重惡人无他方便。唯稱彌陀得生極樂。若有重業障无生淨土因。乘彌陀願力。必生安樂國。この文の意は若五逆をつくれりとも。彌陀の六字の名をきかば。火の車自然にさりて。蓮臺きたりてむかふべし。又きはめてをもき罪人の。他の方便なからんも。彌陀をとなへたてまつらば。極樂にむまるべし。又もしをもきさはりありて。淨土にむまるべき因なくとも。彌陀の願力に乘じなば。安樂國にむまるべしと候へ

ば。たのもしく候。又善導の釋には。嗔劫より此かた六道に輪廻して。出離の緣なからん。常沒の衆生をむかへんがために。阿彌陀ほとけは佛になり給へりと候。その常沒の衆生と申候は。恆河のそこにしづみたるいきものゝ。身おほきにながくして。その河にはゞかりて。えはたらかず。つねにしづみたるに。惡世の凡夫をたとへられて候。又凡夫と申。二の文字をば。狂醉のごとしと。弘法大師釋し給へり。げにも凡夫の心は。物ぐるひ。さけにゑひたるがごとくして。善惡につけて。おもひさだめたる事なく。一時に煩惱百たびまじはりて。善惡みだれやすければ。いづれの行なりとも。わがちからにては行じがたし。しかるに生死をはなれ。佛道にいるには。菩提心ををこし。煩惱をつくして。三祇百劫難行苦行してこそ。佛にはなるべきにて候に。五濁の凡夫。わがちからにては願行そなはる事かなひがたくて。六道四生にめぐり候也。彌陀如來この事をかなしみおぼしめして。法藏菩薩と申しゝいにしへ。我等が行じがたき僧祇の苦行を。兆載永劫があひだ功をつみ。德をかさねて。阿彌陀ほとけになり給へり。一佛にそなへたまへる四智三身。十力無畏等の一切の內證の功德。相好光明說法利生等の外用の功德。さま〳〵なるを。三字の名號の中におさめいれて。この名號を十聲一

聲までもとなへん者を。かならずむかへん。もしむかへずば。われ佛にならじとちかひ給へるに。かの佛いま現に世にまし〳〵て。佛になり給へり。名號をとなへん衆生往生うたがふべからずと。善導もおほせられて候也。この樣をふかく信じて。念佛をこたらず申て。往生うたがはぬ人を。他力を信じたるとは申候也。世間の事にも他力は候ぞかし。あしなえこしゐたる者の。とをきみちをあゆまんとおもはんにかなはねば。船車にのりてやすくゆく事。これわがちからにあらず。乘物のちからなれば他力也。あさましき惡世の凡夫の。諂曲の心にて。かまへつくりたるのり物にだに。かゝる他力あり。まして五劫のあひだおぼしめしさだめたる。本願他力のふねいかだに乘なば。生死の海をわたらん事。うたがひおぼしめすべからず。しかのみならず。やまひをいやす草木。くろがねをとる磁石不思議の用力有。又麝香はかうばしき用あり。犀の角は水をよせぬ力あり。これみな情なき草木。誓ををこさぬ獸なれども。もとより不思議の用力はかくのみこそ候へ。まして佛法不思議の用力ましまさざらんや。されば念佛は。一聲に八十億劫のつみを滅する用あり。彌陀は。惡業深重の者を來迎し給ふちからましますとおぼしめしとりて。宿善のありなしも沙汰せず。つみのふ

かきあさきも返りみず。たゞ名號となふるものゝ。往生するぞと信じおぼしめすべく候。すべて破戒も持戒も貧窮も福人も。上下の人をきらはず。たゞわが名號をだに念ぜば。いしかはらを變じて。金となさんがごとく。來迎せんと御約束候也。法照禪師の五會法事讃にも。

彼佛因中立二弘誓一　聞レ名念レ我總迎來　不レ簡二貧窮將富貴一　不レ簡二下智與高才一
不レ簡二多聞持淨戒一　不レ簡二破戒罪根深一　但使二迴心多念佛一　能令二瓦礫變成金一

たゞ御ずゝをくらせおはしまして。御舌をだにもはたらかされず候はんは。げだいにて候べし。たゞし善導の三緣の中の。親緣を釋し給ふにも。衆生ほとけを禮すれば佛これを見給ふ。衆生佛をとなふれば。佛これをきゝ給ふ。衆生佛を念ずれば。佛も衆生を念じ給ふ。かるがゆへに阿彌陀佛の三業と。行者の三業と。かれこれひとつになりて。佛も衆生もおや子のごとくなるゆへに。親緣となづくと候めれば。御手にずゝをもたせ給ひて候はゞ。佛これを御らん候べし。御心に念佛申すぞかしとおぼしめし候はゞ。佛も衆生を念じ給ふべし。されば佛に見えまいらせて。念ぜられまいらする御身にてわたらせ給はんずる也。されば つねに御したのはたらくべきにて候也

三業相應のためにて候べし。三業とは。身と口と意とを申候也。しかも佛の本願の稱名なるがゆへに。聲を本體とはおぼしめすべきにて候。さてわがみ〳〵にきこゆる程に申候は。高聲念佛のうちにて候なり。高聲は大佛をおがみ。念ずるは念佛のかすへもなど申げに候。いづれも往生の業にて候べく候。

一。御無言めてたく候。たゞし無言ならで申念佛は。功德すくなしとおぼしめされんはあしく候。念佛をば金にたとへたる事にて候。金は火にやくにもいろまさり。みづにいるゝにも損せず候。かやうに念佛は妄念のをこる時申候へどもけがれず。物を申しまするにもまぎれ候はず。そのよしを御意え候ながら。御念佛の程は異ことをまぜずして。いますこしも念佛のかずをそへんとおぼしめさんはさにて候。もしおぼしめしわすれて。ふと物などをおほせ候て。あなあさまし。いまはこの念佛むなしくなりぬと。おぼしめす御事は。ゆめ〳〵候まじく候。いかやうにて申候とも。往生の業にて候べく候。

一。百万遍の事。佛の願にては候はねども。小阿彌陀經に。若一日。若二日。乃至七日念佛申人。極樂に生ずるととかれて候へば。七日念佛申べきにて候。その七日の程のかず

は。百万遍にあたり候よし。人師釋して候へば。百万遍は七日申べきにて候へども。堪候はざらん人は。八日九日などにも申され候へかし。されば百万遍申さざらん人のむまるまじきにては候はず。一念十念にてもむまれ候也。一念十念にてもむまれ候ほどの念佛とおもひ候うれしさに。百万遍の功德をかさぬるにて候なり。

一。七分全得の事。仰のまゝに申げに候。さてこそ逆修はする事にて候へ。さ候へばのちの世をとぶらひぬべき人候はん人も。それをたのまずして。われとはげみて念佛申して。いそぎ極樂へまいりて。五通三明をさとりて。六道四生の衆生を利益し。父母師長の生所をたづねて。心のまゝにむかへとらんとおもふべきにて候也。又當時日ごとの御念佛をも。かつ〳〵迴向しまいらせられ候べし。なき人のために念佛を迴向し候へば阿彌陀ほとけひかりをはなちて。地獄餓鬼畜生をてらし給ひ候へば。此三惡道にしづみて苦をうくる者。そのくるしみやすまりて。いのちをはりてのち。解脫すべきにて候。大經にいはく。若在三塗勤苦之處見此光明皆得休息。无復苦惱壽終之後皆蒙解脫といへり。

一。本願のうたがはしき事もなし。極樂のねがはしからぬにてはなけれども。往生一

定とおもひやられて。とくまいりたき心のあさゆふは。しみ〳〵ともおぼえずとおほせ候事。まことによからぬ御事にて候。淨土の法門をきけどもきかざるがごとくなるは。このたび三惡道よりいでゝ。つみいまだつきざるもの也と。經にもとかれて候又この世をいとふ御心うすくわたらせ給ふにて候。そのゆへは。西國へくだらんともおもはぬ人に。船をとらせて候はんに。ふねの水にうかぶ事なしとはうたがひ候はねども。當時さしているまじければ。いたくうれしくも候まじきぞかし。さてかたきの城などにこめられて候はんが。からくしてにげてまかり候はんみちに。おほきなる河海などの候て。わたるべきやうもなからんおり。おやのもとよりふねをまうけて。むかへにたびたらんは。さしあたりていかばかりかうれしく候べき。これがやうに。貪瞋煩惱のかたきにしばられて。三界の樊籠にこめられたるわれらを。彌陀悲母の御心ざしふかくして。名號の利劒をもちて生死のきづなをきり。本願の要船を苦海のなみにうかべて。かのきしにつけ給ふべしとおもひ候はんうれしさは。歡喜のなみだたもとをしぼり。渴仰のおもひきもにそむべきにて候。せめては身の毛いよだつほどにおもふべきにて候を。のさにおぼしめし候はんは。ほいなく候へども。

それもことはりにて候。つみつくる事こそをしへ候はねども。心にもそみておぼえ候へ。そのゆへは。無始より此かた六趣にめぐりし時も。かたちはかはれども心はかはらずして。いろ〳〵さま〴〵つくりならひて候へば。いまもうゐ〳〵しからず。やすくはつくられ候へ。念佛申て往生せばやとおもふ事は。此たびはじめてわづかにきゝえたる事にて候へば。きとは信ぜられ候はぬ也。そのうへ人の心は頓機漸機として二しなに候也。頓機は。きゝてやがてさとる心にて候。漸機は。やう〳〵さとる心にて候也。ものまうでなどをし候に。あしはやき人は一時にまいりつくところへ。あしをそきものは日くらしにもかなはぬ樣には候へども。まいる心だにも候へば。つゐにはとげ候やうに。ねがふ御心だにわたらせ給ひ候はゞ。とし月をかさねても。御信心もふかくならせおはしますべきにて候。一日ごろ念佛申せども。臨終に善知識にあはずば。往生しがたし。又やまひ大事にて心みだれば。往生しがたしと申候はんは。さもいはれて候へども。善導の御意にては。極樂へまいらんと心ざして。おほくもすくなくも。念佛申さん人のいのちつきん時は。阿彌陀ほとけ聖衆とともにきたりてむかへ給ふべしと。候へば。日ごろだにも御念佛候はゞ。御臨終に善知識候はずとも。

ほとけはむかへさせ給ふべきにて候。又善知識のちからにて往生すと申候事は。觀經の下三品の事にて候。下品下生の人などこそ。ひごろ念佛も申候はず。往生の心も候はぬ逆罪の人の。臨終にはじめて善知識にあひて。十念具足して往生するにてこそ候へ。日ごろより他力の願力をたのみ。思惟の名號をとなへて。極樂へまいらんとおもひ候はん人は。善知識のちからにて候はずとも。佛は來迎したまふべきにて候。又かろきやまひをせんといのり候はん事も。心かしこくは候へども。やまひもせて死候人も。うるはしくをはる時には。斷末摩のくるしみとて。八万の塵勞門より。無量のやまひ身をせめ候事。百千のほこつるぎにて。身をきりさくがごとし。されば。まなこなきがごとくにして。見んとおもふ物をもみず。舌のねすくみて。いはんとおもふ事もいはれず候也。是は人間の八苦のうちの死苦にて候へば。本願を信じて往生をねがひ候はん行者も。此苦はのがれずして。悶絶し候とも。息のたえん時は。阿彌陀ほとけのちからにて。正念になりて往生をし候べし。臨終はかみすぢきるがほどの事にて候へば。よそにて凡夫さだめがたく候。たゞ佛と行者との心にてしるべく候也。そのうへ三種の愛心をこり候ひぬれば。魔縁たよりをえて。正念をうしなひ候也。この愛

心をば善知識のちからばかりにてはのぞきがたく候。阿彌陀ほとけの御ちからにてのぞかせ給ひ候べく候。諸邪業繫無能礙者。たのもしくおぼしめすべく候。又後世者とおぼしき人の申げに候は。まづ正念に住して。念佛申さん時に。佛來迎し給ふべしと申げに候へども。小阿彌陀經には。與諸聖衆現在其前。是人終時心不顚倒。卽得往生阿彌陀佛極樂國土と候へば。人のいのちをはらんとする時。阿彌陀ほとけ聖衆とともに。目のまへにきたり給ひたらんをまづみまいらせてのちに。心は顚倒せずして。極樂にむまるべしとこそ心えて候へ。されば。かろきやまひをせばや。善知識にあはばやといのらせ給はんいとまにて。いま一返もやまひなき時。念佛を申して。臨終には阿彌陀ほとけの來迎にあづかりて。三種の愛心をのぞき。正念になされまいらせて。極樂にむまれんとおぼしめすべく候。されば。とていたづらに。候ぬべからん善知識にもむかはてをはらんとおぼしめすべきにては候はず。先德達のをしへにも。臨終の時に。阿彌陀を西のかべに安置しまいらせて。病者そのまへに西むきにふして。善知識に念佛をすゝめられよとこそ候へば。それこそあらまほしき事にて候へ。たゞし人の死の緣は。かねておもふにもかなひ候はず。俄におほぢにてをはる事も

候。又大小便利のところにてしぬる人も候。前業のがれがたくして。太刀かたなにていのちをうしなひ。火にやけ。水におぼれて。いのちをほろぼすたぐひおほく候へばさやうにて死候とも。日ごろに念佛申て極樂へまいる心だにも候人ならば。息のたえん時に。阿彌陀觀音勢至。きたりむかへ給べしと信じおぼしめすべきにて候也。往生要集にも。時所諸緣を論ぜず。臨終に往生をもとめねがふに。その便宜をえたる事。念佛にはしかずと候へば。たのもしく候。

このよしをよみ申させ給ふべく候。八つの事しるして。まいらせ候。これはのちに御たづね候し御返じにて候。

一。所作おほくあてがひてかゝんよりはすぐれて申さん。一念もむまるなればとおほせの候事。まことにさも候ひぬべし。たゞし禮讃の中には。十聲一聲定得往生。乃至一念無有疑心と釋せられて候へども。疏の文には。念々不捨者。是名正定之業と候へば。十聲一聲にむまると信じて。念々にわするゝ事なくとなふべきにて候。又彌陀名號相續念とも釋せられて候。されればあひついて念ずべきにて候。一食のあひだに。三度ばかりおもひいてんはよき相續にて候。つねにだにおぼしめしいてさせ給ひ候

はゞ。十万六万申させ給ひ候はずとも。相續にて候ぬべけれども。人の心は。當時見る事きく事にうつる物にて候へば。なにとなく御まぎれの中には。おぼしめしいてん事かたく候ぬべく候。御所作おほくあてゝ。つねにずゞをもたせ給ひ候はゞ。おぼしめしいて候ぬとおぼえ候。たとひ事のさはりありて。かゝせおはしまして候とも。あさましやかきつる事よとおぼしめし候はゞ。御心にかけられ候はんずるぞかしと。てもかくても御わすれ候はずば。相續にて候べし。又かけて候はん御所作を。つぎの日申いれられ候はん事さも候なん。それもあす申いれ候はんずればとて。御ゆだん候はんはあしく候。せめての事にてこそ候へ。御意えあるべく候。

一。魚鳥に七箇日のいみの候なる事。さもや候らん。え見をよばず候。地體はいきとしいける物は。過去のちゝはゝにて候なれば。くふべき事にては候はず。又臨終には。酒魚鳥葱韮蒜などはいまれたる事にて候へば。やまひなどかぎりになりてはくふべき物にては候はねども。當時きとしぬばかりは候はぬやまひの。月日つもり苦痛もしのびがたく候はんには。ゆるされ候なんとおぼえ候。御身たゞしくて念佛申さんとおぼしめして。御療治候べし。いのちをおしむは往生のさはりにて候。やまひばか

りをば。療治はゆるされ候なんとおぼえ候。

二の事の御たづねしるしてまいらせ候。よく〳〵よみ申させ給ふべく候。

拾遺和語燈錄。勅修御傳等に出づ。

五三　或人の許に遣はす御文

一。とはこの時西にむかふべからず。又西をうしろにすべからず。きたみなみにむかふべし。おほかたうちゐたらんにも。うちふさんにも。かならず西にむかふべし。もしゆゝしく便宜あしき事ありて。西をうしろにする事あらば。心のうちにわがうしろは西也。阿彌陀ほとけのおはしますかた也とおもへ。たゞいまあしさまにてむかはねども。心をだにも西方へやりつれば。そゞろに西にむかはて。極樂をおもはぬ人にくらぶれば。それにまさる也。

一。孝養の心をもてちゝはゝをおもくしおもはん人は。まづ阿彌陀ほとけにあづけまいらすべし。わが身の人となりて往生をねがひ念佛する事は。ひとへにわが父母

のやしなひたてたればこそあれ。わが念佛し候功德をあはれみて。わが父母を極樂へむかへさせおはしまして。罪をも滅しましませとおもはゞ。かならず〳〵むかへとらせおはしまさんずる也。されば唐土の妙雲といひし尼は。むさなくして父母にをくれたりけるが。二十年ばかり念佛して。父母をいのりしかば。ともに地獄の苦をあらためて。極樂へまゐりたりける也。

一。善導和尙の往生禮讚に。本願をひきていはく。若我成佛。十方衆生。稱我名號。下至十聲。若不生者。不取正覺。彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生。この文をつねに。口にもとなへ。心にもうかべ。眼にもあてよ。阿彌陀佛すでに本願を成就し。極樂世界を莊嚴したてゝ。御目を見めぐらして。わが名をとなふる人やあると御らんじ。御みゝをかたぶけて。わが名を稱する者やあると。よるひるきこしめさる也。されば一稱も一念も。阿彌陀佛にしられまいらせずといふ事なし。されば攝取の光明はわが身をすて給ふ事なく。臨終の來迎はむなしき事なき也。この文は。四十八願の眼也。肝なり。神也。四十八字にむすびたる事は。このゆへ也。よく〳〵身をもきよめ。手をもあらひて。ずゞをもとり。袈裟をもかくべし。不淨の身にて持佛堂へ入べか

らずこの世の主君などをだにもうやまひをそるゝ事にてあるに。まして無上世尊の。もろ〳〵の大菩薩にもうやまはれ給へるに。われらが身にていかてかなのめにもあたりまいらすべき。一切の諸天もかうべをかたぶけ給ふ。いかにいはんやわれらが身をや。又つみをおそるゝは。本願をかろしむる也。身をつゝしみてよからんとするは。自力をはげむなりといふ事は。ものもおぼえぬ。あさましきひが事也。ゆめゆめみゝにもきゝいるべからず。つゆちりばかりももちゐまじき事也。はじめ浄土の三部經より。唐土日本の人師の御作の中にも。またくなき事ども。心にまかせてわがおもふさまに。わろからんとていひ出したる事也。一定三悪道におちんずる事也。一代聖教の中に。ふつとなき事也。五逆十悪の罪人の。臨終の一念十念によりて來迎にあづかる事は。そのつみをくゐかなしみて。たすけおはしませとおもひて。念佛すれば。彌陀如來願力ををこして。罪を滅し。來迎しまします也。本願のまゝにかきてまいらせ候。このまゝに信じて。御念佛候べし。かまへて〳〵たうとき念佛者にておはしませ。あなかしこ〳〵。

拾遺和語燈錄に出づ。

五四　ある人の許に遣はす御返事

念佛往生はいかにもしてさはりをいだし。難ぜんとすれども。往生すまじき道理はおほかた候ぬ也。善根すくなしといはんとすれば。一念十念もるゝ事なし。罪障をもしといはんとすれば。十悪五逆も往生をとぐ。人をきらはんといはんとすれば。常没流轉の凡夫を。まさしきうつはものとせり。時くだれりといはんとすれば。末法万年のすゑ。法滅已後さかりなるべし。此法はいかにきらはんとすれどももるゝ事なし。たゞちからをよばざる事は。惡人をも時をもえらばず。攝取し給ふ佛なりと。ふかくたのみて。わが身をかへりみず。ひとすじに佛の大願業力によりて。善惡の凡夫往生をうと信ぜずして。本願をうたがふばかりこそ。往生にはおほきなるさはりにて候へ。いかさまにも候へ。末代の衆生は。今生のいのりにもなり。まして後生の往生は。念佛の外にはかなふまじく候。源空がわたくしに申事にてはあらず。聖教のおもてにかゞみをかけたる事にて候へば。御らんあるべく候也。

拾遺和語燈錄に出づ。

第七輯　說話

五五　常に仰せられける御詞

一。上人の給はく。口傳なくして淨土の法門を見るは。往生の得分を見うしなふなり其故は極樂の往生は上は天親龍樹をすゝめ。下は末世の凡夫十惡五逆の罪人まで すゝめ給へり。しかるをわが身は最下の凡夫にて。善人をすゝめ給へる文を見て。卑下の心をおこして。往生を不定におもひて。順次の往生を得ざるなり。しかれば善人をすゝめ給へる所をば善人の分と見。惡人をすゝめ給へる所をば我分と見て得分にするなり。かくの如くみさだめぬれば。決定往生の信心かたまりて。本願に乘じて順次の往生をとぐるなり。編者曰。東宗要に出づ。

一。念佛申にはまたく別の樣なし。たゞ申せば極樂へむまると知て。心をいたして申せばまいるなり。白川消息に出づ。

一。南無阿彌陀佛といふは。別したる事には思べからず。阿彌陀ほとけ我をたすけ給

へといふことばと心得て。心には阿彌陀ほとけ。たすけ給へとおもひて。口には南無阿彌陀佛と唱るを。三心具足の名號と申なり。

一。罪は十惡五逆の者。なをむまると信じて。小罪をもをかさじと思べし。罪人なをむまる。いかにいはんや善人をや。行は一念十念むなしからずと信じて。無間に修すべし。一念なをむまる。いかにいはんや多念をや。小消息。閑亭後世物語。決疑鈔等に出づ。

一。一念十念に往生をすといへばとて。念佛を疎想に申すは。信が行をさまたぐるなり。念々不捨者といへばとて。一念を不定におもふは。行が信をさまたぐるなり。信をば一念にむまると信じ。行をば一形にはげむべし。又一念を不定に思ふは。念々の念佛ごとに不信の念佛になるなり。其故は。阿彌陀佛は。一念に一度の往生をあてをき給へる願なれば。念ごとに往生の業となるなり。禪勝房に示す御詞に見ゆ。又東宗要に出づ。

一。煩惱のうすくあつきをもかへりみず。罪障の輕き重きをも沙汰せず。たゞ口に南無阿彌陀佛と唱へて。聲につきて決定往生のおもひをなすべし。大胡消息。往生大要抄。東宗要等に出づ。

一。たとひ餘事をいとなむとも。念佛を申〳〵。これをするとおもひをなせ。餘事をしゝ。念佛すとはおもふべからず。一言芳談に禪勝房云。故上人の教云云とあり。

一。往生をねがひ。極樂にまいらん事を。まめやかにおもひ入たる人の氣色は。世の中をひとくねり。恨みたる色にて常にはある也。

一。人の命は食事の時。むせて死する事も有なり。南無阿彌陀佛とかみて。南無阿彌陀佛とのみ入べきなり。

一。法爾の道理と云事あり。ほのほは空にのぼり。水はくだりさまにながる。菓子の中にすき物ありあまき物あり。これらはみな法爾の道理なり。阿彌陀佛の本願は。名號をもて罪惡の衆生をみちびかんとちかひ給たれば。たゞ一向に念佛だにも申せば。佛の來迎は法爾の道理にてうたがひなし。(念佛問答集に出づ。)

一。善導の釋を拜見するに。源空が目には。三心も南無阿彌陀佛。五念も南無阿彌陀佛。四修も南無阿彌陀佛なり。(授手印。東宗要等に出づ。論註記には具に五念門の一々につき更に詳なり。)

一。弘願といへるは。如大經說。一切善惡凡夫得生者莫不皆乘阿彌陀佛大願業力爲增上緣と善導釋し給へり。予がごときの不堪の身は。ひとへにたゞ弘願をたのむなり。

一。我はこれ烏帽子もきざる男なり。十惡の法然房愚癡の法然房が。念佛して往生せんと云也。(物語集。西宗要等に出づ。)

一。學生骨になりて。念佛やうしなはんずらん。

一。本願の念佛には。ひとりだちをせさせて。すけをさゝぬなり。すけといふは。智惠をもすけにさし。持戒をもすけにさし。道心をもすけにさし。慈悲をもすけにさすなり。善人は善人ながら念佛し。惡人は惡人ながら念佛して。たゞむまれつきのまゝにて念佛する人を。念佛にすけさゝぬとは云也。さりながら。惡をあらため。善人となりて念佛せん人は佛の御心に叶べし。かなはぬ物ゆへに。とあらんかゝらんと思て。決定心おこらぬ人は。往生不定の人なるべし。(念佛問答集に出たり。)

一。佛告阿難。汝好持是語。持是語者。卽是持無量壽佛名といへり。名號をきくといふとも信ぜずば。きかざるがごとし。たとひ信ずといふとも唱へずば。信ぜざるがごとし。たゞ常に念佛すべきなり。

一。近來の行人。觀法をなす事なかれ。佛像を觀ずとも。運慶。康慶が造たる佛程だにも。觀じあらはすべからず。極樂の莊嚴を觀ずとも。櫻梅桃李の花菓程も。觀じあらはさん事かたかるべし。たゞ彼佛今現在世成佛。當知本誓重願不虛。衆生稱念必得往生の釋を信じて。ふかく本願をたのみて。一向に名號を唱べし。名號を唱れば。三心をのづ

から具足する也。

一。往生の業成就は。臨終平生にわたるべし。本願の文簡別せざるゆへなり。惠心の心も。平生にわたると見えたり。

一。他力本願に乘ずるに二あり。乘ぜざるに二あり。乘ぜざるに二といふは。一には罪をつくるとき乘ぜず。其故はかくのごとく罪をつくれば。念佛申とも往生不定なりとおもふ時に乘ぜず。二には道心のおこる時乘ぜず。其故は。おなじく念佛申とも。かくのごとく道心ありて申さんずる念佛にてこそ往生はせんずれ。無道心にては念佛すともかなふべからずと。道心をさきとして。本願をつぎにおもふ時乘ぜざるなり。次に本願に乘ずるに二の樣といふは。一には罪つくる時乘ずるなり。其故は。かくの如く罪をつくれば。決定して地獄に落べし。しかるに本願の名號を唱れば。決定往生せん事のうれしさよとよろこぶ時に乘ずるなり。二には道心おこる時乘ずるなり。其故は。此道心にて往生すべからず。これ程の道心は。無始よりこのかたおこれども。いまだ生死をはなれず。故に道心の有無を論ぜず。造罪の輕重をいはず。たゞ本願の稱名を。念々相續せんちからによりてぞ。往生は遂べきとおもふ時に。他力本願に

乘ずるなり。

一。ぜこにこめたる鹿も。友に目をかけずして。人影にかへらず。むかひたる方へ。おもひきりてまひらににぐれば。いくへ人あれども。かならずにげらるゝなり。その定に他力をふかく信じて。萬事をしらず。往生をとげんとおもふべきなり。

一。稱名の時に心におもふべき樣は。人の膝などをひきはたらかして。やたすけ給へと云定なるべし。

一。七日七夜心無間といふは。明日の大事をかゝじと。今日はげむがごとくすべし。

一。人の手より物を得んずるに。すでに得たらんと。いまだ得ざるといづれか勝べき。源空はすでに得たる心地にて念佛申なり。

一。往生は一定と思へば一定なり。不定と思へば不定也。（往生大要抄等に出づ。）

一。念佛申さんもの十人あらんに。たとひ九人は臨終あしくて往生せずとも。我一人は決定して往生すべしとおもふべし。（念佛問答集に出づ。）

一。一丈の堀をこえんと思はん人は。一丈五尺をこえんとはげむべし。往生を期せん人は。決定の信をとりてあひはげむべきなり。（物語集。東宗要等に出づ。）

一。いけらば念佛の功つもり。しなば淨土へまいりなん。とてもかくても。此身には思ひわづらふ事ぞなきと思ぬれば。死生共にわづらひなし。（禪勝房に示す御詞に見ゆ。）

以上二十六項。勅修御傳に出づ。

一。故上人の常の言に云。我は烏帽子もきぬ法然房也。黑白をも不知童子の如く。是非も不知無智の者也。只念佛往生を仰て信ず。釋迦は念佛して往生せよと勸め。彌陀は念佛せよ。來迎せんと仰られたり。此一事を信じて餘事を不知。

西宗要に出づ。

一。故法然上人の常に被仰候ひしは。三心を安く具る樣ある也。決定往生せんずる也と思取て申す念佛は。誠の心を至さんと敎る至誠心も此心に納りぬ。又此阿彌陀佛の本願に疑ひを不成。可決定往生ぞと思へと敎るに。深心も此内に納りぬ。第三の迴向發願心も。申したらん念佛を一脈に決定往生せんずるぞと願へと敎るに。迴向發願心も此内に納る也。明知ぬ決定往生せんと思切て申す念佛に三心は皆納る也と云ふ事を。去れば不習物なれども決定往生せんずるぞと思切て申し居る程に三心を具ることは安き也と。加樣にこそ故法然上人御房は敎へ給へり。

念佛名義集に出づ。

一。又上人の常の仰には。山の住侶なを契あるべし。況や辨阿は證眞法印の門人なり。彼法印は源空が甚深の同侶。後世菩提まで契たりし人の弟子にてありしが。源空が弟子となりて。八ヶ年受學せるなりと稱美せられける。

一。上人の常の仰には。源空は智德をもて人を化する。なを不足なり。法性寺の空阿彌陀佛は愚癡なれども。念佛の大先達として。あまねく化導ひろし。我もし人身をうけば。大愚癡の身となり。念佛勤行の人たらんとぞ。仰られける。

一。上人つねには。淨土の法門と。遊蓮房とにあへるこそ。人界の生をうけたる。思出にては侍れとぞ。おほせられける。

以上三項。勅修御傳。九卷傳等に出づ。

一。又先師常言云。武士與上人多到最後顯耻辱也。

出選擇要決。

第七輯　說話　諸人勸化の御詞

五六　諸人勸化の御詞

一。ある時上人の給はく。浄土の人師おほしといへども。みな菩提心をすゝめて。觀察を正とす。たゞ善導一師のみ。菩提心なくして。觀察をもて稱名の助業と判ず。當世の人善導の意によらずば。たやすく往生をうべからず。曇鸞道綽懐感等。みな相承の人師なりといへども。義にをいては。いまだかならずしも一準ならず。よく〳〵これを分別すべし。このむねをわきまへずば。往生の難易にをいて存知しがたき物也と。

造行集並に浄土隨聞記に出たり。東宗要亦粗〻之に同じ。

一。ある人問ていはく。色相觀は觀經の說也。たとひ稱名の行人なりといふとも。これは觀ずべく候か。いかん。上人答ての給はく。源空もはじめはさるいたづら事をしたりき。いまはしからず。但信の稱名也と。

決答授手印疑問鈔に出たり。

一。一時師語曰。聖道門者喩之如祖父履。祖父大足。兒孫小足。其履不可用也。今人欲追昔賢之跡修聖道門亦復如是。此道綽禪師之意也。或文如祖父履。

浄土隨聞記に出づ。

一。故法然上人の親りに敎へ給しは。三心も具る事安き也。善導仰せられたるを見拔

て是を心得つれば何なる無智の人も安く三心をば具るなり。能々欣極樂。能々阿彌陀佛を心に染て申し居たる程に自然に具足三心也。無智の人の申すは。主は我身に三心を具したる事をしらねども。三心を知りたる人の此人に付副て見れば。夜は終夜申し晝は終日に申す。近くよりて。問へば此人の申す樣は。相構て此度往生せんと思取て。此念佛を申し始てより更に怠る事片時も候はず。此念佛を申付られて難忘候也と。かく委く物語するを聞に皆此三心を不學不習。能々習ひたる人に少も不劣。此人は是自然に三心を具したる人也と能々知りたる人の見る也。其申す主は三心を具したりとは知らねども。譬ば主は盲て道をばえみざれども餘所の人の日あきたるが見れば。彼目暗が道を行くに不思其道を行き居る程に。行んと思ふ處へ行き得たるが如し。不知三心如目暗。念佛申すは道を行が如し。寢てもさめても極樂に生ればやと思ふは盲目の行んと思ふ處を朝夕に行ばやと思ひ居たるが如し。さて行ばや行ばやと思ふ志ねんごろなる故に。道に出て行き居る程に不慮の外に行付ぬ。其樣に生極樂と思ふ志し懃なるが故に。念佛申し居たる程に三心具足の念佛に申し合て。終には遂往生。されば能々極樂を志し願ふ人のためには自然に三心具足す

るとこそ。加様に故法然上人は敎へ給ふ也。此御詞の意。西宗要にも出たり。

一。故法然上人の被仰候しは。無間修が四修の中に能々念佛を勸めたる修にて有りと仰候也。

一。長時修は餘の三修に通ずる也。所謂恭敬修を死するまて修するは。是長時修也。無餘修を死するまて修すれば。是長時修也長時修とて別の心に非ず。餘修を四品に分ちたる是を云四修也。

一。法然上人御房は構て念佛の數多く申せと仰せ候也。男女は一萬二萬程可申。未出家在家の身なれば也。尼入道僧なんどは出家の身なれば。一色まして構て三萬返申し給ふべし。此外男も女も尼も入道も念佛の數多く申さん人は。目出度いみじき事にて候。其六萬返なんど申候し人をば。阿彌陀佛の付せ給ひたるかど貴き事なりとこそ仰せ候。

以上四項。念佛名義集に出たり。

一。法然上人の被仰たる樣は。詮ずる所彌陀を賴みて僞らず。眞實なる心は至誠心也。我身のわろきに付ても。深本願を信じて疑はざるは深心也。念佛に依て極樂に生る

事を得べしと思定たる心は廻向發願心なり。

一。一萬返なりとも一日一夜に申はつる樣に靜に申さば然べし。

一。念佛は尤稱名を本願とすれば。地體は高聲なるべし。されば。とて機嫌あしき時に申せば。聞人此をそしる。故に自他たがひに罪を受事也。此樣を心得べし。但我耳に聞ゆる程を高聲のぶんに取也。此の御詞。十二問答にもあり。但し文やゝ同からず。

一。上人御存生の時西國の修行者申けるは。佛の相好を常に心に懸て念佛の數遍少く申さんと。心は散亂て數遍多申候はんと何か勝れ候べきと。其時御前に候僧の云。心に常に佛の相好を思て申さんこそめてたかるべけれと。上人宣。源空は全さは思はず。本願のむなしからず。稱念せば必ず生るべしと思より外には。全心にかくる事なしと。云云。此の御詞。淨土隨聞記。勅修御傳等にもあり。但し文稱同からず。

一。上人宣。三心具足せぬ念佛は臨終惡と候。始に申たる樣に上ばかりをかざりて。人目には貴念佛者と見へんとして。心には眞實に本願を賴まず。いつはれる心あれば至誠心かけて往生すまじき者なり。たとひ眞實の心有て念佛申は至誠心有とも。身を疑。本願を疑て往生を不定に思は。深心かけて往生すまじき者也。たとひ眞實の心